煩悩障悲にほだされて、さかひ有るやうにおもふこと、淺間敷御事也。

極樂にゆかぬとおもふこゝろこそ
地獄におつるはしめなりけり

とよめり。夢にもおもふ事を見るは、二念をつぐゆゑなり。浮世にいかほども欲心も煩悩もなくてかなはず、たとひいかなる惡事なりともまた好き事なりとも、三世にましはると云ふ事も、當座に果して二念をつくべからず。かやうにはあれとも、なほ念おこらむ時は、水に涙のたつごとくにおもふへし。然らばあながちにやむべきと心にかけねども、すなはち醒むる也。本より凡夫の上にそそくべきあかもなく、嫌ふへき煩悩もなく、求むべき菩提もなく、爰にての振舞は、皆夢のごとくなりといつも心にかけば、たとひあさましき念おこるとも、香爐の上の雪のごとくなるべし。念おこるときは、かくのごとくに打ちやぶるを、金剛法劔と行者の戒法とは云ふなり。此理りを聞く時は、善にも惡にも二念をつくほど淺間敷事あらじと見えたり。法さへ捨つるに何ぞいはんや非法をや。前に申すごとく人と云ふものは、地水火風の四つなり。死する時膿血は水に歸る、あたゝまりは火に歸る、はたらきは風に歸る、殘る骨しゝむらは土に歸る、此四大空にふさまりたる時は、五体と





見て佛の形、

一 つく〳〵と生れぬ前をあんずるに
　こひしかるべき父母もなし

一 四大とて地水火風を合はすれは
　われを名けてほとけとは云ふ

一 おしよせてむすべは柴の庵なり
　とくれはもとの野原なりけり

一 世の中は市のかり屋のたへ〳〵に
　ひとり〳〵に歸りてそすれ

一 たえもせす本の水にもあらぬかな
　たゝ谷川のひとのよのなか

此歌の心は人といふものは死ずればもとの如く出來たえざるものなり、され共死してゆく者はふたゝびも歸らず。また谷川の水も落つるとも本の水はかつて落ちすとふ云心なり。

ねられすば起きていよかし梓弓
あたらぬまでもはづれざりけり

とてもねられずば起きて我生死の一大事をもきはめたまふべし。たとひ此世にてあたらず悟らずとも、機縁によりて未來はたつときさとりを得るなり。たとひねてなりともまつたくもなき迷ひをあんぜんよりは、我といふものは何國よりきたりて、また後は何國へ歸るぞとたちねにも措かず、あんじたまふべし。忽然と自然に悟を得たまはん事うたがひあるべからず、八萬の法をとなふとも主を知ずは何にかはせん。

けいのうやよろづの口をたゝくとも
わが主知れるひとはまれなり

のうと云ふは、四書五經を空におぼえ、詩を作りうたをよみ、萬能を我がものにして、萬能ある人も我が主を知らねば、成佛する事有るべからず。むかし善生比丘といふ人、聖教を我物にしてよみしかども、地獄に墮ち、提婆達多も、佛におとらぬ程のよき僧なれども、無間地獄に落つるなり。相撲へてはやく坐禪三昧をして主を知るべし。

歌



一 おもひでのある人さへに捨つるよを
かずならぬ身の何をまつらん

一 朝がほをあだなるものと思ひしに
花よりさきにおつるしら露

一 とにかくにたくみし桶のそこぬけて
水たまらねば月もやどらず

一 坐禪して死後のほとけを悟らずは
六道輪廻たれかのがれん

一 肉身を歸す佛になすてとは
唯せんじやうのざせんなりけり

一 ほとけ祖師教律勤行をからずして
すぐにさとるを禪僧といふ

一 利劍にてみなきりつくし見るときは
森羅萬像ほとけなりけり

一　おのつから求めず捨てずさしおかず
　　自由自在はかれが三昧

一　われといふ我を知らざる我なれは
　　我を我ともおもはぬはわれ

一　露よりもあだなるものと身を知りて
　　いのちのうちにわが主を知れ

此うたの心は、或は世中の無常の有様は電光朝露よりあだなるものなり。かゝるゆゑに、一生の榮花は風のまへの雲、百年の富貴は夢の中に取る寶のごとし。後生の道理をもつて、いそぎ心にかけて我が主を知りたまふべし。

歌

一　のちの世の遠きをねがふ人はみな
　　ちかきむねなる佛しらずや

一　ふゝゆふに有無せんあくにとまらずは
　　ひとを自在のほとけとはいふ





一　圓相のやぶれかゝみの身となりて
　　本のすがたはあらはれにけり

一　さしおかず死するに眼をつけて見よ
　　よぶにこたふる主のすがたを

一　きりはるゝときは月日のあらはれて
　　やまはもと山みづはもと水

一　ゆられ行く船に入江のわたりして
　　風にまかせる身こそやすけれ

一　見かくれて光りまされる玉なれば
　　死後のたからとなりにける哉

一　あらきらふ二つのこゝろある人は
　　みなすてとも地獄顛倒

一　もし人の坐禪せずしてこの法に
　　かなふは外道なりけり

一　善惡のたゝぬところを極むれは
　　地でく淨土といふきはるなし
一　一心の門ひらくれは法界の
　　草木國土ほとけなるべし
一　萬法は眼のまへにあらはれて
　　みな唯心の佛なりけり
一　百年のうちはわづかにとけまして
　　わが身の主をはやく知るべし

此歌の心は、せけんのありさまこそ、一年四季にかはりきのふにかはり、人をとふらひ、あすは我身の上なるべし、人の命のさだめなき事あしたに生れゆふべに死す。十二、十三、二十までに死する人はあれど、八十まですぐす人はまれなり。

一　本覺の如來といふもよそならず
　　さとりきはむる人をこそいへ
一　をしへをは法の道ゝとふみおきて





　　いそぎてまはれ死後のほとけへ
一　きやうけには佛の道のものがたり
　　まよひの人のみちしるべなり

右是夢窓國師御袋けんしんの申さるゝによつて、一心のただちを御しめし有りて、さとりを得たまふ法語也。

## 夢窓國師御詠

甲州河浦と云ふところに、山でもりして御座ありける庵の庭の雪むらきえで、人のふみたるに似たりけるを御覽じて、

　わが庵をとふとしもなき春のきて
　　にはに跡ある雪のむらきえ

相州三浦に、泊舟庵と云ふ庵をむすびて、住み給ひける比、よみたまひける。

引潮の浦とをざかるおとはして
ひかたも見えずたつ霞かな

鎌倉亞相幷に武衛直義朝臣鹽川寺の前に亭のありけるにて法談の後、嵐の山の花を見て、當座の人々歌よみけるに、

誰もみる春はむれつゝあそべとも
こゝろの花を見る人ぞなき

ちる花を梢のよそにふきたてゝ
嵐ぞしばしえだとなりぬる

なほも又あまた櫻をうゑばやと

花見るたひに見せん庭かな
見るほどは世のうき事も忘られて
隱家となるやまさくらかな

咲と見るまよひよりてそちる花を





風のとがとぞ思ひなれぬる
今見るはこぞわかれにし花やらん
咲て又ちるゆゑをしられぬ

征夷將軍尊氏西芳寺の花の下にて法談の後、人々歌よみけるとき、

心ある人のとひくるけふのみぞ
あたら櫻のとがをわすゝ

花のさかりに西芳寺に御幸なるべしと聞えけるが、打つゞき御差合ありてのび行ける程に、花のちりけるを見給ひて、

なほも又千年の春のあれはとや
御幸もまたて花のちるらん

武衛將軍禪閤惡源花の比、西芳寺に來臨の時、人々歌よみしとき、

ながらへて世に住かひもありけりと
はな見る春ぞおもひしらるゝ

ちればとて花はなげきのいろもなし

わがためにうき春のやまかせ
いきて猶ことしも見るにならはれて
またこん春をはなにまつかな
かずならぬ身をばあるじと思はでや
こゝろのまゝに花ぞちりゆく

征夷將軍おなじき春、來臨のとき、

山かげにさく花までもこのはるは
世のゝどかなる色ぞ見えける
この庭の花みるたびにうゑおきし
むかしの人のなさけをぞしる
さく花はいまもむかしの色なるに
我身ばかりぞおひかはりぬる

年たけてのち庭の花を見たまひて、

なゝそちの後の春までながらへて
こゝろにまたぬ花をみるかな

西芳精舍に御幸なりて、兩株の佳花歴覽ありける、翌日にたてまつられける。

竹林院内大臣 于時大納言

めつらしき君が御幸をまつかせに
ちらぬ櫻のいろをみしかな

贈答

心にちらぬ花のおもかげ
またもこん春をたのまぬおひが身を
花もあはれとおもはざらめや
行末のはるをもひとはたのむらん
花のわかれはおひぞかなしき

此年の九月晦日に入滅し給ひけり。

征夷將軍于時亜相並厩義詮西芳寺に來臨法談の後、庭前兩樹の佳花賞翫のついでに、人々歌よみけるに、

いつも見ばかくめづらしき事はあらし
ちりしも花のなさけなりけり
いさしらずにはの梢やかげならん
池のそこにもはなそさきけり
ふく風のえだをならさぬ春なれば
おさまれる世と花もしるらん

春の夜といふことを、

わけいつるひまもなきまで霞む夜は
おぼろゞ月のすがたなりけり

山居の郭公といふ題にて、

なきいでし軒端の山のほとゝぎす
花ゆゑの御幸にあへるおひが身に
千歳のはるをなほもまつかな

彌生のすゑにかへりて、花のさきける年、よみたまひける。





花もまた春のなごりをしたふとや
ことしやよひの末にさくらん

花ちりすきて後、西芳寺に將軍おはしたりしに、

さかりをばみる人おほしちる花の
跡をとふこそなさけなりけれ

また庭の花を見給ひて、

おなじくは風にしられぬ世しも哉
わがともとなるかくれ家の花

左武衛將軍禪閤相公羽林同道して來臨、法談の後庭前の花下において、人々歌よみけるついでに、

おさまれる世ともしらでや此春も
花にあらしのうきをみすらん
行春のとまりをそことしるやらん
花をさそひてすくるやまかせ

これやまた春の形見となりなまし
里よりかへるほどやまたるゝ

彈正親王光臨の時、題をさくりて人々歌よみける次に、

夕暮をなにいそぎけんまちいでて
後もほどなきみじかよのつき

武衛來臨の時、夏月といふ事を、

つきをみる心にながき夜はあらじ
ふけゆくうさは夏のとがかは

納涼、

くれぬよりゆふべの色はさき立て
木陰すずしきたにかはのみづ

題しらず、

やまあひの木の間はしらむ短夜に
なほ明けのこす谷かげのいほ





當時侍者にておはしましける比、圓覺寺をいて奥の方巡禮したまひて、うちのくさといふ山中に庵むすびて、はじめてうつり居給ひける夜、月くまなきを見給ひて、

のがれきていま見る時は替りけり
おもひやれかし深山邊のつき

二階堂出羽守道蘊亭にて、中納言爲相卿曉月房など參會、法談の後人々歌よみけるに、迷情之中假有生滅といふ題にて、

夜のほとも幾度いでゝいりぬらん
雲間づたひにいづるつきかげ

いづるとも入るとも月をおもはねは
てゝろにかゝる山のはもなし

いまははやてゝろにかゝる雲もなし
のがれ來てみるみ山邊のつき

いつまでとしもがれをまつ淺原木に
よはらぬ虫の音さへはかなし

くづはうらみ尾花はまねくゆふぐれに
こゝろづよくもすぐるあき風

瑞泉院の一覽亭にて、雪のふりける日、

まつもまたかさなる山のいほりにて
梢につゝくにはのしらゆき

雪中に、草木國土悉皆成佛の文をおもひ出で給ひて、

わきてこの花さく木をとうゑけるは
雪見ぬときのこゝろなりけり

初雪の日、將軍雪をふみわけて來臨し給ひしかば、

とふ人のなさけのふかきほどまでは
つもりもやらぬにはのしら雪
たはむほどしばしは枝につもりつゝ
ふたゝびにふるまつのした雪

天龍寺の方丈の集瑞軒より、雪のふりけるとき、嵐の山を見給ひて、



ゆきふりて花かと見ゆるあらしやま
松とさくらをさてかゝはれる

いづくにも心にかなふ山あらば、隱家にせんと思ひたまひける比、

世をいとふわがあらましのゆく末に
いかなる山のかねてまつらん

佛身無爲にして諸趣におちずと云ふ心を、

わすれては世を捨がほにおもふかな
のがれずとても數ならぬ身を

濃州虎溪といふ所に住み給ひける比、參學の人とふらひけるをいとひたまひて、

世のうさにかへたる山のさびしさを
とはぬぞ人のなさけなりける

又鎌倉山に人の住み捨てたる庵に、一夜とまり給ひけるに、軒の松風夜もすがらふきけれ。ば、

我さきに住みけん人のさびしさを

〔虎溪〕今の永保寺のある地なり。

〔そこくら〕箱根の底倉なり。

身にきゝそふるのきの松かせ

相模國そこくらといふ温泉に下り給ひけるに、其山の奥の人里もつゝかぬ谷の底に、山賤の庵のありけるを見給ひて、おなじくは世を捨てゝこそとよめる古歌を思ひ出で、又返しておもへば、世を捨てたる人は、いかにも世を捨てがほなるけがれもあり、此やまがつは中々法理にもかなへる心ちして、よみたまひける、

よのなかをいとふとはなき住居にて

なかくずできやまがつの庵

相州三浦の横須賀といふ所に、入海にのぞみて泊舟庵とて住みたまひける比、中納言爲相卿とふらひ來られたりけるを、舟にて送りいだし給ひけるとき、よみたまひける。

かりにすむいほりたづねてとふ人を

あるじがほにて又おくりぬる

又三浦の庵を捨て、綱州へおはしましける時其庵の檀那三浦安藝の前司貞連がもとへつかはされける。

うかれいづる事をうらみとおもふなよ





ありとても又ありはてんかは

濃州清水と云ふ所に、庵結びて住みたまひけるを、すてゝいでたまふとて、

いく度かかく住み捨てゝ出でぬらん

さだめなき世にむすぶかり庵

右武衛將軍、西芳精舍に來臨、法談の後人々歌よみける次に、

おのつからとひくる人のあるときも

さびしさぞそふやまかげの庵

花室と云ふ尼寺の長老、我見解によそへてよみてたてまつりける。

をちこちの海とやまとはへだつれど

おなじ空なるつきをこそみれ

御返し

ところからかはる氣色のあるものを

おなじ空なるつきとみるかな

綱州の退耕庵に住みたまひける時、ある人來つて此住居のめづらしさに、心のとまるよし

を歌によみたりし返事、

めづらしくすみなす山のいほりにも
こゝろとむれば浮世とぞなる

擧足下足皆是道場といふ心を、〔風雅入〕

ふる郷とさだむるかたのなきときは
いづくにゆくも家路なりけり

題しらず、

世にすむと思ふこゝろをすてぬれば
山ならねども身はかくれける

さとりとてつねにはかはる思ひこそ
迷ひのなかのまよひなりけり

惜めどもつゐにはてあるあだし身を
かねて捨てぞかしてかりける

我のみとかしてがほなるはかなさよ





はかなかりせば賢からまし
捨つるとて人をうらむる世はあらじ

何にさはりてうきをわふらん
ふくたびにはやめづらしき心地して

きゝふるされぬのきの松かせ
甲州ふゑふき川の水上に住みたまひける比、

ながれては里べもいづるやまかはに
世をいとふ身の影はうつさし

世尊不說の說、迦葉不聞の聞と云ふ心を、

さまゝくにとけどもとかぬ言の葉を
きかずして聞く人ぞすくなき

成佛なしといへるこゝろを、

結ひしにとくるすがたはかはれども
こほりのほかの水はあらめや

無輪廻中妄見輪廻といふ心を、

やまをてえ海をわたるとたどりつる
夢路はねやのうちにありける

彈正親王西芳寺におはして、法談の後歌よみたまひける次に、

さすがまた人のかずなる身となりて
おひにはもれぬ年ぞつもれる
思ひなすこゝろからなる身のうさを
世のとがとのみ歎ちけるかな

釋教、

しるべとて深きしほりをたのむてそ
まことの道のさはりなりけり

無常の歌をすゝめける時、

あだなからこゝろに殘るおもかげそ
烟りとならぬすがたなりける



後醍醐院御時、金剛山と云ふ所には、合戰ありけるに、公家武家の人々おほく命をおとしたるよし聞えける比、よみたまひける。

いたづらに名にかへてだに捨る身を
法のためにはなどをしむらん

誹諧、

いもの葉におくしら露のたまちぬは
たれや隨喜のなみだなるらん
月かげにまよひあらそふひとあらば
さたの外なる身をいかにせん

花なしの成りたりけるが、春の暮まで庭に殘りたりけるを、折りて將軍へたてまつられける時、

櫻ちりて花なしとてろおもひしに
なほこのえだに春はありのみ

有馬の温泉に浴したまひける時、其山のふもとに堂のありけるが、ふるく損して雨もたま

らずもりけるを御覽して、

寺ふりてあめのもりやとなりにけり
　ほとけの仇をいさやふせがん

土岐伯耆の前司入道存敎、よみたてまつりける十五首の中に、

をりにふれ時にしたがふことはりを
　そむかぬ道やまことなるらん

返事

ことわりをそむきそむかぬふた道は
　いづれもおなじ迷ひなりけり

夢の世とおもふもいまのまよひかな
　本のうつゝもなしと聞くには

夢のなかにゆめとおもふもゆめなれば
　ゆめをまよひといふも夢なり

はなのいろ月のひかりをあはれとも





みる心にはいたつきもなし
さかぬ花いでぬ月ぞと見るときは
　こゝろにかゝる春あきもなし

いづくより生れくるともなきものを
　かへるへき身となに歎くらん

こし方もゆくすゑもなきなかゝらに
　うかれても又さてやはつべき

まぼろしにしはし形をうくならば
　何とさためてとがといふべき

まぼろしにしばし形をうけけると
　思ふもげにはとがとしらずや

いとはじなもとより空にすむつきは
　しばしへだてゝ雲かゝるとも

雲よりもたかきところに出でゝ見よ

しばしも月にへだてありとや
いまこゝにむかふ山路のほかならで
たづぬる方をまよひとやせん
目にかけてむかふ山路のおくにこそ
ひとにしられぬ里はありけれ
こゝろをも身をもたのまず今はたゝ
あるにまかせて世をや送らん
なにとなくあるにまかせてすむ人も
さすが浮世はわすれざりけり
聞くは耳見るはまなこのものならば
こゝろは何のぬしとなるらん
きくは耳みるはまなことおもふなよ
我にあまたのぬしはなかりき
はるそとてもえしも草のいろなれば





かれ葉の秋もなにかいとはん
思ひなすこゝろよりこそかはりけれ
おなじ草葉のはるあきのいろ
よしあしのふたつの道はたえはてぬ
こゝろとてけに姿なければ
こゝろとてげには姿もなきものを
よしあしとなと思ひわきけん
なく鴨のさむき夜すがらかづくらん
こほりの下のこゝろしらばや
なく鴨のかづくこほりのしたまでも
けにはかはらぬ冬の夜のつき
住みはてんやまの奥までともなへど
月にろかねでちぎりおきけん
世をすてんのちとは月にちぎるなよ

あはぬことばの末もはつかし
かゝる身をむなしき物と聞くにこそ
世のうきときは思ひなくさめ
世のうさになくさむといふ言の葉に
身を忘れざるほどぞしらるゝ
あはれはや柴のいほりのおくやまに
ありとも知らぬ世をすぐさはや
身をかくす庵をよそにたづねつる
こゝろのおくに山はありけり

題しらず

このほどは思ひおりつるぬのひきを
けふたちそめて見にきつるかな
きる笠もおへるたきぎもうづもれて
ゆきてろくたれ谷のほそみち



〔佛國禪師〕名は顯日、高峯と號す、後嵯峨天皇の皇子なり。正和中寂す。

世をそむく後はなかめぬことならは
月にしはしや身ををしまゝし

## 佛國禪師御詠

題しらず

この法のうへみぬわしのやまさくら
花をおしへのほかにつたへて

見解の聊かありける僧によみてたまひける、

折りえてもこゝろゆるすな山さくら
さそふ嵐にちりもこそすれ

なすの山中に庵むすびて住みたまひける比、

月はさしくゐなはたゝくまきの戸を
あるしかほにもあくるやま風

ある人親の百ケ日の佛事に請し申して、講經ありける折ふし、軒端の梅に鶯の囀りければ、

〔那須〕下野の那須なり、此時大悪國師筑の横獄にあり、天下の學徒併せ稱して二甘露門といふ。

とりもあへすよみたまひける、

なきひとのひかすもけふはもゝ千鳥
なくはなみだのはなのした露

那須の庵にて月を見給ひて、

しげりあふみねの椎柴ふきわけて
かせのいれたる窓のつきかげ

題しらす

いづる嶺入るやまのはのとをければ
露にやとかるむさし野のつき

夜のほとは霜によはりてきり〳〵す
日影にとくるつゆになくなり

本來成佛、

雲晴れてのちのひかりとおもふなよ
もとより空にありあけの月



御入滅ちかつきて、月を見たまひて、

月ならはをしまれてましやまのはに
かたふきかゝる老のわか身を

月光似雪と云ふことを、

月かげは木のもとことにむらきえて
ふむにあとなき庭のしらゆき

題しらす

いつくよりつもりし雪そひさかたの
くもにあまれるふしのしは山

寄鳥戀といふ題に、

わが戀はかりはのきしのくさかくれ
あらはれてなく時しなければ

那須の山中に庵をむすびて、住み給ひける比、

われたにもせはしとおもふ柴の庵に

なかはさしいる嶺のしらくも

建長寺の長老に、西勝園寺の禪門より請し申されけるを、辭したまひて、

かくていまおもひ入江の身をつくし
世にさしいでゝ何にかはせん

あまりにしげく請し申されければ、ぢうし給ひて後よみたまひける、

そま山を出ですはいかでまきはしら
ひとをわたせる橋とならまし

題しらす

かりそめの夢をまことゝおもひつゝ
かしてかほなる人そはかなき

よしあしのこゝろもなくて見る時は
この身はもとの姿なりけり

廣天巖得解おはしましける時、よみてたまひける、

のでゝろのまたやはらかぬ牛を得て





うちたゆむなよまきのふるふち

輪廻と云ふことを、

あかつきのうき別れにもこりすして
あふはうれしき宵のたまくら

工夫用心の樣、僧のとひ申しけれは、

まもりとはおもはすなから小山田に
いたつらならぬそうづ成けり

題しらす
〔風雅入〕

夜もすからこゝろの行衛たつぬれは
きのふのくもにとふ鳥のあと

『弓もおれ矢もつきはつる所にてあたりはづれをいかゝさためん』と、ある人よみてたてまつりけれは、

弓もおれ矢もつきはつるところにて
さしもゆるさてしはしいてみよ

題しらす

吹きやみてしはし夢かせまつのかせ
かへらぬ老のむかし見るほと

公案提撕の心を、

立たぬまとひかぬ弓にてはなつ矢は
あたらすなから外れさりけり

題しらす

あまのはらふみとゝろかしなる神の
音にもなとかおとろきもせぬ

秋の夜のなかきねふりのさめしより
よそには聞きぬ荻のうはかせ

さゝかにの糸のかよひちたねはてゝ
かゝるかたなきわかこゝろ哉

ふれはまつつもらぬさきに吹すてゝ
風あるまつはゆきおれもなし



〔佛德禪師〕名は本元、元翁と號す。高条を襲して得度し、南禪寺に董し、のち美濃虎溪山に住す、正慶中寂す。

## 佛德禪師御詠

題しらず

いとひつる山路のおくよそれよりも
身をわするゝや深きかくれ家

わがこゝろおもてに見ゆる物ならは
いかにすかたの見惡からまし

いつれをか我とはいはんかりにたゝ
つち水火かせあはせたる身を

寛文四甲辰年三月上旬

# 假名法語 終

# 大智禪師發願文

## 解題

大智禪師の行實は、大智法語において述べたれば、此に贅せず。

發願文は、その名のごとく、更に架説するを須ゐず。たゞ禪和子たる者また禪師のこの大願なかるべからざるなり。

# 發願文

大智禪師

願はくは我れこの父母所生の身を以て三寶の願海に回向す。一動一靜、法式にたがはず、今身より佛身に至るまで、その中間に於て、生生世世、出生入死、佛法を離れず、在在所所に廣く衆生を度して疲厭を生せず。或は劔樹刀山の上、或は鑊湯爐炭のうち、唯たこの正法眼藏を以て重擔と爲して、隨所に主宰と成らん。伏して願はくは、三寶證明し、佛祖護念し玉はんとを。

發願文終

# 峩山假名法語

## 解題

峨山法語は、能登諸嶽山總持寺の二世峨山禪師の垂示なり。日本洞上聯燈錄を按するに、禪師、名は紹碩、峨山と號す。姓は源氏、能登羽喰郡の人なり。年甫めて十六にして、叡山に上り出家す。寶山國師の加賀大乘寺に住するを聞きて來り參し、遂にその印可をうく。正中年中、總持の席をつぎ、歷應三年、永光寺に董蒞し、幾はくもなく退て總持寺に歸る。至るところ衲子相與に武を交ゆ。江湖の雲水、輪下に到らざれは、本色の行脚とならざりき。鹽山の拔隊禪師、黑川の月庵禪師なども、包を腰にして禮謁せり。人を得るの盛なるもの、禪師に踰えたるなしといふ。貞治四年十月二十日の夕、諸徒を遺誡して寂す。門下に大源、通幻、無端、大徹、實峰の五神足あり。

# 假名法語

## 峩山禪師

學人始めて入門の時、捨離すべき事、語、默、動、靜、總是、總不是、第一に語と云へるは、或ものゝ思はく、祖師の道と云へるは、擧着する外に有るべからず、一兩語を知り得て、人の道を問へは、庭前栢樹子、麻三斤、即心即佛、非心非佛と云つて、胸中に當る工夫なし、與麼なちは、古德の公案夢にも見ず、所以に雪竇の云はく、樹上に答へ易く樹下に答へ難し、暫く木に上りて一句を用ふる時、口にあつかりてんや、語を用ふへからず。第二に默と云へるは、或者の思はく、夫れ西來の祖道は預るべからず、教外別傳の旨也、緩に口を開けば、落二第二頭一、如何に況んや答をもちひんや、十語中一默に如かずと云へり、十度云つて十度ながら當るとも、全く言語を難レ正、一默には如かずと識得して、口瘖擔に似たり、是故に德山圓明大師の云ふ、三世の諸佛、口掛二壁上一猶有二一人一呵々大笑す、此人を識得せば一生參學の事了れり、亦此旨を識得して、默を用ふべからず。第三に動と云へるは、或者の思はく、夫れ宗旨は別に有るべからず、行住坐臥造次顚沛に、山門頭に合掌し、

〔庭前栢樹子〕趙州因僧問、如何是佛、州云、庭前栢樹子。
〔麻三斤〕僧因問洞山、如何是佛。山云、麻三斤。以上二話共に會元に見る。

佛殿裏に燒香す、此人を見るに更に軌則なし、坐底は坐ながら會得し、立底は立ながら承當す、總て此の如くならば、見ずや、先德の云、禪は臥にあらず、動を用ふべからず。第四靜と云へるは、或者の思はく、佛經と云へるは、一切心念を坐斷して明に亦得る也、譬へは青天の更に雲なきが如く、湛水の曾て波なきが如し、繞に思量分別を回らせば、塵勞に落つ、總て與麽ならば、見ずや、精明湛水搖かざる處に到ることを得るとも亦須らく轉却すべし、靜を用ふべからず。第五總是と云へるは、或人の思はく、夫れ西來意と云ふは、總て外に尋ぬべからず、所以者如何となれば、人に皆是佛性の躰を顯しけん、全く用を覺則す、天は自ら高く、地は自ら低く、鴨の脛は短しとて續くべからず、鶴の脛は長しとて今亦斷つべからず、更に一法として掃ふべき物なし、思量分別に落ちず、故に皆是也と可レ笑、古聖の云はく、乾坤大地百雜碎と、全く意根を坐斷す、大死人の如くにして見よ、萬法何の處にか有らん、總是用ふべからず。第六總不是と云ふは、或人の思はく、夫れ祖道は一切の理に落ざる處、親しき也、繞に前へ進み後へ退けば、皆背觸す、如何ともせられざる處に眸を着けは、無得無失と見、更に眸をかけず、譬へは老鼠牛角に入るが如し、出身の處なし、もそ〳〵たん〳〵として因果を撥無す、所以に圓悟の曰く、進めば理に迷ひ、退





けば宗に背く、不進は有氣死人也、見解をなさば有氣死人也、只手を千尺の懸崖にさつして見よ、十が八九は忽然として皆得ん、必ず佛祖向上に換骨の道あり、一句如何、清秋老兎呑レ光後、湛水蒼龍脫レ骨時。

達磨西來より此方、文字のいとなみを捨て、敎行證を立せず、立處に昔時の我を明らむ、夫れ我と云へるは、單直にして不疑是れ也、其單直と云へるは、未だ西天に生せず、東土に我等無りし時、迷もなく生死の身なるべき者なく菩提を願ふべきものなし、所以如何となれば眼に色を見、耳に聲を聞き、佛よりも不レ傳法によりても分たず、僧に依ても習はず、天具具足の眼睛也。豈に是れ修證の力ならんや。只見をやめて看よ、自身其なるべし、雲岫を出づるもとこれたくみなし、明月流れに隨ふ、豈に是れ碍へられんや、恰も其明鏡に臺なく、皓玉瑕なきが如し。盡く十方是一顆の明珠の如しと云へり。圓滿無際にして、缺けたる所もなく餘りもなし、譬へば虛空の背もなく面もなく角もなきが如し。其底を究むるにあまたの品有るべし、一念本無にして、曾て諸緣の我を迷はすことなく、心性は月の如くにして、物にふるれどもおされず、此人巧みなくして進み退く、枯木に華開、泥牛吼月、木馬嘶風が如し。顯れたる面目より外に、終にことわり有ることを不レ知、是れ無心

の境に落つ。豈に是れ道ならんや。或は又、心源空寂にして、晴れたる空の如く、清水波なきが如し、生死去來の姿なし。今生死と云へるは空花なるが故也、起二氷上一波の暫く機を得るが如し、皆本に歸ずれば、跡なく形なき物なりと究むる、これ人の力なきに非れども、道にうときことは千萬里を隔つ。豈に是れ道成せんや。此空寂の躰をも廻る事を得んと思はゝ、是れ此中に又更に空ならずして物を承くる者は、如何なるべきぞと還て工夫す、此時空相を對せずして、只其眞實なる物のみあり、是れ天地の先に先つて天地をうみ、凡聖の前に在て、大千沙界は、伊か皮毛戴角にして、常に大圓覺の鏡にして、光を放つて地を動し、耳の中に聲なく、邊際の佛事をなし、眼中に在ては形無くして塵刹微塵刹の色を分つ、谷の聲、山の色、皆是本源眞全躰也、豈に何れの處にか差別の境界を得ん。終日喫すれども一粒の米をも不レ費、終日說けども一句をも不レ說、是れ無位の眞人の淵底澄照の喻へなるべし。其全躰を云ふ時は、唯有二壁照月一更無二吹葉風一とも云へり。其名の云ひ難き時は思ひやる江南三月の裏、鷓鴣鳴く處百花香しと云へり。此二に不レ渡處を云はんとては、天曉にも不レ露夜半正に明也と云へり。是れ正法眼藏涅槃妙心とは、この心なるべし、阿耨多羅三藐三菩提の法、皆是れ其ことわりより出づ。唯有一乘の法なる故に、直に人心を指して海底を蹈まず、立處に久遠實成の宗を示す、嘗て思惟を不レ入、心を翻へすに淵底し畢れり。悟を待て何にかせん。心を通する者は知音あらず、如何に況んや、佛と說き道と說かんや。此は是れ三世の諸佛歷代の祖師も不二呈露一、千聖も不レ傳、佛未生の時、摩訶陀國に法輪轉し、達磨西來せざる前に、少林に妙訣ありと云へり。是れ如何なる道理なるべきぞ、山高けれども白雲の飛ぶことを留めかたく、竹密しけれども流水の過ぐる事を不レ妨、如何に況んや。永夜の清宵是れ何の心行とかすべき。花の色黃なる、松の色綠なる、誰か力より染出せる、心の色となれるは、如何なるいはれよりか分れたる、實知見の躰は、如何なりし時か忘れんや、又心となるそこばくの姿なりし、幻の人の分れける、其故を不レ知は何としてか此生つひに生れず、此皮肉骨髓つひに不レ死故を辨へん、此故を不レ明は、倩女の離魂すと云へる公案の心、夢にも知るべからず、人々悉く因緣より來らず、衆法合成の身也、法は合成と云はれず、風は是れ何くよりか分れたるぞ、天地は是れ何もののなれる處ぞ、但此一段の光明より外の色相なし、故に照二東方萬八千土一、下至二阿鼻地獄一、上至二有頂天一、皆如二金色一と說き玉へり。故に六祖の云、是れ幡の動くに非ず、是れ風の動くに非ず、是れ心の動く也との玉へる、是心なるべし。百千三昧無量妙義唯一法より起れ

〔倩女離魂〕、この事詳に正燈錄。剪燈新話に見たり。五祖演禪師問僧曰倩女離魂、那箇是眞底。

り。謹んで申す、參禪人、一法にも因らざれ、萬法にも動せざれ、威音未生の時無爲閑道の路あることを得て、初めて大安樂なるべし。錯て途中に向つて求むるは、道人の悲むところなり。



# 僧生假名法語

## 解題

僧生法語は、濃州靜泰寺の開山僧生禪師の垂示なり。日本洞上聯燈錄を按するに、禪師名を館開といひ、俗姓徳田氏、能登の人なり。明峯禪師に依りて祝髮し、その證をうけ、初めは大忍に住し、ついて永光寺に移り、山を靜泰にひらきぬ。嗣法には、上首徹堂通禪師あり。聯燈錄に、その示寂の年を記さず、おもふに峨山の後ならむか。

# 假名法語

僧生禪師

語、默、動、靜、摠是、摠不是、此六句の外に一句を云はゞ、古人云はく、語を云ふは、語中語にあるを死句と云ふ、語中に語なきを活句と云へり。死句とは言に立つるを云ふ、活句とは舌に落ざるを云ふなり、此語に落ざるを活句なりといへども、爰に於ては不用也。默と云ふは、詞を止めて默然たる也、たとひ維摩の不二門の默然たるに相似れども、此に於て用ひず。動と云ふはうごく也、古人或時は拂子を拈し、或時は柱杖を立ること、全く動不動の內に落ちず、然りと雖も此に於ては不用也。靜と云ふは閑なる也、起居動搖を止めて、手に取らず、足に蹈まず、目をましろがざる也、眉を上ぐる事なくして萬相を止め、諸緣にわたらざる時也、爰に於て不用。摠是と云ふは、悟を開きて迷悟の內に留らず、衆生は迷悟あることを知らず、凡聖の二見にわたらず、然れば衆生の迷と云ふも終に迷悟の內に居らず、佛の悟と云ふも、生佛の二途を離れたる故に、佛も善惡不二邪正一如と說き玉へり。山は青く水は碧也、此時是れを指して、迷と云ふべき處なく、悟と名くる道理なし、鷄塞して木に上

り、鳴寒して水に入る、皆是諸佛の妙理也、偏に佛祖の直指也と心得る、於に此又如是見解を用ひず。摠不是と云ふは、佛の出世は、誠に衆生の惑ひのこと始め也、されば雲門和尚も、佛の生れ玉ひし時、我若し有らましかば、一棒に打殺して狗子に與へて喫せしめんと、云へり。然れば佛見大に用ふべからず、衆生亦本より、惑へるにより眼に見、耳に聞く處悉くあやまり也、心に分別する處、皆善惡共に妄念也、然れば善惡を思議すべからずと云ふ、如是生佛の二つを捨て、善惡憎愛是非得失を離れて、別に見るべし、是れを正見と云ふ、此に於て此見解を用ひず。此六句を離れて一句を云ふべし、而して後一々の句の內に句にて一々に句を云ふ也、如レ是鍛錬して純熟し畢て、更に一句を云ふ、若し能く如是なれば、語る時は鴉鳴鵲噪は、皆是微妙の音聲にして、此外妙章玄談あるべからず、默の時明に說き、說く時まさしく默然として更に說かず、默の中に坐せず、前に進み後に退き、出堂入堂、蹤跡の人に與へて見せしむることなく、仙聖も携ふべからず、萬事を放下し、諸緣を休息して、動靜して邊際を越え、爰に於て取る事を得されは、摠是の見解にあらず、捨ることを得ざれば、摠不可得にして行し去る。然らは南臺に靜坐す一爐の香、終日凝然として万事忘ず、已心をやめ妄想を除くに非ず、都て事なしと云へり。



# 水鏡目なし用心抄

## 解題

水鏡は、一休禪師が盲俗を諭さむために物せられたるもの、言近くしてその旨遠く、初學に益あらむか。後世この書に註を加へ、異本もあまたあり、今手島堵庵のこの抄を取りぬ。けだし簡にして盡くせるを以てなり。

一休禪師の傳は、かつて記したれば此にもらしつ。なほ詳なるを知らむと欲せは、高僧傳あるは龍門夜話などを見るべし。その遺事逸話は、俗書にも散見せり。また堵庵は、正眼國師の佛性不生不滅を究めたる人にて、世のつねの謂ゆる「心學者」にはあらざりき。是はその道話を見ても明なり。

# 目なし用心抄序

いかなるをか目なしといふ、目とは我なり、我とは私案なり、私案なければ、身を忘れて自性の光のみあきらかにして、我なしといへる言葉也、我なければ、何の惡をかなすべき、かの石川五右衛門とかや、閻魔の廳に付所なしと悟道を踏み迷ひしは、人我をもつて自天然のひかりをつぶせしものなれば、此世から地でくの釜へふみかぶりしなり、是を見かれをきゝて用心あれかしと、一休樣の夢想なりとある人かたりき。

堵庵

# 水鏡目なし用心抄

一休禪師

## 目なしどちく

〔注抄〕

めなしとは、人家の私案なしといふ名にて、本心のことなり。どち〳〵とは、たづぬる言葉なり。自性の光、これを心の官は思ふといふなり。此思ひが無我を求むるなり。

## てゐについてましませ

私案をすつれば、活きながら身は覺にぬもの也。此時は我即虚空に似たり。其虚空が萬の音聲を聞くなり。これは我なきに何が聞くぞと明け〳〵れさがし求むれば、一旦忽然として我なき故よ〳〵聞くといふことを知る也。其知る智恵もまた、更に智恵あるにあらず、あらずとてひとへに知らぬにもあらず、此智をたとへば人常に顔は忘れてゐれども、顔なきにあらざるがごとし。

そも〳〵皆人たちの、悟とやらんいふとを、悟るならひ、はじめに父母もなき、とつと已前の我身は、なきものぞ、いへきかんといふ。

父母とは天地なり。天とは心なり。地とは身也。とつといぜんとは、人常には身心ともに忘れて居るをいふなり。

そのわすれてゐる所をいへとなり。

何として知らぬことが申さるべく候や。たゞへんてつもなきもの也と思ふべし。

知らぬとは、忘れてゐるをいふ。忘れてゐれば、我といふ目はなきなり。其所はいはれぬなり。故に申さるべく候やとなり。あやまりてへんてつもなしとも有りともわもはゝ、それはとや我といふ目ありなり。又知らぬとて、何もなしといふ事にはあらず。忘れて居ても、此身が消えたるにもあらず。心もまたかくのごとし。

古人曰、空寂以爲二自身一無レ形二色身一靈知以爲二自心一無レ記二念妄一とあり。自性の靈光本分の知見は、絶つとも捨てらるゝものにあらず。學者のやまひは、知見に見をたて、心に心を生するを以て、頭上に頭を安するといやがる也。根本生れつきの外に、我見を起すを目とする也。目なしとは、其我目なしといふと也。我とは私知のはからひ、私案妄分別也。

たとへはよし野初瀬の花もみぢ、いろ〳〵に咲いて散りて、又本の根にかへるがごとし。

これ人の念のおこり又さるも、天地の間に四氣の流行するも、同じ事なり。此はたらきをさする、主人公をなしとせんや、能〳〵工夫有るべし。人念〻の起る思ひは、目なしのはたらきにて、正念とも無念ともいふ也。私案は思ひの邪になりたる也。それを妄念とも有念ともいふなり。何とて思ひを無念といふなれば、正しき念慮は、





目なしにさからわぬゆゑ、覺えなきがごとし。一を擧げていはゝ、歩行するに、思はずして歩行はならず、思ふといへども、更に思ふとは自身も覺えぬなり。それゆゑ正念とも無念ともいふ也。また其足少しも行くまじき方へふりむけば、直に思ひが邪になりて目なしにさからふ故、覺える也。是れを念妄とも有念ともなづくるなり。無念といへばとて、念なしといふとにはあらず。

ほんらいもなきいにしへの我なれば死ゆくかたも何もかもなし

本來もなきとは、其はじめを知らずといふ事也。はじめを知らざれば、終りも知らぬ也。いにしへの我とは天也。死にゆくかたもなしとは、天何としてか去來すべきゆゑと也。天とは目なしのかへ名なり。

ゆく水に數かくよりもはかなきは佛をたのむ人ののちの世

ゆく水に、數々の事をくりかへし〳〵書くとも、何ぞ益にたつべき、無益なりとの事。也とに佛を頼みにして、惡などをなすは、大にはかなしと也。つれ〳〵に萬の事は頼むべからず、身をも人をも頼まざれば、是なる時は悦び非なるときは恨みずとかや。只目なしにまかせにして、頼み事をやめよと也。さりとて神佛を信ぜずといふにはあらず、神佛を信せぬは、直に我が力を頼みにするものにて、彼の我慢大目ありなり。

とへばいふとはねばいはぬ達磨その心の中に何かあるべき

問はねばいはぬは、なきに似たり。とへばいふからは、心の中ひとへになしとはいふべからず。

人死ぬるといなや、やきもしうつみもし、のけてなくなるとおもへば、又もなくならずして、たましゐといふもの、來世どやらんへゆき、あらおそろしや、ゑんまわうが手にわたりなば、しやばにてつくりしつみを、くろがねのちやうにつけて置いて、鬼に見せて、これほどの罪人なり、呵責せよといふとき、

人死ぬるといなや燒もしうづみもしのけてなくなると思へばとは、人惡事を爲になしたふせて、しすましたりと億ふ邪念をいふ也。又もなくならずしてたましゐといふもの來世へゆくとは、第二念を、目なし第一の臣下正念といふ閻魔が幸なれば極樂へ通ず、惡なればゆるさぬ也。しやばとは現在也。をしやにくやかあいやと樣々の事に身の私をして、主親をなかせ、夫婦互にむこ〳〵情もなく、兄弟あらうひ、友たちに眞實をうしなひ、世間へ無理非道をし、都て慈悲憐愍なく、愚痴ゆゑ人のあるまじき事をいふたりしたり、忽ち畜生道へ落ち、ほしがるまじきものを食り、萬に慾ふかくして餓鬼となり、身膝手をして塵たていかりて、瞋恚の焰をもやし、修羅にたちいり、黑繩、衆合、炎熱、紅蓮、叫喚、無間あらゆる地獄を、己が胸中にくり出して、くるしむありさま、言ふも及びがたし。これは他人の知らざる所にして、自ら知る所也。微塵も惡を思へば、直に目なしといふ爭はりの明鏡にうのかげあらはるゝ也。まして惡をなすをや、其かげ再びはげがたし。是を鐵札につけるといふ也。鬼とは、色受想行識の五蘊なり。此身いろ〳〵の事を受るにつけて、さま〳〵私想し、あしきことを行ひ、何かと身の品





貪のみして、意識に執着ふかきゆゑ、胸中顚動錯亂するが、鬼のせめくるしむるといふもの也。故に罪の重きはどく〳〵にせめて、少しもゆるさぬ也。恐るべきことなり。

どく藥へんじて、藥となるなれば、罪のおもきは、佛にやならん。

一切衆生も用ひやうにて、藥となる也。故に藥も又用ひやうあしければ、毒となる也。罪も同し事也。罪も至りて重き時は、却て佛ともなるなり。罪は貪嗔痴の三毒より大なるはなし、佛は衆生を救ひたしと貪るなり、衆生に惡をさせしと怒り、平常衆生を苦にし給ふは痴愚也。三毒もすてれて甚しければ我なし、故に佛になるとは云ふなり。

作りおく罪の須彌ほどあるならばゑんまのちやうにつけ所なし

前にいふごとく、佛の三毒は、大慈悲なるゆゑ、うの慈悲を、あゆみ山にたとへたり。されば正直の閻魔何とて帳につくべきぞ。一日克ヒ己復レ禮ときは、天下仁に歸するかや。況んや大惡大悲の佛、誰をかにくみ誰にかほこらん。悉く迷ひに克ちさづて、克つべき迷ひなきを仁とも佛ともいふ也。佛とは迷ひのほどけしといふ事也。迷ひとは人我の私をいふなり。

よくものをあんずるに、地獄もと遠からず、鬼といふは瞿曇なり。一代藏經は、皆人間をいためんがため也。あらにくの釋迦どのや、いろ〳〵のうそをついておいて、

よくあんずるとは、目なしの光明にてたらし見るなり。地獄も遠からずとは、外になし己にありと也。鬼といふは器量なりとは一切假なり。或は鬼とも人とも佛とも餓鬼ともなるなり。二代藏經は皆入げんをいためんが爲めとは療樂へんじて藥といふに同じ。いためずば何としてか本の樂にもどるべき。たとへば怪我にて、手を折り足をくじきたるものを療治するときは、引きのばし或は打ちつくる故、いたみてたへがたけれども夫れにて、後は樂になる也。本たがひたる人を直す經なれば、いためるなり。あらにくの釋迦どのとは、歎美にて大に歎德し、ほめたる詞なり。いろ〳〵のうそとは、皆空なり。

それを誰が問へば、よしなの問はすかたりや。

誰が問へばとは、問ふ人なしと也。これ空也。問はずがたりとは假也。これ空とせんや假とせんや。空假ともにあたらず、中道實相是れ何れの所か。中道實相は、目なしのかへ名なり。

草木さへ佛になるとなれば、人間はいふに及ばず、むかし〳〵あつた釋迦阿彌陀も、みな佛じやといふたとおたが、うそをつかれたとのふ。

草木も人間も、むかしの釋迦彌陀も、皆假なり。おたがうそをとは空也。つかれとは、佛といふ名も假なればなり。

うたふも舞ふも、のりのこゑ。

これ中道實相也。然れどももしあやまりて、これを目なしと思はゞ、早目が出來たりと知るべし。



（一字不說）世尊曰、我れ涅槃會に於て得道の日より涅槃の夕に至るまで一字不說と。是れ言語道斷心行處滅の境界なり。

父母未生いせん本來もなく、ゆめ〳〵佛法とやらんいふ事もしらず、なに〳〵ならんとあんすべからず。たゞ何でとも云ふらぬ心が佛なり。其佛と云ふものは、有るにもあらず、無きにもあらず、さとりぬれば、ありともなしともいふらぬ事なり。一切八萬餘經を見るに、佛にならん心はすてしもなし。とかくふるてよみなを〳〵おなじことなり。

一切餘經を見るに佛にならん心は少しもなしとは、言語同斷なり。教外別傳不立文字なる故、釋尊も四十九年一字不說とかやの給ひし也。然れども一休和尚かくの玉ふも、古聲の御影なりと知るべし。鬼角とるべからず、拾つべからず、默識心通すべし。

はしなうて雲のそらべはのぼるとも瞿曇の經を賴まれはせず

賴むべからざることは、前に行水の歌に注す、同意なり。

釋迦といふいたづらものが世にいて〳〵おほくの人をまよはするかな

一休の釋迦をそしりし御かげにておほ〳〵の人がうろたへかする

是は是、非は非にしておき、生は生、死は死、花は花、水は水、草は草、土は土。

諸人もじあやまりて、是は是とする心あらば、はや是にあらず。實に是なる時は是を忘れて知らぬ故是なり。故いかなれば、昔より聖人に、聖人といふ心ありしをきかず。孝子もわれ孝行にすると覺えぬによりて、孝子也。

花ははなを知らず、水は水をしらず、生も死も草も、また〳〵おなじ。

我はこれなにものぞ何ものぞと、頭頂より尻までさぐるべし。さぐるともさぐられぬところは我なり。

頭頂より尻までとは、總身をいふ也。此身あるが如くなれども、能〳〵さぐりおしきはめて見れば、なきがごとし。そのわけは、常に大かた身を忘れてゐるなり。忘れてゐれば、虚空に似たり。その虚空があつさ寒さいたさがゆさをよくしる也。うのしるものを目なしといふ也。これがまことのわれにして無我の大我ともいふなり。

此大我はつかまへ所なきものゆゑ、さぐられぬ所といふなり。

心とはいかなるものをいふやらんすみゑにかきじ松風の音

此所少しも有無の意あらば、目ありにして私案也としるべし。又一休の歌に「心とは鍋のさかやき石のひげひうち袋に當の髢」ともよみ給ひしなり。

おのれさへあつけはらはぬ不動めが惡魔降服無用なりけり

おのれさへあつけ拂はぬ不動めがといふ其私案が、即ちあつけを拂はぬ不動といふもの也。眞の不動は、火に入ってもやけず、水にもおぼれず、動きてうごかざる大自在の佛なれば、よく惡魔を伏する也。あつけ拂はぬ不動は有無にとゞまりて、動かぬ不動にて、これ惡覺の骨頂なり。已さへはらはぬとは、隙惡の火中に自縛の繩をも





ち、邪見の劍を提げて、目をいからしたる体をいふ也。其形貌の不動に似たれども、大さぎらものあり、能〳〵辨ふべし。まきらものは、無用也との事也。

ほらぬ井にたまらぬ水の波たちて影もかたちもなき人ぞくむ

ほりし井にたまりし水の波たゝでかげも形もふる人ぞくむ

釋迦きんかいのところにまかせて佛になるといふゑるしなし、とかく不ン明也。死すれば我もなし人もなし、釋迦彌陀も見れは本は人の性をうけつゝ、地ごくにぞ入る。

釋迦禁戒の所に任せてとは、即ち其まかせる意地が、我目となりて、樣々の私案妄分別をするゆゑ、佛になるといふしるしなし。鬼角くらやみにひとし。死すればとは、私案の妄念を忘れたるといふ也。万事をわすれたれば、人の我のといふ事なし。赤子の心に似たり。うの所を我もなし人もなしとはいふ也。もとの赤子となれば、釋迦も彌陀も、本來平等の同一性なり。地ごくに入るとは、十界を性中にそなへたれば、地ごくのみにあらず、餓鬼畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩にまでも入る也。今こゝに地ごくに入るといふは、罪人をすくう故なり。

心とてけにはてゝろのなきものをさとるは何のさとりなるらん

げには心のなきものをとは、心といふものなしといふ事にはあらず、なしのありのといふ私案妄分別は、いらぬも

のゞといふ事也。故にさとるとは、何のさとりだてがといましめたり。悟ると思はゞ、これが迷ひなり。されば
とて悟るといふ事なきにあらず、悟るとは心身共にわすれたるをいふ也。元來諸人天が心なれば、私に心の身の
と私案作意を用ゆれば、それが障になりて、天がかくるゝ也。天はなしといはれまじ、又ありとするにも及ばず。
或者かたはらより、及ばぬはづなし〳〵といふ、予が曰く、なし〳〵とは何がいはした。

我が法をいはでもいらぬ春の花もひらけてちりてつちとこそなれ

四時行、百物生、天何言乎、雪のうちより梅はほころび、露のすゑゑ咲きつゞく、花もいつしか夏木立、あくれ
に染る薄紅葉、散るにはあらで、もたよりめづるものありて、わか葉のきざすにこそ。高き所をひくしと思ふ人
もなく、谷うこを高しと見まがふものもなし。善は自ら善、あしきはあしきと云ふに及ばず、苦はくるしく、樂
はやすし。火はならはずしてあつく、水は學ばずして下へながるゝ。人は根から惡きらひがはへぬを也。うれを
誰がたつねた、やれいらぬ御世話や。

水鏡目なし用心抄　終

# 大梅山夜話

## 解題

この書のことにつきては、佛頂國師みづから自序のうちに述べられたれば、重ねて此に贅せず。この書は、寫本太だ希れにして、叢林の間にも多く藏するを見ず。今もと宮内省の圖書なりし古寫本に據りて校訂を加へぬ。

按ずるに、佛頂國師、名を文守といひ、一絲と號す。久我具堯の第三子なり。はじめて十四にして、萬年山の雪岑崟公に侍し、たまくゝ禪錄を閲みし、つひに心を心要によせぬ。のち泉南にゆきて澤庵老人に見ゆ。老人ひそかに望を屬し、ねむごろに提訓したりきといふ。年十九に至りて、槙尾の賢俊を禮して髮をけづり、具戒をうけて安居す。いくほどもなく、二たび澤庵老人に參し、大に精彩をつけぬ。かくて洛西の岡に草庵をむすび、分衛して日をおくりけるに、その道譽いと高く、遂に太上皇の叡聞に達しければ、便殿に召して法要を問はせたまひきといふ。このゝち、太上皇、加茂に靈源院を建て、また詔して丹の大梅山を修め、兼ねて住持せしめたまひぬ。また江州の永源寺に入りて、寂室の道を中興

す。正保三年三月十九日寂す。世壽三十又九、法夏二十なり。延寶六年の春、特に諡を定慧明光佛頂國師と賜ふ。



# 大梅山夜話序

凡叢社夜話之爲法也。初無定準。或擧先言往行。使賢者思其齊。或說業因報緣。使鄙者曉其愆。其師亹々談論。其資肅々拱聽。師强資勝。而能增懿於叢社。此乃所以夜話之行于古也。近古最乏主法博通之師。以故其擧寂爾無聞矣。竊惟。今也禪林衰替之跡。難以一二言焉。人情久習之弊。雖聰敏者。不能無惑。若非取證於往昔指玭於今日。疇克爲之甄別。此乃所以夜話之在今日益不可廢也。文守嘗與門下一二玄徒倣槃數講此會。然而脫進後生。多不以聞法爲樂。話漸長夜漸深。則有懷厭倦者。有生坐睡者。嗚呼。人根陋劣何其甚哉。於是。革其風範。別立新條。乃使各人話典籍之中一二事跡比諸前頭之會。其勝十倍矣。一者合席之徒。挾我所說。則不生坐睡。二者其事得於所聞。則臆持頗勝。三者欲說典中一章。則搜其文義也精。四者後生多窘于對衆吐言。以故辨利論且習。僉曰。成䟽後生必越舊範矣。昔者我佛以八音說法。徧令人天樂聞。所謂一極好音。二柔輭音。三和適音。四尊悳音。五不女音。六不誤音。七深遠音。八不竭音是也。已是薩埵之人以佛爲師。豈有專學守默痴禪而爲得耶。

寛永十有九年龍集壬午之冬。文守偶々侍太上皇帝之次。奏以新條夜話。
皇情亦以爲然。且曰。施之衣冠搢紳之間。亦不爲無補矣。文守還山之後無何而聞。
皇帝近命近臣十餘人講夜話之會。凡涉談藪遊藝苑之諸君子皆聞。有補于今日矣。猗歟。
王道佛法。本無異致之謂乎。文守屬者錄山中一會夜話。抱趨
聲欬之下。其意竊欲慶乙覽。顧夫不特
聖情寛仁特愍僧流。烏能得如此耶。又念。方今
皇后及諸宮妃官女等。悉皆依三寶好衆善。蓋是一人之意千萬人之意也。以故以假名字寫之。
私擬便其觀覽饒益淨信而已。恭願。
聖明越日月。
叡算等乾坤。
流德澤於四海。
護正宗於無窮。

寛永二十年暮春日　大梅山主釋文守序



# 大梅山夜話

## 佛頂國師

大抵人の陰界にある貌、現世の所作にかはらざる者多し、但し大道一片に受用する者は、脫然として化じ去る。蹤跡を論ずべからず。至極善根の者は、其善力に引かれて、人天の中に善果を受く。至極惡業の輩は、其業力に誘はれ、三惡道に赴くこと箭の弦を離るるよりも猶ほはやし。然りといへども此三種の人は、大抵まれなり。先づ大道一片に受用する者は、僧俗ともに希有なり。極善の者もなく、又極惡のみにきわまりたる者もなし。皿き方の業をもつて、善惡の人を定む。此故に大抵人の一生の作業は、善惡是非混雜して、其心地に納るものなり。是等の衆生、身を捨て、他生の身をば、いまだ受けざる間は、中陰の身を受けて程歷ること六七。其時今日の深く著せる作業を、又中陰にも作ると見えたり。

昔元撰と云ふ俗士、夫差の墓の中に入て、白樂天、張籍、李賀、杜牧の數人を見る。是れ皆唐朝の詩人にして、其身死しての後なり。人々皆詩を賦す。元撰其詩を一々記して傳ふ。其句法皆生前に好んでなせる句法なり。おはりに杜少陵來て詩を作るに、其中の四句に云

ふ、紫領寬袍漉酒巾、江頭蕭散作閑人、秋風有意吹蘆葉、落日無情下水濱。後許彥周と云ふ者、評して曰く、白居易、張籍、李賀等の數人、皆脫然として解脫することあたはずして、猶ほ鬼となるか。若し又元撰が詐つて出せる虛妄の說と云はば、其餘の詩は猶ほ及ぶべし、上の杜少陵が四句は、實に少陵に非ずんはなるべからず。元撰が能く云ふべき詩にはあらずと評せり。此事は元撰自ら樹萱錄を作つて、其中に載す。一々の詩もあると見えたり。彥周が批判は、則ち彥周が詩話に載せたり。上の數人は皆一時の豪傑にて、文章詩句にすぐれたりといへども、一念未生の妙理において、見得せず、受用せず、空しく花鳥に心を費し、あたら智惠を大道に研かざる故に、猶ほ鬼道に墜ちて、かくあるなるべし。然りといへども、別に惡事惡業なければ、罪責の苦みも受けざるにや。又平江府の雍熙寺に於て、夜深け月明なれば、婦人ありて寺の廊下に出で、小詞を歌ふ聲聞えぬ。人近き見れば其形を見ず。ある人竊に是れを聞きて其詞を錄せり。詞に云く、滿目江山憶舊遊、汀洲花草弄春柔、長亭纔住木蘭舟、好夢易隨流水去、芳心空逐曉雲愁、行人莫上望京樓。其人此詩を書して去んぬ。其後姑蘇の慕容岩卿と云ふ者、是れを見て大に驚き、其人に問ふて曰く、此詞は何れの處よりか得來るや。其人件の由來を語れば岩卿悲み嘆くこと久し。稍





ありて云ひけるは、此小詞は余か死せる妻の詞にて別に知る者なしといへり。寔に岩卿があはれを催ふすこと理りなり。此事は、馮均列と云ふ俗士、此比の事なりとて、周少隱に語りしを、其詩話の中に載せたり。

禪家に飲酒を以て公界の飲食に合せて、少しも忌み憚る慚愧の心もなきことは、末法の邪禪流布の時より加樣の弊も出來れり。然るに今の禪家の輩は、其由來を少しも知らず、却つて思ひるには、飲酒を戒むるとは、律家か、或は獨房子の、道心者などの作すわざなり。名山官寺は上代よりして、酒を戒むるとなしと心得て、結句戒むる者ををかしきことす。寔になげかはしき末法の有樣なり。凡そ佛敎の中に飲酒の過失三十六あり、文しげければ煩しく引くに及ばず。縱ひ一々に引出して證據し說くと云へども、今時の禪僧は、是れは敎者の事なりなどと云つて、取るべきとともせねば、禪家の證據を、一つ二つあげて申すべし。第一敕選淸規は、禪家普通の法式にして、大唐日本是れに隨はざるはなし。只今大德寺妙心寺に、入院出世入室法會等を、取行はるゝといへども、此淸規に依つて規模とす。此淸規の中に、飲酒を以て堅く制せらるゝこと一二にあらず。先づ沙彌得度の章に三種の不應食とて、酒と諸肉味と五辛とを、一生犯すまじき旨を堅く授く。今時の樣に得度

の受戒は、其仕形計りにして座むるかへす、祝の御酒とて放埒なる俗儀は、全く古になきとなり。又清規肅衆の章には、若し衆僧の中に、他の財を盜むと、酒を飲むと、女色を犯す者あれば、時日を移さず、其儘寺内を逐出すべし。若し暫くも留めおかば、衆僧を汚し、法門を破るなりと見えたり。此法を守る故に、大唐の禪家においては、大寺宮寺に有る僧は、飲酒を犯す者一人もなし。若し猶ほ其證據を云はば、中峯和尚の語錄に曰く、我初め學者にて在りしとき、則ち大元の開慶景定の年中に、淨慈寺又は双徑に在りしに、其時兩寺の大衆四五百衆に滿てり。若し其衆寮の中に一人にても、飲酒を犯したる僧あれば、常に飲まずといへども、其同鄉の者隣栖の者も、是れを賤しめそしらざるはなし。飲酒の外、他事の破戒は終に聞かずと見えたり。是れ元朝のときにて、殊に叢林の末たりといへども、猶ほ飲酒の戒め、禁密なること如此。況んや以て臨濟、德山、圓悟、大惠等の法席全盛の時代をや。又本朝の諸大禪寺も、開山の時分は、孰れも飲酒の戒めきびしきよし云ひ傳へぬ。夢窓國師の家訓にも、酒を門内へ入るゝことを堅く戒めて、法度せられき。是は官客俗士にも、寺内の内にて酒を用ふることをゆるされず。況んや僧たる者をや。上代洛陽嵯峨に於て、法席の盛に道德の照るとは、夢窓國師に超えたるはなし。七朝の國師に成り玉ふは、此翁



（卓吾先生）李卓吾のことなり。

一人なり。其法席において飲酒の戒め如此。偖寺餘山は推して知んぬべし。又此頃明朝の大儒卓吾先生が護書を見るに、萬曆年中に江州にて托鉢の僧三人行きしを、ある家より、其内の一僧を招き請じて、齋を供養して云ふ、亡せる女子の七日に當りぬ、念比に讀誦回向ありて給り候へと云ふ。其僧主人の意にしたがひ、事了つて門を出でぬ。又右の三僧と伴ひて行くに、酒家のあるを見て、三人酒を飲まんために其内へ入んぬ。主人酒を酌せ、兎角する間に其家の窓の前に、十二三計りの女子近きて云ひけるは、今日の齋に赴かせ玉ふ御僧に、申すべきとの候と云ふ。其僧何事ぞと問へば、今日の讀誦回向の御弔によつて、只今趣生いたすべきにて候。然るに飲酒を犯し玉はゞ、其功德徒になり、趣生なりかたく候と云ふ。趣生とはさまよふ亡魂の身を、又人間にやどるとなり。其僧驚きあはてゝ、急ぎ門外に出て見れば、跡形も見えず。是れより三人の僧大に發心して、堅く戒行を守り、修行の僧と成りたるよし見えたり。唐土にも加襟の世渡房主の破戒なるも、近比には有ると見えたり。是れは猶ほ破戒ながらも、其見解殊勝正直にして、一時の讀誦回向も、一心の誠を盡す故に、其功德空しからず。今時の禪僧は、一向に斷無空見なるか故に、縱ひ施主の求めに隨ひ、一時の法事回向をのぶるも、只外相の仕形までにて、胸中に誠の心毛頭もなし。

況んや以て飲酒のとは、名山官寺の大法會といへども、其席よりもてなしとす。卓吾が言いつはりならずば、今時の法事詮なかるべし。又右の三僧は、女子の幽魂に逢ふて、道心を起せる緣となりしが、今時の禪僧ならば、縱ひ目のあたりに、加樣の怪事に逢ふとも、猶ほ是は狐狸變化の業なりと云はん、況んや傳へ聞く分をや。又如此飲酒の戒を說けば、なまじいの末學淺識の僧有つて、祇陀末利優波梨宗道者法雲等を引いて、古も此類あり、何ろ一概に制するのみならんやと云ふ。殊に今時の酒肉に肥にたる禪僧の好んで云ふとなり。狂解と云ふは是れなり。祇陀末利は天子の太子と云ふ、又在家なり。僧の例に引くべきこと其理なし。優波梨は一時の權變によりて、其僧の根器熟せるを知る故に、先づ病を治め、頓て羅漢果を得せしむ。是れ各別の義なり。法雲宗道者は、大達過量の散聖にて、凡聖の間に求めがたし。邪禪の己がすき好む處に是れを引かば笑ふべし。在家の上にさへ、柳下惠か跡を師とせさるを以て、能く學び得たりとす。況んや僧家をや。又靈山會上の八萬の諸大衆、禪門千七百人の徧き跡をば習はずして、其中一つ二つのかはりたる跡をとめて、普通の例とし、我得方の證據に引いて禪家の酒肉さして咎なしと申されんは、其いはれなきにあらずや。肉と婬とは別書に詳に論ず。是は先づ禪門の飲酒一義を申すなり。



僧に尊卑の隔なし、同じく釋氏を以て稱す。强ゐて其尊卑を分たば、其人の志の賢愚と智惠の有無によるべし。然るに官位の虛名を立て、尊卑を分つは、實を掩ふの弊たるべし。凡そ在家の人出家に對して、必ずとする禮數あるべからず。其僧其道を信向せば、いかやうに敬ひ貴ぶとも、過度の禮とは云ふべからず。又三寶を愛せず、本より其僧を信せぬ在家の何たる無禮を爲すとも、僧として嫌ふべき道理なし。道眼ある者は、榮辱一致に照らし、縱ひ道眼なくとも、おさへて其心に用ふべきこと、出家の本意たらんか。又經の中に有戒無戒破戒、乃至頭をそり、袈裟を掛けたらんほどの僧をば繫縛し鞭打し禁閉すべからず。かくのごとくの僧、淸淨の比丘の中にあらば、たゞ法によりて寺を出すべし。若し是れを惱せば、國に災難起り、善神國を守らず、隣國あひ戰ひ侵し、賢聖捨て來らずといへり。十輪經大集經の旨かくのごとし。是は外護の王臣やゝもすれば、我が一旦の瞋に任せて、出家を刑罰し、或は本より佛法を信せぬ者の、僧を土民と一つに思ひて、刑法を行ふとあり、例せば天竺の琉璃太子の五百釋氏を害し、唐土の槐都宮か私の瞋に依りて、曉羅禪師を罪する類是れなり。是等の俗士を誡めて、大集經等には上に伸ぶるか如し。若し又外護の王臣知惠ありて、法の邪正を深く察して、正法を守護し興隆せしめんとするに、邪法邪見の

僧ありて是れを妨げんとせば、是れにいかなる刑法殺害を加ふるとも、僻事たるべからず。却つて是れを王臣外護の本義と云へり。涅槃經に破戒の僧、持戒の僧をなやまさば、國王大臣彼の破戒の比丘を殺害し、正法を守るべし。五戒をたもたずして、兵杖を帶して、佛法を護持すべしと見えたり。覺德比丘持戒清淨にして、大乘を弘通せしを、破戒の比丘是れをそねみて殺害せんとせしに、有德王軍を起して、破戒の比丘をたゝかひて、皆殺害し畢んぬ。さて王疵をかふむりて死す、此功德によりて、東方佛國の第一の弟子と生れ、覺德比丘は第二の弟子と生れたりと說り。凡そ佛法の外護檀門たらん俗士は、尤も分別あるべき事也。』華嚴經曰、設聞如來名及亦所說法、不生信解亦能成種、又古德云、聞而不信尙結佛種之因と。然らば則ちたとひ一座一時と云ふとも、寔の正法を聽聞する功德いたりて珍重すべきとなり。或は信して聞く者あり、或は聞きて信ずる者あり、聞きて信さるのみならず、却つて謗を致せる者もまゝ多し。元より佛法を嫌ふに依りて謗もあり、又一師一宗の偏枯なるを說くを聞入れ、我が心得にあはぬとてそしれる愚人も多かりき。是等の類、孰れも正法を耳にふれたらん功德空しからず。佛在世の時、文殊菩薩、五百の比丘の房を巡行して見玉ふに、一々皆定室に入つて坐禪す。其時文殊、舍利弗に向つて、性空無得の理を說いて坐禪に益なしと破し玉へり。其時五百の比丘是れを聞きて、忽に座を立つて。世尊の御前に詣で、高辭に唱へて曰く、今より文殊を見るべからず、名字も亦聞かじ、文殊の住處にも赴き向ふとあらじ、其故は煩惱と解脫と一なりと云ふ、大邪說を宣べられたりと云ふ。此に於いて舍利弗文殊を請して、重ねて其理を決了して說かしむるに、五百の比丘の中四百は、則ち悟を開き得たり。殘る百人はいよいよ謗を起して、其罪により、一往地獄に墮つといへども、頓て悟を開けり。是れ彼の文殊の說法を聞きし其緣くちせざるを以てなり。又善住天子經にも、聞法生謗墮於地獄、勝於供養恒沙佛者矣、此文によらば、縱ひ聞きて信せず、若くは謗を起すとも、濟度の願あらん導師は、慳法あるまじきとか。況んやそれ信じて聞き、聞きて信する人に對せんをや。』

碧岩三十五則は、文殊大士、無著文喜禪師の問荅なり。委くは本則の批判、及び傳燈錄、五燈會元に見えたり。無著文喜禪師遍參の時、五臺に往きて金剛窟に到つて禮す。時に獨りの老翁牛を牽きて往きしか、禪師を見て迎へて寺に入らしむ。老翁童子を喚ひ、牛をば之に牽かしむ。無著堂に上りてみれば、皆金色なり。老翁床に腰をかけ、繡墩を指して無著を坐せしむ。問答の語はこれを畧す。無著日勢の漸く晚るゝを見て、一宿を求むれとも老翁

「無著文喜禪師」俗姓を朱氏といひ、抗州の人なり。七歲にして國淸和尙を禮して薙染し、卽山に參じて心要を了す。詳なることは會元を見るべし。

許さず。辭して出づれば童子に是れを送らされたり。無著童子に向つて、是は何の寺ぞと問へば、童子後を指す、無著頭を回らし見る間に、件の寺と童子は蹤なくなりて、只空き谷の中なり。五色の雲の中に、文殊大士金色の獅子に騎りて在すを見る。忽ち東方より白雲來つて、是れを藏して見へず、其折節滄州菩提寺の僧修政と云ふ者も、參り合せて、其時に山も石も震ひ吼る聲を聞けりと云へり。其後感通三年に到りて、無著は仰山和尚に參して、禪宗の悟を開けり。頓て仰山の會下に住めり。典座の役を務む。ある時文殊粥を羹る鍵の上に現し玉ふ。無著是れを見て、粥をかきまはす篦にて、かの文殊を打つて曰く、文殊自文殊、文喜自文喜と云へり。是れ則ち禪僧透脫の機用よりして然り。尋常迷ひの衆生の千禮百禮をなすよりも、文殊の旨には合ふべきか。然りといへども、至れる人の佛菩薩に向ひては、いつくもかく有るへきとは思ふべからず。此境界に到れる人は、禮拜するも、粥篦にて打つも、全く差別はなきことなり。其時、文殊偈を說き玉ふ、其言に曰く、

苦瓠連根苦、甜瓜徹蔕甜、修行三大劫、却被老僧嫌と說き玉へり。此偈を心得たらは、無著の打れし落處をうかゝひ得てん。只前の兩句について見るべし。今の禪宗の知識と云ふもの、人に示して曰く、佛ぞ祖師ぞと云ふ、迷はぬ人は四大をはなるれば、卽ち空理に歸散して、跡かたなしと云へり。空理に歸したらんには、又何くよりか出つべきや。若し又是等の類も猶ほいつはりて建立すと云はゝ、かの百則の問答機緣も、皆筆端の建立にて、實はなきことなるべしや。若し然らば俗書物語草子に同しかるべし。今の禪宗の見解、眞に可笑可傷者乎。』

觀音菩薩は、娑婆能化の主にて、常に此世界にあそび、衆生の機感に隨て、衆生を利益し玉ふこと、錄して典籍にみてり。孰れも蹤跡たゝしき中にも、天童の照察元と云ふ僧、生れつき病多し。明朝の洪武丙辰の年、病愈重し。勉藏主と云ふ僧、これに勸めて觀音菩薩の名號を持たれよと云へは、照察元其言に任せて、毎日一萬聲誦しけり。明る年の十月十七日、午の刻に自ら思ひけるは、我病の体程なく死せんする心地に覺えぬ。日比觀音の大悲をたのみ、再び身安くならんとてそ思ひつるに、今は此樣にきはまりぬ。觀音を唱へんよりも、さかしく改めて阿彌陀佛の名號を持し、後世の助けを待たんにはと。此念を起すに當つて、忽に獨りのうるはしき婦人、六銖の輕き衣をきて、手に淨瓶を持て外より入りて、其面前に立てるを見る。照察元驚き怪みて、思ひはきまふ處もなし。心をおさめて慥に見れば、婦人にてはなくして、便ち觀音菩薩にてぞ御座しける。照察元涙を流し、罪をあら

はして菩薩の憐みを求るに、やがて尊容は見えずなりぬ。此後五日ありて、日比の病皆盡くぬけたり。今年五十餘にて、天童山に居られけるを、山庵の雜錄に書き留められき。此事はあまりに慥なる故に、某月日時刻までを、書き傳へられたるなるべし。加樣の佛菩薩の靈感慥なる事跡、禪錄の中にも儘多しといへども、今の禪僧は學味くして、見す知らざるを如何せん。縱ひ是れを見、或は人より聞くといへども、方便建立と心得て、例の斷見に引きあて、皆僞りと思へり。至りて痴なる故なるへし。』

菩提の道に入らんと思ふ人は、第一に先づ生死無常の速かなる理を、よく〳〵思ひわきまふべし。曉の烏の音、夕の鐘の聲、何れか我が生死を催さゝる。此身は牛羊の屠所に赴くが如し。歩々死に近かずと云ふとなし。此理を知らざる者は、妻子珍寶名聞利養のみ心を盡して、憎めるに讎をなし、愛せる方に恩を垂れんとをのみ工夫とす。かくて此身を終へなば、當來の沈溺膿をかむの悔あらん。昔阿育大王、南閻浮提の主として、ふかく佛法に歸す。滅後百年の王なれば、正法の時にて、羅漢の聖者多かりけり。雞雀寺の二萬の羅漢僧を、常に宮の中に請じて供養し給へり。大王の弟の阿輸伽は、佛法を信せずして、衆僧の供養を受くるとをそねみにくみけり。大王弟に語り給はく、僧は供養をうくれども、無常





を觀ずる故に、五欲の境に著する事なしと。阿輸伽この言を信せず。大王これを調伏せんと思ひて、智畧に先づ王位を弟に讓るべきよしを聞かしむ。阿輸伽その用意しけるを窺ひて、我に別の事なきに、我が位をうばゝんとす。其とが死罪にあたれり。但し國の位をのゞめば、七日の間南閻浮提の主にゆるす、五欲の樂しみ心にまかすべし、七日の後は殺害すべしとて、宮の内にとゞこめて、王位の如くあがめもてなし、外には旃陀羅を以て門を守護せしむ、旃陀羅に仰せ付けて、朝々に鈴をふりて唱へて曰く、一日すでに過ぎぬ、今六日ありて害したてまつるへしと云ふ。如此乃至六日すでに過ぎぬ。今一日ありて害すへしと云はしむるに、鈴の音耳に入り、むねふさがりて、五欲の境かつて心に面白からず。大王使者をやりて問ひ玉はく、王位に居ていかばかりの樂しみありやと。阿輸伽王答ふ、旃陀羅が鈴の音を聞くに、心も肝も身にそはず、五欲の境あれども見ず聞ずと。さて晝夜に無常を感じて、寢食を忘れて、一心に道を修し、七日ありて初果を得つ。其後大王之をゆるす。無常の理是れほどに恐るゝ心あらば、爭でか五欲の執著も忘れざるべき。』

人に習因習果と云ふとあり、深く心に思ひそみ、身にしなれぬるとは、生を隔てゝも、猶ほわすられず。況んや一世の間をや。迦葉は舞を好まれける。是れ過去世に於て伶人たり

し業習なり。舍利弗は常に瞋恚の相見えたり。是れ前生に蛇の身を受けし煩惱の習なり。又難陀尊者は色にふける心深かりけるが、羅漢の果を得て後も、先づ女人の方に目をやられけると云へり。是は一世の煩惱の習因なれば、かくもあらんかし。此難陀は佛の御弟なり。悉達太子御出家の後は、輪王の位をつぐべき身にて有りけれども、出家の期いたれりと思食して、佛御鉢を持して、難陀の家に乞食し給ふ。難陀御鉢をとりて、飯を入れて自ら送り奉るに、佛は已に行きすぎ給ひぬ。阿難につたへて奉るに、阿難みつから送り奉るべしと云へるによつて、難陀自ら持つて祇園精舍へ參らる。佛これをすゝめて出家すべしとて、頓て髮をそらしめ給ふ。難陀は本より孫陀利と云ふ美人を愛して、出家の志なしと云へども、佛の威におそれて髮をそる。心中にはにげ返るべき心地なり。ある時佛も、御弟子の比丘僧も、皆請ひをうけて出で給ふ。この隙ににげんと思ひて家へかへる。大道を過ぐれば、佛の歸り給はんにあひ奉らん事を恐れて、小路よりかへるに、佛これをしろしめして、小路より歸り給ふ。佛と大衆と歸り給ふをはるかに見て、木にのぼりてかくる。佛のすぎ給ふ時、風木葉を吹き開いて、難陀か身あらはる。佛いかに歸ると問ひ給へは、孫陀利かと忘られず候て、歸り候と申さる。佛又俱して寺へ歸り給ひぬ。ある時雪山や見



んと思ふ、いさとて御衣のすそにとりつかせて、俱して御坐す。雪山を見めくり給ふに、妻猿の火に燒けて盲目なる有り、佛問ひ給はく、汝が愛する孫陀利と此猿と何れか貌よきと。答へて曰く、孫陀利は天下にならひなき美人にて候、たとふへきにあらずと申す。さて歸り給ひぬ。又天上や見たきと仰せられて、御衣のすそにとりつかしめて、忉利天へ俱しのぼり給ふ。天人の体、まことに目出たかりける所々をみせさせ給ふに、天人みな夫婦ともなるに、或る天人女天ばかりにして男天なし、佛にその由を問ひ奉る。佛天人に問はしむ。難陀天女に故を問ふ。天女答へて曰く、佛の御弟に難陀と申せる人、持戒の德によりて、此天に生じて我か夫たるへしと云ふ。佛、難陀に問ひ給はく、汝か后とこの天女といつれかまされると。答へて申さく、雪山の猿の孫陀利にをとれるよりも、孫陀利は猶ほをとれりと云ふ。さて閻浮に歸りて、此天女の事をのみ思ひて、后の事をも忘れて、一心に戒行を守つて、天に生せん事をねかふ。かゝるほどに、難陀坐する處には、餘の比丘坐をたち去つて、一座に坐する僧なし。阿難の起さらるゝを見て、難陀問ふて曰く、汝と我と堂弟なり、なにゝよつて一坐に坐せさるとも。餘の僧衆の坐せさることも仔細知りかたしと云ふ。阿難の曰く、汝と我等と其意樂ことなり、汝は愛欲のために戒を持つ、我等は涅

槃のために戒を持つ、汝が心けがれたり、此故に同座せずと云へり。佛又汝、地獄や見たきとて、地獄へ俱して御坐し、種々の地獄をみせ給ふ。皆罪人有りて苦をうく、其中に或る地獄、釜も獄卒もあれども罪人なし。佛に問ひ奉る。佛獄卒に問はしめ給ふ。難陀獄卒にその由を問ふ。獄卒答へて曰く、佛の御弟に難陀と申すなる僧、持戒の業によりて、忉利天に生れて、一千歳の樂を受く、其後此地獄に落ち給ふべし、是れを待つなりと云ふ。是れを聞きて身の毛たち、天女の事を忘れて、涅槃のために戒を持ち給ひて、終に羅漢の果を得たり。佛の方便誠にありがたし。欲の鈎を以て引て道に入らしむと云ふは是れなるべし。』

凡そ在家官人などの始めて佛法を志し、一言の益を求むる人あらば、先つ其根性の上下、業習の淺深をよく〳〵察して、其後藥病乖かさる教化あるべし。藥員方なりと云へども、病證に契はざれば、却つて苦みを增すが如し。殊に禪宗の教化錯りて示す師家に逢へば、却て惡業を增すもの多し。然れは其人一旦志深きに似たりとも、惡習極めて深き者には容易に教化あるまじきことなり。昔宋の宰相王安石、ある時母の難ありて、定林寺に引入れて書を讀む。其時元禪師蔣山に住せらる。安石しば〳〵往來して遊ふことありき。一日元禪師に向つて、禪宗の旨を問ふ。禪師答へず。安石いよ〳〵尋ねければ、禪師の曰く、公を見るに悟の道に於て三つの障りあり、又道に近き質は一つなり。然れは只今は禪宗の修行なるへからす、一兩生を歷て以後修行あるへしと云へり。安石重ねて其仔細を委しく問ふ。禪師の曰く、公は生れ付きたる氣剛大にして、世緣深し。剛大の氣を以て深き世緣にわたる、いか樣に一人して天下を救ひ起さんと云ふ志を抱けり。若し用る處捨る處我心に任せされは、其心不平なり。不平なる心を以て、世を歷る志を持せば、何の時か一念萬年なる無心の道に契はんや。又性に瞋多し、又學文に理を貴ふ。道に於て所知の愚とて、悟を隔つる病とす。此三つ道の障り也。又道に近き一つは、名利を見ること脫髮の如く、澹泊を甘ふことは頭陀の修行をなす者の如し。之を道に近しとす。佛法に入らんと思はれは先つ敎學をして、やう〳〵に修行せられて然るへしと云へり。安石是れを聞き深く納受して再拜すと云へり。今の知識長老ならは、安石が如き高官博學の俗士、かりそめにも法を問はんとせば、甘き言のみ謂ふて、いかにもして弟子にせんとこそ思ふへきに、禪師の手段最も殊勝にぞ覺ゆる。寔に人情を離れたる眞正の僧に非すんは難かるへし。』

宋の執金吾王蘇令と云ふ者、亡者の忌日にやあたりけん、ある時金山寺に就きて、玉帛を

施し施餓鬼の供養を設けたり。其時公卿大夫數千人馬車にて馳來り、此法會にあつかる。さて施餓鬼の知水の咒とて、水をたむくる咒を誦する時に、何くよりか打ちたりけん、大なる礫を維那の頭に打ちあてぬ。維那心に大に瞋恚起りて思ひけるは、法事おはらは、何樣此者を穿鑿して官人に訴へ罪すへきと。かくて事おはり、公卿大夫も皆かへりぬ。夜に入りて亡靈幷に無量の餓鬼とも住持の居られける菴室の庭に來つて、口々に告け申しけるは、今日の施餓鬼には、一粒の米をも食せず、一滴の水をも飲ますと。住持是れを怪みて、其は何たる故にやと問ふ。維那の大に瞋られける故にと云ひ訖て餓鬼とも皆見えすなりぬ。住持頓て維那を呼びて問はれけれは、維那ありの儘に申す。其後王蘇令是れを聞きて、又金錢を出して、大施餓鬼の供養を取行へりと云へり。此事は因果論に見えたり。是れのみならす、凡て經陀羅尼をよみ、或は亡者にすゝめ、或は現世の祈をいたすと云へ共、是れ道場の中に不淨の沙門あれは、其功力通せすと云へり。然るときんば出家として經陀羅尼をよみ、佛神に向つて人の爲めに現當を祈らんには、心中に少しの妄念をも起さす、心を清淨の本に收めて、只其事の誠心一片にして回向せば、上は神明佛陀に感通し、下は亡靈鬼類に徹して、其功德虛かるへからす。若しあやまりて口には經をよみ、身は道場に坐すと云へとも、心に世間の愛欲雜事をうかめば、他人に益なきのみに非す、其身は信施のおひ物となり、生々の罪業たるへし。尤もつゝしみ思ふへきとなり。儒道にさへ、神をまつるとは神のいますか如くすと云へり。若し佛法より云はゞ、神を祭るとは神の在すとを明めて始めて得べしと云ふへきなり。今の禪僧多くは斷見にて、人死してのてる心なしと思ふ。若し然らは人のために施物をうけて、追善法事等を取行はるゝは、人たらしにはあらずや。眞に餘りおろかなる心得なり。』

黃龍の死心和尙、洪の翠岩に住持せられし時、寢間のうしろに齊安王の祠あり、其邊の民とも常に此祠に參詣して祀をなすに、必ず生類を殺して供すると一日をかくことなし。死心是れを惡みて其祠をこほち、寺の西の方に移し、其あとには方丈を建てらる。其後死心方丈の中に寢て居れける時、大なる蛇來つて其かたはらに蟠りぬ。死心是れを見て叱せられければ即ち去んぬ。さて其後死心の夢中に神人のいかにも衣冠儼に出立たるか、進みて云ひけるは、我は和尙に叱せられて、安穩に居住すへき處なきほとに、急き廣南へ行かんと存じ候、さかんなる男を六十人倩ひ申したく候と云ふ。死心夢中に心得たりとて約束せられけり。其已後程なく門前の若き男とも、疫病を受けて六十人死せり。死心後に學者に向

つて、鬼神と云ふ者は有るものか無きものか、若し有るならば何として我をば殺さゞるぞ、若し又無きならば彼の六十人は何の故に死するぞと問はれたれば、各答話すれとも死心の心に契はず、折節呉禪師の會下の元首座と云ふ僧到れり。死心又件の如くに問はれければ、元首座の答話に、甜瓜徹蔕甜、苦瓠連根苦と答ふ。死心大に喜んて褒美せられたり。此兩句は直に參禪の眼より答話せられたる旨なり。禪宗の仔細存せさる人には言ひかたし、工夫して知らるへし。』

湖南の雲盖山の住持智禪師、ある夜方丈に坐して居られたるに、何くともなく物の焦る氣聞ゐき。立て之を見られけるに火になりたる鐵枷を荷へる者あり、其火燃えるかと思へは滅し滅するかと思へは燃えて、少しも停るとなく、枷の尾は門の閫にもたれてあり、智禪師驚きて你は如何なる者なれは、かゝる苦報には逢へるやと問はれけれは、枷を荷へたる者、我は此前此山に住持せし守顒と申す者なり。檀那より衆僧に志とて供養する物を承け、衆僧にはあたへす、其を以て僧堂を建たりし、其罪によりて加様の苦を受く。智禪師の曰く、それは如何なる方便にて其苦みを免るへきや。答へて、只此僧堂を寛つて僧を供養せば、免るとを得んと云ふ。智禪師さらはとて頓て僧堂のあたひに當れるほど、我か財寶を取出して、守顒か云へる如く僧に供じて、渠か債を償はれけり。ある夜夢中に守顒來つて禮謝して、禪師の力によつて、地獄の苦を免れ、只今人天の中に生を受けぬ。三生の後には必ず僧となるへしと云へり。其門の閫枷の火に燒けたる痕、只今もありとぞ。人天寶鑑に書かれたりける。勅選清規にも是れを引いて住持の互用の罪重き由をいましめたり。如此罪にさへ、其道眼あきらかならす、煩惱つきざる僧は、猶ほ其報を受けること明白也。今の住持と云ふ者、在家の妻子の助けを分つて、亡者の爲めにすゝむる施物を、多くは酒肆魚房につくのふ者あり、守顒か罪にたくらべば、猶ほ一毛に泰山なり。然るときは未來の苦報、実に淺猿敷ことなるべし。』

泐潭山の廣道者は、東州の人なり。法を呉淨禪師に嗣けり。初め修行偏參の時、常に朋輩に謂ひるは、我は母の思ひ子にて、我は他所に行くことを深く嫌はれけるほとに、隨分修行を成就して其恩德を報ずべしと。後に呉淨禪師に參して、大悟せられたる其夜の夢に、亡母來つて告けるは、我か子の悟道したりし功德によりて、只今上天することを得て、彌勒菩薩に承事し奉ると。實に悟の功德は不思議なることなり。渠か獨り悟道したれば、亡母までをも上天せしむ。一子出家すれば、九族生天と云ふは此理なり。實に迷の家を出でた

る者一人あれば、九族は生天すと云ふ義にや。又泐潭の深禪師と云ふは、廣道者と法眷なり。ある時書を遣して呼ばれければ、廣道者欣然として往かれたり。其より先きに或人夢を見けるは、兩人して銅の佛を一軀昇いて來り、我が家にて竿を求めたると。其翌日遂に廣道者の輿に乘つて來られけるが、途中にて輿を昇いたる竿折れて、彼夢を見たる家に到りて求めぬ。其亭主さては昨夜夢に見たりしは、此僧のことなるへしと思ひて、慇懃に請じ入れて、種々の供養を伸べけり。かくて泐潭に到られける折節、大雪降りぬ。深禪師其受用の常に無心なるを聞きて、是れを試みんため、侍者に云ひつけて、潛に被や枕を取つて藏させらる。夜深けて廣道者寢ぬべしと思ひて、床に上り摸りまはせども、臥具ともなし。頓て肱を曲げて枕にして、雪のふり入るあたりに、大鼾をかいて快げに寢られけるを、深禪師是れを見て、大に賛歎せられけるとそ。眞に出家は誰も受用をかくしたきことなり。』

元朝の至正年中に、定海の白沙と云ふ所に、夏太三と云ふ下臘の男あり、常に商賈を以て世を渡る計とす。ある時舟に粮米を積んで、燕の國に行きけるが、其舟破損して遂に其にて死せり。其後十六年相過きて、明朝の洪武乙卯の年に當りける時に、其妻夏太三が平生を念ひ出づるに、其根性あらくして、下を使ふに聊の思もなく、暴逆多き者なりけり。



其上不慮に非法の死をしければ、其幽魂の惡趣にさまよはんことを歎き悲みて、遂に財寶を取聚めて鄭の十字港港と云ふ所に往いて、道場を殊勝に飾り、淨行の僧とて戒律正しき僧を十人擇み請し、叶萬宗を招きて導師となして懺法を取行ひけり。其日懺法二卷誦ひをはりぬ。さて其夜の夜半ばかりに、人々皆寢ける其中に、宜便と云ふ僧あり、忽に魘はれたる心地にて、ねごとを云ひをびへて聞えければ、人とも是れを起せども氣つかず、只苦しけなる心地ばかりに見えぬ。やゝ甦るへき氣色にもみへねば、萬宗も起き來り、呪陀羅尼を持して祈念す。良久くありて、又つよく呼びければ其にて漸く甦りぬ。さて只今は如何なる心地にて有りけるやと問ひけれども、物も云はす只泣く計りなり。人々猶ほあやしみ重ねて懇に問へば、去ることあり只今神人一人來れり、其形は世間につくる韋駄天の像に同じ、衣冠甚だ偉にして傘ぎ蓋ぎ劍ぎ戟などの物を引きそばめ、ゆゝしき有樣に見えぬ。我に行いて夏太三を具し來つて此法會に逢しめ、追善の功德を受けさせよと逼られけり。故に力及ばずして此神人に隨ひ行くに、道は海浦と云ふ所をとほりて往きぬ。彼の神人實に威勢もはげしくて、路を行く人も皆恐れてさけぬ。種々のけはしき所を經盡して、大海の邊に出でけり。海の面を見るに、限もなく樣々の鬼神ともあふれ居て、怖しきと限なし。其時彼

の神人我に此海中に入つて夏太三を引擧けよと云へり。夏太三は元朝の帽子をかぶりて、波の中に浮きつ沈みつ見えければ、何くに手を著けて擧ぐへき樣もなく覺えける處に、又神人ありて夏太三をとらへて、我に錢を與へよ、然らば放つべしと云ふ。そこで我か手の中を見ければ、折節錢少しありけるを、頓て其神人に與へて、夏太三を取りて岸の上にあがらんとする處に、其方たちに喚ぶ回さると思ひてさめたりと。追善なとの功德は實に淺からずと覺えたり。是れは夏太三が妻の餘り至誠に歎き悲む故に、懺法の功德により、夏太三が浮びたるとを知らしめん爲めに、宜便を證人にせんとて、神人の召しつれたるなるべし。折節手中にある錢は其時僧衆にひきたる施物なり。見解正路に戒行いさぎよき僧の追善法事、必ず幽魂に通すると、是れを以て知るべし。是は明朝の初めのとなり。其時慍禪師取つて雜錄にのせられたり。』

大惠禪師いまだ學者にて御座せし時、法一と云ふ僧と同行して、時の兵亂を避け、舟に乘して汴京に行かれけるに、大惠度々其笠を見られければ、法一是れを怪み、大惠の立去られたる隙を伺ひ、其笠の中を見るに、黃金の釵あり、旅の糧營まん爲めなり、法一是れを取つて江の中に投げすてぬ。大惠歸つて笠中に件の釵なきを見て、其色動けり。法一是れ





を叱して曰く、僧は生死を脫すべき修行を成就せん者とこそ期するに、纔なる一の金釵の爲めに動するや、我己に是れを水中に棄て畢んぬと云ふ。大惠たちまち禮拜を展べて、貴方は我が眞實の友なりとて、是れより交を深く結れしとなり。法一は後に雪巢一和尙と云ふ名譽の僧なり。陸放翁が書中に、右の古事を具に擧げて、更に批判して曰く、今の世に出家を謗る者多し。然りと云へども今の俗士に、法一が如くよく其友を規する者は一人も有るべからず。たとひ又其人ありとも、大惠の如くよく受けて、一生の交を定むる躰の者あるべからずと云へり。實に先輩の學者にてありし時の志氣、交友の規諫多くは此類なり。又湛堂和尙の曰く、我昔靈源と同じく其師晦堂和尙に侍す、靈源ある時二僧をともなひ、城の下に行き、日暮れて歸るとあり。晦堂和尙問はれけるは、今日は何くに行きしぞと。靈源答へて、さきに大寧に行き來ると云へり。大寧は寺の名なり。實は行かされとも、城のあたりに行きしとをかくして、かくは云はれたるとなり。其時死心と云ふ僧傍らにありしが、辭を厲し訶して曰く、參禪は生死を離れんが爲めなり、一言も僞なからんとを善しとす。淸兄何ぞ妄語をなせるやと云へり。實に人情用捨もなき申分、禪僧の交はかくこそあらまほしけれ。淸兄と云ふは靈源の諱なり。其時靈源は赤面して別に申さるゝことなかりき。

其後は城郭の邊へも行かれず、妄に一言も發せられず、湛堂是れを見て、靈源も死心も必ず名匠になるべき器量の仁と思へり。按の如く二人ともに隨分の智識となり玉ふ。湛堂の是れを感せられけるも同じき器量なるにや。』

任觀察と申すは、內貴の中の賢士にて、宋の徽宗の御恩を深く蒙りし者なり。便ち心を佛法に傾け、信心深くして、遍く諸善知識に參見せり。尋常歎きて云ひけるは、我幸にて大身をは受けたりと云へども、形もかたはに生れ、其上父母をだにも知らず。想ひはかるに定めて前世に人を輕しめ賤しめし罪業に因つて、今かゝる報を受くるにやとて、遂に誓願を發して、休沐の時私宅にありける時、人事の交を絕して、只香を炷き佛を禮拜恭敬して、己が身を刺し血を出して、華嚴經一部を寫し、一字ごとに三禮をいたされける。ある時客人來りけるに、彼經に書きかゝり遲く出でぬ。客人怒つて客の來て立てるに、何とて出られぬぞと云へば、任觀察笑て曰く、我は家中にて赦免狀を一卷寫し候故に遲く出でたりと。客人是れを怪しく思ひ、其仔細を能く問ひければ、任觀察有りの儘に答へぬ。件の血にて書きたる經を取出して、是れは閻老子の前にて、鐵棒を喫し鐵丸を呑む時の赦免狀なりと云へば、客人も大に驚きて、其より家に回つて、渠も華嚴經を一部寫すと云へり。古の俗士は、智眼暗からざる故に如此偏く知識に參すと云へども、いまた道眼を明めざれは、已か宜き分劑を顧みて、みたりかわしき伎倆をなさず、如法の修行善因をなせること如此。今の俗士は纔に禪宗となのれば、其身の見解の到ると、到ざるとを顧みず、妄に伎倆をなして空腹高心を以て面とす。古今の異是れを以て知るべし。』

惣して亡者の忌日等に諷經回向をなす功德、實に淺からずと見えたり。今時斷見の輩は、亡者などの忌日に僧を供養し、經を讀誦せしむるも、皆假儀の樣に思へり。豈に大なる錯にあらずや。古の人は實に其功德ある道理を辨へて、誠心になせる故に、其功德の證據とも目のあたりに多しと見えたり。明朝の法武年中庚戌の冬、奉化と云ふ所の田子中と申せし男、恕中慍禪師を大白と云ふ所に訪ひて、久しく一所に居住す。其時慍禪師の渠に向つて語られけるは、金剛般若經をは閻羅王界にては、功德經と云ふて大に尊めり。故に世間の人亡者の爲めに多分此經を讀誦す。田子中是れを聞きて其より後誓を立て、一生此經を受持しけり。ある時亡母の忌日に當つて、此經を百遍讀誦し、母の手向に薦めんと思ひて早朝より起き、榻に坐して讀誦す。第九遍目に到つて鬼卒の老婆を一人枷を入れて、其前に跪かするを見れば、髮みたれて面にかゝり、其形怪しき樣なり。能々是れを見れば我か亡

母にてぞありける。田子中驚きあはてゝ何とすべき樣もなくして居る處に、頓て鬼卒とも引起して去んぬ。其躰正しく枷をはづす樣に見えたり。讀誦追善の功德空からざると如此。田子中は實に俗士なりと云へとも、其志眞實なる時は、冥途に感通すると如此。況んや淸淨の沙門の實に正見を以てなさんをや。此事は初めに誦經をすゝめられし僧禪師、錄して置かれたる實迹なり。』

今時邪見の輩は、佛神ある道理をも信せず、其靈驗感應の事迹をも、皆虛說なりと思へり。實に愚痴のいたりにあらずや。宋の眞宗の朝に、眞州長蘆寺の登和尙、數年を歷て新に長蘆寺を建立せらる。寺已に成就し了つて、ある夜夢中に神人一人來つて、長蘆寺の土地神となりたき由を訴ふ。登和尙の曰く、你は我か寺の土地神と成ることはかなふへからす。神人其故を問ふ。登和尙僧は我か僧家の過を餘りに見出すほとに、守護にはなるへからす。神人の曰く、其か久しき誓願にて候ほとに、如何にもして此寺の土地神となして給はれと て、頓て隻の臂を截つて呈しぬ。左あるに於てはとて、夢中に許されけり。其後遂に彼の神人の爲めに祠堂を一所建立して、土地神を作らしむるに及んで、一方の臂落ちけるを、樣々にしてあまた度着けれども、遂に着かず。是れに因て彼の神人の願力重きとを知んぬ。寔に



道德勝れたる善知識の神明を感せしむると、其數多し。上の古事は大惠禪師の武庫に載せられたり。』

夫れ六波羅蜜の中には、檀波羅蜜を第一に擧げられたり。檀波羅蜜は梵語、此方にては布施と云ふなり。此布施にも輕重あり、財を以て施すを劣とし、法を以て施を優とす。增して財と法との二を以て、齊く施すを廣大の布施とす。其故は財施は漸く今生の難を救ひ、法施は來世多劫の難を救へる理なり。張無盡と申せし者は、博學多才の俗士にて、宋朝の宰相なり。殊に諸善知識に參見して、大法を得たる名譽の者なり。ある年大に飢饉して民の苦めると甚だし。無盡が門に來りて米を求むる者多し、無盡その時彼輩を勸めて面々に金剛經を誦せしむ。若し一分を誦すれば米一斗を施し、若し一部を誦し畢はれば、米三石二斗を施せり。此經には三十二分あり、此故に一分誦じ得し者には一斗を與へ、二分には二斗三分には三斗、乃至三十二分誦し得る者には、三石二斗を施したるとなり。加樣にして渠等に佛法の勝緣を結はしめんか爲めなり。是れ眞に財法二施の功德なるへし。又僧の來つて米を求むるに逢ふては、其を勸めて老子經を念せしむ。俗は孔老の敎に着して佛道を知らす、僧は佛法に滯つて孔老の旨を知らさる故に、加樣にして互に他の敎を知らしめ、互に

護して諍論させしとの爲めなるへし。眞の佛法外護の士と云ひつへし。』

總して亡者の爲めに供養追善をなすに、其道場不淨なれば、亡者の來つて其供養を受くるとなし。只徒ら事と見えたり。歐陽脩參政の時、一日採石渡と云ふ所の舟中に宿せし時、何者とも知れず陸の方より人を呼ぶ聲しけれは、我か乘りたる舟のともの方より、今夜は參政の此に宿し玉ふほとに、行くとはなるべからず、我か齋料をは持來つてくれよと云ふ。歐陽脩思へるには、舟のともは海の中なれは、人の居るへき樣なし。是は必ず鬼神にて有るへきと思ひ居りけるに、又夜半の時分に到つて、又岸上に物音して、人の透る聲あり、舟のともより呼んで曰く、我が齋料を如何せられたるや。岸上の者行きながら答ふるには、道場が不淨にて、皆々一粒の飯一滴の水をも受けずして歸りたると云へり。歐陽脩是れを不思議に思ひて居りけるが、其後半月ばかり過ぎて、金山寺に行きし時、彼の採石渡の舵を住持に語る。住持の曰く、此以前施主ありて當寺に來り、供養を設けたるに、第二番目の法事の時、其妻それにて俄に產しけるとあり、其時腥き風あらく吹來りて、燭をも皆吹きけしぬ。衆僧も大に驚き怪むとありと語る。歐陽脩其日を委しく問へば、我が採石渡に宿したりし夜なり。其時に彼の疑を決せり。尋常追善等に淸淨の道場を擇むとは、加樣の道理ある故なり。』

道林禪師と申す祖師は、秦望山の茂りたる松の上を居處とす。實に鳥の窠などの樣なる栖かなれば、時の人皆鳥窠和尙と呼べり。其時白居易侍郎、錢塘を所領す。わざと秦望山に往いて鳥窠に逢ひ、まづ其樹上の栖ひを見て、乃ち問ふ、禪師の座せる處は甚だ危き躰也と。鳥窠の曰く、我に何の危き事かあるべき、只其方の危きとこそ甚だしけれ。其時白居易、某は多くの江山を所領して富貴の家に居りければ、何の危き事か有るべきや。鳥窠の曰く、薪火相交つて識性停らざるほとに、何ぞ危からずと云はんや。此語の意は、薪は五欲の境にたとへ、火は六根にたとふ。識性不停とは、凡夫は五欲の境界に引かれて、暫時も心念の收まる事なきを云ふ。富貴の人は殊に其中に在りて、朝夕惡業をのみ作るほとに、當來の惡果は必定して免るべからす。故に是れほとあぶなき事は有るまいぞと云へり。白居易是れより彌々菩提心を勵し、專ら佛道に進むと云へり。實に古の大善知識は、其人其品に付いて一言一字の敎化も、必ず其人の利益となる。末法の斷見を示す惡知識と、日を同しで云ふべからず。』

世間の人、恩をたれ讎を結ぶ、其報ひ必ず遁るべからず。若し一世に受けざれば多生に之

を受く。又其人生涯の中に報じ得ざれば、鬼神と爲つても之を報ずると多し。然れば三世の大事あるとを知れる者は、小事とても人に恨をうけ、寃となるとをば作すまじきとなり。晉の大夫魏武子と云ふ者、常に寵愛しける妾一人あり、ある時魏武子大病を受けて臥しけるが、子息の魏顆を呼んで我もし死せは、必ず此妾をば你が妻にせよ、相かまへて此言を違ふべからずと、其後病も重く身も疲れて、死に近きたる時、又魏顆に向つて我死せば、必ず此妾を殺して我に從ふべしと云ふ。魏顆是れを熟ら思案して、我は父の心念も正しき時の言に從つて、病苦にせめられ心の昏亂せる時の語には從ふべからずとて、遂に其妾を妻とす。ある時秦より軍を起し、杜回を以て大將となして晉を伐つ。晉は魏顆を大將として此丘を防がしむ。即ち早朝の合戰なり。其前の夜魏顆が夢中に一人來つて云へるは、將軍明朝は必ず早く戰はるべし、然らば我鬼兵を具し來つて合戰を助け必ず勝たしむべしと。魏顆是れを怪しく思ひて問ひけるは、君は何人なれば左樣に我を助けんと云へるや。其者答へて曰く、我は其方の亡父、尋常愛せられし妾の父なり。其方の父の我女を殺せと云へるに從はずして、却つて妻とせられたる恩德を感して、加樣に鬼の兵を引具して助くるなり。魏顆大に喜んで其翌日夜の中に出立ちて合戰し、遂に秦の軍兵を伐ち亡しぬ。其時杜回は



草に纏して前にも進れず、後にも退くとを得ずして居けるを、晉の兵やかて其にて生捕にしけり。是れは彼の妾か亡父草の末を結合せて置きける故に、杜回それに纏されてかくありと云へり。是れを鬼役結草と云へり。晉書より出で佛書の中に多く引いて證據とす。』

文定公張方平居士、滁州を所領せし日、瑯琊山に行いて廊下のあたりを遊びまはりけるが、何となく慕しく思はれて去るとを忘れ、遂に藏院に到りて忽ち前生のとを思ひ出して、淚を流して粱の間にある經を指して曰く、是れは我前生に書きたる經也と、遂に是れを取つて見せしむれは、便ち楞伽經の最初の二卷なり。其より沐みものいみして、書き續きけるに、前生に書きたると少しもかはるとなし。其後香を炷き、此經を展べて誦じけるに、賛偈の文に到つて道眼を明めぬ。偈を作つて曰く、一念存生滅、千機縛有無、神鋒輕舉處、透出走盤珠と。前生は瑯琊山の藏王の僧なりしか、楞伽經を書いていまだ終らずして死せり。再ひ書き續くへき誓願ふかゝりし故に、加樣に再生して其願を終へたるとなり。殊に此經の文によりて、悟を開くと實に願心のしるしなるへし。其後文定公件の經を取出して、東坡居士に見せて其由來を具に語んぬ。東坡是れを記して、浮玉山の龍游寺に石に刻みて後代にとゞめけり。如此大官士大夫の中、再來のと其證據多しと云へとも、空見の儒者なと

の生死輪廻の理なしと云へるは、おこがましきことにあらずや。』

泐潭深和尚の會下に悟侍者と云ふ者あり、平生の工夫を以て心とす。ある時知客寮にありし時、人の火の燃えさしをなぐるを見て、忽ち悟るとあり。直に方丈に上つて其旨を伸べたれども、深和尚の心にかなはずして、其儘喝し出ださる。悟侍者それより狂氣となりて、延壽堂の東司に入り、自ら縊れて死し訖んぬ。其より亡魂となりて、毎夜藏院、知客寮、東司、此三所にみねつかくれつして、人の草鞋を移し、東司にいる人あれば、必ず水瓶をもち來て度しつなとしけり。大衆も皆これを怕る。此時湛堂和尚浙より歸て、其寺の首座に充らる。悟侍者がとを聞いて、夜深けて特に東司に入り、壁に掛けおきたる燈かすかにありしを、悟侍者來て吹消して、常の如く又瓶を持ち來れり。湛堂其手をとらへられたれば、輙なる樣にもあり、又硬き樣にも覺えて、寔に怪しき物なりき。湛堂問ふて云く、汝は悟侍者なりや、汝昔知客寮にて悟を得たる者なりや、宗門中の參禪學道は、我心の落處を明め得んがためなり。汝藏院に來て人の草鞋を移し、智客寮にて枕を移し、毎夜此東司に出でゝ、人のために水瓶を度する所、都て是れ汝か昔悟りし所にあらずや、いかんそ落所をしらずして此に來て衆僧をなやますや。我明日衆僧を勸めて看經せしめ、衆僧の錢をあつめて、





粥を設けて追善すべし。汝別に出離を求めよ。此に滯留するとなかれと云つて、づかと推倒せられたれば、積みかさねたる瓦の落つる聲の如く、又塔なとの倒るゝ聲にも似たり。其より悟侍者再び來らず。湛堂の悟侍者をとらへたりし手、ひぢのあたりまでひゆると氷の如し。半日を過ぎて始めて本の如し。總じて非人の類は陰氣について來る故に、冷氣人を侵して如此と、大惠も批判したまへり。此事は大惠の武庫、幷に五燈會元に載せたり。如此禪門の祖師直に幽魂にあひ、剩へ法を說きて其迷を救はれたると明白なり。今の禪宗の智識と云ふ人、幽靈亡魂等は皆狐狸のしわざなり、人死して殘れる心なしなとゝ云へるは、餘りに理にくらきとにあらずや。』

唐の文宗皇帝つねに蛤蜊を好み玉ふ。一日御厨の中にて、一の蛤蜊つんざけとも開けざるありき。官吏の人これをあやしみ、遂に叡聞に達しぬ。皇帝殊に奇異の事と叡慮まし〳〵、是れをとり香を燒いて祈願ありしかは、忽ちに自ら開けたり。其中に觀音大士の聖像あり、しかも妙相具足せり。ここに於て皇帝大に悅ひ玉ひて、即ち金粟檀の香合に入れさせ玉ひぬ。然れとも是れ又何の祥瑞とも思召しあてさせ玉はねば、乃ち左右の供奉の人に詔ありて、經論家の智者高僧をめしあつめ、何の祥瑞そと勅問ありき。高僧みな知るところ無う

して、皇情に契ふ僧なし。供奉の人又重ねて奏聞せられけるは、終南山に惟政と云へる禪僧あり、深く佛法の至理をさとれり。是れ必ず此祥瑞を知らんと。皇帝詔あつて前の如く勅問あり。政禪師の云く、物理に虚應なし、此乃ち陛下の無上菩提の大信心を啓き玉はん祥瑞なりと答へ奉らる。皇帝のの玉はく、何の敎典よりか出てたる。政禪師乃ち法華普門品を引いて答へらる。經の中に此身を以て得度すへき者には、即ち此身を現して爲めに說法すと。此文の意は、菩薩は何にても其人を化度すへき身にあらはれて、濟度し玉ふと云ふ心なり。皇帝のの玉はく、菩提の此身は已に現せり、說法はいまた聞かす。政禪師の曰く、皇帝已に此身を覩玉ふ、常とし玉ふか、常ならぬ事とし玉ふか。又信じ玉ふか、信し玉はさるかと。皇帝のの玉はく、眞に奇特のことなり、深く信すと。政禪師の曰く、陛下已に說法を聞き竟んぬと。眞に一代時敎も人の信心を開かん爲めなり。縱ひ佛の金口の說をまのあたりに聞く者なりとも、一すじの信なくんは、聞きて聞かぬに同しかるべし。こゝに於て皇情大に悅ひ玉ひて、頓て一天四海の寺院に詔して各々に觀音菩薩の聖像を建立して、殊勝に供養せしめ玉ふ。御法喜の餘りにや、政禪師をは內道場に留め玉ふ。されとも頻に辭退して山に歸られぬ。重ねて、詔あつて、聖壽寺に住持せしむ。武宗の御即位に到つて、終南山に入つて隱る。遂に山舍に終りぬ。此段の因緣は唐の大和年中の事にて、僧家に獨り沙汰あるにあらす、天下に普く目に見、耳に聞きて朝廷の史に錄せり。』

# 大梅山法語 終

# 反古集

## 解題

反古集は、鈴木正三老人遷化の後、その門人らが、石平山におゐて遺筐の中より歸依の僧または士女に與へられたるものを拾ひあつめて、かくは名けたるもの。題して反古集とはいへれど、實に幻病を療するの幻藥なりかし。また卷の末に「聞書」と題するは、門人らか老人に侍して、その垂示を聞くに隨ひてかいつけおきしものなり。又麓草分および萬民德用二書の來由につきては、つばらに驢鞍橋の中に述べたれは、此に贅せず。

老人のことは、かつて盲安杖にて記したれは、此にはふきぬ。儻しその詳なるを知らむとおもはゝ、韓川筆話、三曉庵談話、または次に收めたる驢鞍橋を見れは可なり。

# 反古集 卷上

石平鈴木正三老人

佛祖以來修行の趣、或は諸行無常、是生滅法の理に隨ふもあり、或は一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電と觀ずるもあり、或は生者必滅、會者定離の文句に依て、菩提心を發すもあり、或は恩愛の別を悲みて此道に入るもあり、或は飛花落葉に心を付けて赴くもあり、或は顚倒迷忘の理を知り、或は三途八難の責に恐れ、或は三界火宅の苦を厭ひ、或は此身の不淨を觀じ、或は上四恩を報ずべき心を發し、或は一句の話頭公案に眼を付けて、大疑團を起し、見性成佛の理を求むるもあり、是等の趣千差萬別にして、其科限りなしといへども、此の如くの儀は、古より諸の先賢說き盡し玉ふ所なれば、今復伸ぶるに及ばず。爰に一行あり、家職を以て佛道に入るの理なり。今此趣を用ゐ玉ふべし。それ武勇の家に生る人は、三尺の劔を磨き、一張の弓を弄し、常に心を強く用ゐて、千萬人の中に於て、一陣に進まむことを思ひ玉ふべし。力量の達者、武藝の上手は生れつく所なれば、力に及ばず、一心を勵し命を輕せむ事は、誰にか劣らんや。武勇の達者には樊噲張良を先とすと

〔三途八難〕三途は、地獄、餓鬼、畜生をいふ。八難は、一在地獄難、二在畜生難、三在餓鬼難、四在長壽天難、五在北鬱單越難、六盲聾瘖瘂難、七世智辯聰難、八生在佛前佛後難なり。此八難とは、八處の障難なり。この八處、感報苦樂異ありと雖、而も皆佛を見ることを得ず、正法を聞か

す、故に總て稱して難となす也。

いへども、今また樊噲張良に負くべしと思ふ人はあるべからず。其故は只今樊噲如きの人あらんに、其人にひけを與へらるれは、何人か是れを恐れて堪忍せんや。然るときんば常に一心堅固に用ゐずして叶はざる役人也。少しも機を拔かし居れば、用に立つべからず。知るべし、唯此堅固心、便ち是れ工夫長猿也。別に用心を求むべからず。佛法と云ふも、一心を堅固に用ゐて、物の爲めに煩ふ事なく、曾て不痛、不惱、不憂、不悲、不動、不變、不驚怖して、大丈夫の心となるを成佛と云ふなり。用え。

又

成佛心に種々の異名あり、堅固法身と云ひ、金剛不壞と云ひ、金剛の正躰と云ひ、鐵心肝と云ひ、大丈夫の漢と云ふ。此外堅固なる名多し。又凡夫心と云ふは、煩惱心也。物に隨て轉變して、恐れ驚き、歎き悲み、愁ひ退き、空しく煩惱に轉せられて、本心衰へ、愚痴に沈み惱むを云ふ也。醫法にも喜怒憂思悲驚恐の七氣を、萬病の本とすと云へり。佛是れを憐み玉ひて、本來の本法心となり、大丈夫心となつて、物に負けず苦まざる事を敎へ玉ふ。其法と云ふは、勇猛心を用ゐて、煩惱を消滅するのみ也。藥師如來は色身の病を治し、釋迦佛は心病を治し玉ふ也。されば凡夫心を以て、血氣の武勇を勵すときんば、一旦鐵壁



を破ぶる威勢ありといへども、一陣敗れて落武者となるときは、忽ち血氣變して、弱々と土民百性等に生捕られ、耻を曝す類多し。或は討たれ、討剝かれたる由、多く語り傳へり。此を以て知るべし、煩惱心は生滅心也、成佛心は堅固心なる事を。何人か堅固心を嫌て、煩惱心を好しとせんや。殊に威勢世に勝れ、武勇樊噲を欺く人も、命終の時に至て、無常の殺鬼責め來り、四大骨肉を責め破らん時には、日比の武勇盡き果て、彼の殺鬼に向て、臆病を働き、死出の山の苦患を受け、三途の河に漂ふて、閻魔の庭に耻を曝さん事、全く遁るべからず。忽ちに消え失せて跡形もなき、夢幻なる人間の前の耻をだに、疎かに思ふ道理なし。況んや閻老の前の耻は、盡未來際更に盡くる期あるべからず。又俱生神は兩の肩に乘て、明に善惡を記し玉ふと云へり。此理を恐れん人は、專ら義を守て、速に佛果に到り玉ふべし。

又

隨分武勇を勵まし、一命を捨て、粉骨を盡し、名譽を世に顯はす人の、恩賞の輕重、所領の大小を論ずる輩あり。拙哉、あたら武功を何ぞ忠節の爲めにせざるや。此の如く心得玉ふ人は、是れ偏に武邊商人也。大に愼むべきこと也。今時は出家にも此類多し。幼少より

佛法を修學しながら、智者の名を貪り、寺を住持せん事を思ひ、解脫の大法を以て、渡世の業となすは、皆是れ佛法商人也。全く佛子に非ず、太だ佛祖の怨敵也。此の如くの出家在家、共に身を思ふ心一つを以て、佛意に背き、仁義に背きて、無量の苦患を受くる事、淺間敷にあらずや。可恐可恐。永く三惡道に引いて入り、世々生々我を賣むる者は、便ち是れ吾が心なり。實に我を思ふに似て、却て我を滅す者は、吾が心のみ也。全く外に我を責るの敵なし。此故に今此敵を滅さんが爲めに、十條の法語を設く。心に應する處を取て、理と義とを以て責め玉ふべき也。

第一、可レ守二生死一事

第二、可レ知二因果理一事

第三、可レ用二浮心一事

第四、可レ守二無差別理一事

第五、向二諸境界一不レ可レ變レ心事

第六、守レ己可レ知レ己事

第七、滅レ己可レ樂レ己事



第八、知レ恩可レ報事

第九、可レ惜二光陰一事

第十、知二顚倒理一可レ離二著相念一事

第一、生者必滅と知るは理也。生死に眼を付けて、強く守るは義也。此生死を守るの心、則ち工夫長養に相應して、自然に煩惱心消滅して、丈夫心と成る莫レ疑。

第二、因果の理を知るは理也。諸惡を禁ずるは義也。今生の業因、未來際に涉て善惡の果を受くる事、全く遁るべからずと、明に諸經に說き玉ふ也。疎かに思ぶべからず。今又現在に惡業を作して、報を受け、因果を顯す者限りなし。諸國に於てその證據是れ多し。或は主君に別心を作して、主人を滅す人、忽ち報を受けて滅亡し、子孫に到るまで、大難を受け、死罪に及び、其家終に絕え果たる事多し。或は無罪の家人を殺して、財寶を取りたる者、子子孫孫に到るまて、取殺したる怨靈方々にこれ有り。或は畜生を殺し惱して、其報を受けたる人もあり。或は一念の愚痴に依て、忽ち畜生と生れたる者もあり。可レ恐可レ恐。善を修するときんは心淸淨に、惡を作すときんは心身苦しむ。因果は直に報ふに非ずや。

第三、浮心沉心を分ち得るは理也。此理を知て十二時中浮心を用ふるは義也。先づ喜心、

怒心、憂心、物思心、悲心、恐心、驚心、此七情は我執に依りて起る所也。又痛心、煩心、惱心、苦心、僞心、諂心、恨心、嫉心、是非心、名聞心、自慢心、執著心、愛樂心、物嗜好心、物願心、貪欲心、愚痴心、此の如きの心は、盡く是れ沉心にして、黑闇迷謬の中より起る也。故に沉心を用ふる時、唯今出でゝ死せよと云はゞ、苦患強かるべき也。又浮心の類あり。佛神を敬う心、主人の前に居する心、慇懃なる出會の心、慈悲正直の心、仁義を守る心、自己を守る心、生死を守る心、一陣に進む心、捨身を守る心、無常を觀ずる心、念佛を唱ふる心、經咒を誦する心、佛語祖語に眼を付くる心、工夫長養座禪の心、總て修菩提の心、是れ浮心にして、萬苦に勝ちて安樂の法門也。然りと雖も、法に依て機を減する人あり。是れ法の咎にはあらず、邪師の過謬也。若し能く右の如くの心を養ひ立ては、次弟に機强くなりて、一切の執著を去るべき也。此浮心の中より出でゝ死せば、苦患輕かるべし。此故に此機を用ゐて油斷すべからず。若し油斷せば、拔脫となつて心を毀し損して、終に機弱くなり、一切に苦むべき也。

第四、自他無差別と知るは理也。慈悲心を專とするは義也。それ物我一躰といへり、全く隔つべからず。何れの人も、我等が身を愛するが如くなるべしと知るべし。一切の有情畜類に至るまで、命を惜み、身を愛し、子を憐み、夫婦恩愛の志深く、物に恐れ驚き愛ひ悲む事皆是れ我等が思はくに替る所なし。然るに是れを辨へず、或は鳥獸を殺し、或は惱し苦めて慰みと作す事、極めて愚なる仕業也。又或は自ら萬人を隔てゝ、却て是れを惡み、或は咎なき人に恨をなし、或は人の榮ふるを妬み、人の衰ふるを悅び、或は他の志を奪つて、我手柄となし、或は他に耻を與へて、我威を增し、偏に仁義の道を忘れ、人の痛むを知らずして、空しく一生を過さは、人倫にあらず。明に自己を顧みて、慈悲心を發すべき也。』

第五、善惡不二と知るは理也。善惡の境界に向て、心を變せざるは義也。順境界あり、逆境界あり、佛境界あり、魔境界あり、鬼類あり、蛇類あり、此外萬般の境界ありといへとも、自己心堅固にして、如夢幻泡影、如露亦如電と觀ずれは、心に碍るものあるべからず。一切の境界は、譬へは青黃赤白黑の繪具を以て、樣々の形を畫き出すが如し。佛の尊形も青黃赤白黑、人の形も畜生の形も、及ひ一切有情非情、悉く彩にして、更に實躰なし。五色も亦本來空也。されば恐しく見ゆるも五色、美しく見ゆるも五色、貴く見ゆるも五色、賤く見ゆるも五色、此の如くの萬般の境界、皆是れ夢幻空花也。此理に眼を付けて、自己を正しく守て、善惡の境界に心を變ずべからず。或はすでき所などに、化物ありと沙汰す

るを、迷の心にて之を聞くときんば、はやぞくくと恐しき心出るもの也。以レ之可レ知、善惡の境界は、心より造出たす事を。古人曰く、心生種々法生、心滅種々法滅と。又曰く、一心不生萬法無咎となり。誠哉此言。懼きも心、尊きも心、賤きも心、美きも心、花と見るも心、月と見るも心、山河大地皆是一心より見出だす處也。更に外に眼を付くる事莫かれ。

第六、心は第一の怨なりと知るは理也。是れを制するは義也。眼に物を見、耳に聲を聞き、鼻に香を嗅ぎ、舌に味を知り、身に手足の自由を作し、心に善惡を分別す。是れを受用不盡の心法と云ふなり。かゝる寶を修せずして、却て眼耳鼻舌身意に付いて、苦しむこと非義の至なり。或は目に物を見て、欲を起して苦しみ、耳に聲を聞いて、欲を起して苦しみ、鼻に香を嗅ぎて、欲を起して苦しみ、舌に味を求めて苦しみ、身に著して苦しみ、心に是非善惡の念を起して苦しみ、惣じて三毒十惡を始め、起る處の煩惱無量無盡なりといへども、皆是れ我が心に誑ざる處を本とす。豈に心に勝る化者あらんや。されど迹形もなき所より化出で、刹那か間に、又迹形もなくなる也。扨も不思議の化者に非ずや。一切の化者の王は人間也。然るに之を知らずして、實躰なきを云ひ傳ふる、外の化者に恐るゝ者のみ也。



躰なき者に恐れんより、何ぞ躰ある人間と云ふ化者に恐れざるや。若し能く是れに眼を付けば、化者更に有るべからず。賢聖の前には化者なしと云へり。迷謬の心より造り出だす處の轉變の相甚だ限りなし、兎角此身心の根本を知らずむば、永く三惡道を出づる期あるべからず。又爰に一つの化者あり、面に白粉を塗り、髪に油を付け、齒を黑く染め、唇に臙脂をさし、眉を造り、色好き衣裳を纏ひて人を誑すあり。彼れに化されれば、盡未來際惡道に入りて、苦を受けん事限り有るべからず。可レ知、人の心は愚なる者にして、みだりに物に移り、物に恐れ、物に誑さるゝ事を。此の如くの安心を樂しみて、本來の本心を失ふ事、大なる錯也。強く此理に眼を付けて、本心に達すべき也。

第七、元來我と思ふべきものなしと知るは理也。我を盡すは義也。それ我執を以て凡夫となり、無我を以て道者とする也。元より無我にして我と云ふ物なし。我と思ふは夢也。此夢の心より、諸の苦惱を造り出だして苦しむ事限りなし。されば己を盡さゞる間は、思ふ事も、作す事も、見る事も、聞く事も、一つとして苦ならずと云ふ事なし。此理に眼を付けて、油斷なく己を滅すべし。殺生せよ、殺生せよ、刹那も殺生せざれば、地獄に入ると箭の如しと云へり。此の如く佛道修行の本意は、自己を殺得して、本有の自性に契ふの

み也、更に別事なし。若し能く此の如く用ゐば、佛意祖意一時に通達して、萬法一如に歸すべき也。是れを無我無人の人と云ひ、大夢醒めたる人と云ふ也。

第八、物の恩を鑑みるは理也。是れを報するは義也。佛家には上四恩を報じ、下三有を濟ふ事を要とす。四恩と云ふは、一には天地の恩、二には師の恩、三には國王の恩、四には父母の恩也。三有とは、地獄、餓鬼、畜生の衆生也。それ天地の恩と云ふは、天の陽氣、地の陰氣を受けて、此身を得るを始めとして、水を用ゐ、火を用ゐ、日月の德を受け、天地の間に此身を置きて、衣服食物家財雜具等を用ふること、悉く是れ天地の恩也。此恩無くんば、爭か此身を保たんや。然るに此恩を知る人稀れにして、却て寒暑風雨に付け、天氣を恨む者のみ也。此の如くにては、何ぞ天命に契ふ事を得んや。可知、元來此身、地水火風の假合也。肉躰は土也。潤は水也。暖なるは火也。息の通ふは風也。此の如く皆是れ天地に借り得る處の物にして、我と云ふものなき也。若し明に此恩を知らば、天地の爲めに此身を捨てん事、誰か惜まんや。一筋に天地の恩を報ずべしと大願力を發して、此身を天地に返し奉るべき也。二に師の恩と云ふは、諸の師匠の恩也。就中最も重きは佛恩也。佛の方便に非ずんば、何に依てか無始輪廻の我等、三界に流轉して、盡未來際煩惱業苦の悲を受けん事を免れんや。而も元來人々佛性を具すといへども、是れを修し得る事、偏に師の力に依るを本とす。殊に此德を持ちなから、不覺不知にして、三惡道に墮在して、多劫が間、餓鬼畜生の苦を受くべき身の、終に佛果に至て、永く大安樂を得ること、忝きに非すや、是れを諸佛菩薩列祖等の大悲の恩と云ふ也。深く此義を觀察して、三世の諸佛を貴ひ奉り、今の道者を歸敬して、以て佛祖無爲の大恩を報し奉るべき也。三に國王の恩と云ふは、普天の下、王土に非ずと云ふ事なし。誰か此德を受けさらんや。聖王正治を敷き玉ふときんば、萬民自ら安んじ、非人畜類に到る迄、覺えずして此德を蒙る事甚だ深し。泰平の世に生を得る者は、此德を知れる事なし。亂世に逢ひぬる人、能く靜謐の恩を感せり。さる老人の曰く、亂世の古は、國々曾て治らず、盜賊狼藉の徒黨充滿して、旅人の通ひも自由ならす、村々里々に新關有りて、商人の往來もなう難く、諸職人皆飢に及へり。百姓は公務に勞れて、田地を耕すの隙なし。高きも賤しきも、日夜戰ふ心許りにて、佛法儒道の名をたに聞かず。此故に仁義の道を知らずして、或は親子兄弟鬪戰を企て、或は傍輩互に相諍ふて休む事なし。然るに天正の初めより、漸々に國土治り來り、就中當代に到て、人の心正路になり、學はずして仁義の道に近し。端國遠里に到る迄、次第に泰平を致して、

山野海陸悉く田畠となり、民の竈豐にして、日を追ふて相倍せり。此土の自由は云ふに及はす、異國の船まで渡來て、他方の珍物、此國に充滿す。縱ひ貧士孤獨の身たりといへとも、大名高家の爲めに、非道の罪有らん恐れなく、又盜賊辻切等の憂ひなしと也。此の如く萬民飽く迄安んすること、偏に上一人の御恩德に非ずや。此義を心肝に銘して、以て國恩を報じ奉るべき也。四に父母の恩と云ふは、母の胎內に宿り、十箇月の苦患を與ふるのみならず、出產の時に至ては、其命忽ち絕するか如きの苦しみあり。次に乳哺洗浴の恩あり。それ乳味を飡ふ事、一百八十石と云へり。又日夜大小便利に、母を穢す事限りなし。既に成長しぬるときんば、渡世の業を授けん事を思ふ心切也。或は遠く往く時は、遙に是れを思ひ量り、遲く歸る時は、側門の望みあり。或は纔の病にも、父母の心に千萬の悲哀みあり。片時の間もなく、色易り科易つて、我を忘れて、子の爲めに苦しむ事、誠に說き盡し難し。父母恩重經には、多劫が間、肉を切り骨を碎きて報ずとも、須臾の恩をも報ずる事を得べからずと說き玉へり。此恩を顧みずんは、人倫に非ず。專ら志誠を盡して、以て父母の恩を報じ奉るべき也。右の趣に依るが故に、强く志願を發して、此身を四恩の爲めに抛て、無我無人の人となるべし。若し然らは此功德天地に滿ちて、至らざる所なくして、四恩を報じ、三有を度し了るべき也。然るに此の如くの理を辨へ知らず、朝暮渡世の營みのみに心を盡し、曉の寢覺にも、此身を樂まん事を思ふて、命の終らん事を夢にも知らす、暗々として三途の業を增長して、大苦患を受けん事、淺間敷に非ずや。是れに就て、予一つの願念あり。縱ひ此身は、奈落の底に沉むと云ふとも、恩を知りぬる衆生となし玉へと。三寶の加被を祈る者也。諸人同じく是れを知るべき也。

第九、日月の往返速しと知るは理也。空しく過さゞるは義也。それ光陰箭の如し、時人を待つ事なし。四時の變遷飛花落葉身の上に非ずや。縱ひ恣にして百年を保つと云ふとも、電光朝露に異ならず、況んや又頓死眼に遮るあり。山水常に流るといへとも、本の水暫くも住まらず。年月長へに有りといへとも、去年は今年に移り、昨日は今日に易る。人世住家昔に替らずといへとも、時々に人改りぬ。有爲の轉變皆然なり。無常幻化の世に向て、何に心を留めんや。殊に日暮れ路遠ふして、三途の古鄕を出で難し。急き萬事を放下して、二心なく出離の道に進むべき也。

第十、顚倒の趣を知るは理也。著相の念を責め盡すは義也。凡夫心に四の顚倒あり。一には幻化無常の身にして、今をも知らぬ命なるに、是れを忘れて常住の思ひを作す心也。二

には此身は、萬苦の本なる事を知らずして、樂なる身と思ふ心也。三には元來此身は、地水火風の假物にして、我と云ふべき物なし。然るを錯て假の此身を我と思ふ心也。四には不淨穢惡充滿の身を辨へずして、清淨なりと樂しむ心也。此の如くの理に眼を付けて、堅固心を以て、身心を責め滅して、著相の念に離るべき也。

四問四答（武士日用最註也、師法大數、載于此中。）

問ふて曰く、世間に入得すれは、出世無餘（見大恐畏）と、此義如何。答へて曰く、佛法世法二つに非ず。世法に於て正理なる人と云ふは、正直の人也、慈悲の人也、無欲の人也、清淨の人也、人我の隔なき人也、義と理の正しき人也、私の心なく迷の心なき人也。此心天地に背かずして、物に達して明也。是れを世間に入得したる人と云ふ也。豈に此の外に別に佛法有らんや。

問ふ、正直と云ふに心得がたきこと多し、物を藏さゞる類を正直と云ふべきや。答ふ、正直と云ふに淺深あり、其深理と云ふは、此心煩惱妄想の僞を離れて、一切に碍ることなく、天性の直心に至り得るを正直と云ふ也。又淺理と云ふは、義を正しく守て、理に背かず、自他無差別の理に相應して、曲れる心なきを正直と云ふ也。此の如くの理と義に依て、正





直の体を顯はす。義に依るときんば、隱すべきをは、深く是れを藏すべし。萬事を露はす許りを以て、正直と云ふには非ざる也。

問ふ、義と理を用ゐて、正直の道に入ること尤も也。然れとも文義の正意辨へ難し。如何が是れを用ゐんや。答ふ、義と理は萬物の上に備れり。其品多きことなれば、具に述ぶること難し。然れども根本は一にして、其外は枝葉也。唯根本を究むべき也。其根本と云ふは、已に勝つ人を義者とし、已に負けたるを不義者とする也。又是れにも淺深あり、其深理と云ふは、此身元來地水火風の假物にして、實體なく、萬事皆幻化なる理を慥に悟りて、虛妄の相に離れ、僞の名に離れて、願ふこともなく、厭ふこともなきを大義者とする也。此人は我と認めて愛すべき身もなし。其身なければ、恐もなく憂もなく、其心虛空の如くにして、全く生死煩惱の碍りある事なし。是れを已に勝ち得たる人と云ふ也。又已に負くと云ふは、假の身を實と作ずを本として、或は喜び、或は悲み、或は嗔り、或は貪り、或は嫉み、或は妬み、或は恐れ、或は驚き、或は愛し、或は惡む類也。是れを今世後世永く苦海に沉む人と云ふ也。此趣を以て、品々心得玉ふべし。已に勝つと云ふにも、負くると云ふにも、機に隨つて段々淺深あること也。

問ふ、已に勝つべき心得、仔細に示し玉へ。答ふ、常の心遣に、浮心あり沉心あり。浮心は已に勝つ心也。沉心は已に負くる心也。浮心と云ふは、一陣に進み出て、心を張掛けて持つを云ふなり。譬へば奉公人は、常に主人の前に出て、心を張掛け、強く持て仕へる處、是れ浮心也。又必す思ふべき様あり、此身は主人の恩を以て養ひ立て、家財を得、眷屬を具し、萬自由をなすこと、悉く是れ主人の恩なり。此恩を報じ得んこと、色身を滅せずんば叶ふべからずと思ひ定めて、常に捨身を守て勤むべき也。此の如く用ゐて、兎にも角にも進む心あれば、勇猛の心となつて、必ず已に勝つべき也。

## 示遁世者

一心の中に佛あり、一心の中に鬼あり、一心の中に地獄、餓鬼、畜生、修羅、人天あり。故に經に曰く、三界唯一心、心外無別法、心佛及衆生、是三無差別と也。又歌に『心こそ心惑はす心なれ心に心心許すな。』又『燃え出つる嗔恚の焔消えやらで我と引きけん火の車哉。』と也。心の鬼、身を責ることを能く知るべし。心の鬼、我を引いて惡道に入る也。心は心の怨也。心の外に我を惱す敵なく、心の外に恐るべきものなし。六塵の境に迷ひ、六根の罪を造るも心也。唯心に心を付くべし。戒めて猶ほ戒むべきは心也。全く心に隨ふべ



からず。強く心を隨ふべし。必ず心の師となるべし。心を師とすること莫れといへり。されば我が心を能く用ゐ得る處、則ち是れ佛也。又有相執着の念にして、萬事に心を留むるときんば、惡業無明の鬼たり。畢竟道心者と云ふは、必ず死すると云ふことを、必死と心に掛けて、六根に碍へられず、物に心を移さず、見ること聞くことに惑ふ心なく、萬事を捨て已を忘れず、一大事を勤むるを信心堅固と云ふ也。

## 又

人々身の上を辨へ、我知り顔に見ゆれども、先づ死の近きことを知る人希れ也。加之年の老いたるをも知らず、無益の事を好むをも知らず、心に僞のあるをも知らず、心に惱のあるをも知らず、心に諂のあるをも知らず、物の憐れをも知らず、貪欲の強きをも知らず、執著の深きをも知らず、家職を勤むべき事をも知らず、忠孝の道をも知らず、仁義に背くをも知らず、分別猥にして狂人に異らず、此理を慚愧せん人は、我が心の僻事なる故に、我が心は苦しむ也と云ふことを慥に知りて、專ら僻事を改むべき也。若し又我が力に及ばぬ程ならば、精誠を盡して、佛神に祈誓を爲すべし。先づ欲心強き人は、此欲われを惱す事を能く知りて、至心に祈念して、欲を退治すべき也。嗔恚の強き人は、此嗔恚我を惱す敵也

と知りて、嗔恚を祈念して、是れを退治すべし。執著の心深き人は、此執著我を苦しむる怨也と知りて、祈念して是れを退治すべし。死の恐れ強き人は、死を怖るゝ心、我が怨也と知りて、是れを祈念して調伏すべし。此の如くの事を祈らんには、佛神などが感應莫からんや。增賀聖は無道心なる事を悲しみ玉ふて、神明に祈りて、是れを得るといへり。拙哉や、今時の輩、此の如くの理を聞けども信せず、見れども尊ばずして、自ら好んで貪欲に責められ、嗔恚に燒かれ、愚痴に味されて、更に正理を辨へず、己を知らずして暗より闇に入ること、淺間敷事に非ずや。萬事は皆非なり。強く眼を付くべし。

〔一物不將來〕 嚴陽尊者問趙州。一物不將來時如何。州云。放下著。者云。已是一物不將來。放下這什麼。州云。恁麼則擔取去。者於言下大悟。（會元）

### 示僧

人の心區々なれば、教法品多しといへども、肝要は實有の念を覺し得るの外は有るへからず。一物不將來の時如何と問ふは、有念の語なり。放下著と答へ玉ふは、無念の語なり。古人一則の公案を授け玉ふこと、念根を截斷せんが爲めなり。又念佛の一行を授け玉ふこともも同意なり。其義正しきときんば、南無阿彌陀佛と唱ふるも、念根を截斷するの劔にして、菩提の正因となるなり。又其義錯るときんば、話頭公案なりとも、有所得の念にして、却て輪廻の業となるべし。元來佛經に此意明なりといへども、末々に到て經文言句のみを



執して、此意に通せざるが故に達磨大師出世して、直に念根を截斷するの理を示し玉へり。然りと雖も今時の輩、又達磨大師の言句に泥みて、實の念を離るゝ事を知らず。經に曰く、諸行無常。是生滅法。生滅滅爲。寂滅爲樂。又曰く、一切有爲法。如夢幻泡影。如露亦如電。應作如是觀と。是れ無念を示すの直語也。古人の曰く、無事是貴人。但莫造作。又曰く、煩惱由心故有。無心煩惱何拘也。此等の語に於ては、直に承當して知るべき也。只分別を以て、念を止めんとせば、二重の僻事也。是れに依て祖師方便を立して、直に自性に契はしめ玉へり。是れ自性に念慮なく、自性本空なるが故なり。諸人若し能く承當せば、此に於いて佛祖の言句、皆悉く透るべき也。

### 示世人

凡夫初めて菩提を修する事、諸行無常の理を觀ずるも可なり、如夢幻泡影の理を觀ずるも可なり。莫妄想の一句を用ゆるも可なり、誦經念佛を用ふるも可なり、目前の境に對して有爲轉變を守るも可なり、自己を敵となして萬事に付いて責め戰ふも可なり。然りと雖も、肝要は、此身を顧みて、畢竟何の役に立つぞと見玉ふ所、猶ほ以て可なり。此身に付てある所の物、悉く皆苦患にして、一も樂しみなる事なし。先つ寒暑、痛痒、飢渴、困睡、澡浴、

剪爪、坐臥、起行等皆是れ苦惱也。心には三毒七情を始め、八萬四千の苦しみあり、是れ皆身より出でたる苦患也。又一病來時の悲み甚だ堪へ難きもの也。況んや四百四病、內外より責むる身に非ずや。殊に此身は元來不淨なり。而も惡血充滿の身にして、五臟腸猶ほ清からず、目汁、鼻汁、大小便利、毛の穴より出る汁に至る迄、臭氣甚しくして、樂しむべき所なし。然るに無始より以來、是れに貪めらるゝ事を知らずして、還て樂しみと作して、永劫此責を免れさるを迷の凡夫とす。又此理に眼を著けて、是れに勝つを安樂の得益とし、勝ち了るを成佛と云ふ也。拙哉、此義を辨へず、怨を養ふて永劫火宅を樂しみとせる事、大なる錯に非すや。思之思之。

## 與或士

佛心に惡事無し、佛心に生死無し、佛心に名利無し、佛心に內外無し、佛心に差別無し。佛心に退屈無し、佛心に貪欲無し、佛心に執著無し、佛心に惑亂無し、佛心に嗔恚無し。佛心に愚痴無し、佛心に慳貪無し、佛心に取捨無し、佛心に好惡無し、佛心に是非無し。佛心に我慢無し、佛心に諂誑無し、佛心に愛念無し、佛心に妄想無し、佛心に臆病無し。佛心に動轉無し、此時無一物也。佛心にあるものは、唯廣大の慈悲ばかり也。邪悟を用ふ人に示す迄也。但し其要は浮心にあり。

## 示農人

因果經に曰く、欲知過去因。見其現在果。欲知未來果。見其現在因也。又經中に、十來の儀を說きて曰く、高位は敬禮の中より來り、下賤は憍慢の中より來り、短命は殺生の中より來り、長命は慈悲の中より來ると云々。今貧賤無智の身と生を得る事、前生の業を感ずべし。又未來の果を、何ぞ今日に鑑みざらんや。其要唯人々の一心にあり。心一の使ひ樣惡敷して、大地獄に入る事、淺間敷事に非ずや。而も此心を能く用ふるときんば、未來の苦を免るゝのみに非ず、今日忽ち其業を轉ずる道理なり。縱ひ其身下賤なりと云ふとも、一心正直の理を守らば、公家殿上人にも勝るべし。又高位高官の人たりと云ふとも、其心直ならざるときんば、鬼畜に替はりあるべからず。此義に依るが故に、上下共に人倫としては、唯善心を起し、善根を修するの外なし。然りと雖も善根を作すに、又有漏無漏の二種あり。福德高位の身を樂しむ心盡きずして、我が身の爲めに作す功德は、未來福德となるといへども、輪廻の業盡くべからず、是れを有漏善と云ふ也。又成佛の願のみにして、福德高位の望みなく、唯身心を殺得して、此心を安樂ならしめんと思ふて、念佛誦經等を

〔有漏無漏〕漏は生死に落するの義、世間善は、福力盡くれは再び六道に輪廻するか故に有漏善といひ、出世間善は、永く生死を解脫して涅

樂に住するかに無漏善とは名くるなり。

作して、身を責め心を責むるは、永く生死を離れて、生々世々大安樂を得るなり。是れを無漏善と云ふ也。此の如く福德の因と、無上菩提の因と、二あることを辨へて修すべき也。大切の功德を積んで、生欲の上に、又死欲を願ふこと莫かれ。汝一生佛を敬ひ、法を貴び、僧を供養し、諸の善根を作す處、皆是れ無始劫來の惡業煩惱を消滅して、生死の根源を截斷すべき願力を以てせば、無上菩提の正因也。若し此道理を得ば、年月日時に於いて、少しも隙なく辛苦して、身心を責むる所の農業即佛行なる事を知て、終に佛果に到るべきもの也。勉之勉之。

## 出法並六道之解

嗔恚より地獄に入ること、其理明也。嗔恚より起る所の念、一として正路なる事なし。嗔の心強き人は物ごとに憤り強くして、人を憎む心甚だし。其性暗きが故に、人恩をも辨へず、佛神をも敬はず、兄弟、朋友、父子、夫婦の親も知らず、幼にも愛心なく、憐愍慈悲の種を斷ちて、非人乞食にも情少し。少しの事にも、大なる怨を含み他人の頸を切りても、心猶ほあきたらず、非義に非義を重ね、我と我が胸を燒きて、自ら苦しむ事限りなし。非情草木に向ても、嗔る心のみ相起れり。況んや一切の有情に對せんをや。能く〳〵顧みて



知るべき也。

貪欲より餓鬼道に入る事、其理明也。貪欲より起る所の念、一つとして正路なる事なし。先づ兄弟、父子、夫婦の中にても、他の爲めを思ふ事なく、唯我が欲ばかりを思ふて、曾て他の恩を知る事なし。貪る心強きが故に、富める上にも、富める事あきたらず、曉の寢ざめにも、財寶を思ふ心休まずして、見る物毎に欲心起るが故に、常に人を掠めて我が得と作すこと多し、一功草木珍石までも、他の庭にありては、面白からず。己が庭に移し取りて樂とせん事を思へり。惣じて多欲の人は、人の善を嫉みて、我が足らざる事を恨むるものなり。此故に時々に怨を含んで、仁義猶ほ思ふ事なし。何ぞ菩提を思ふ心あらんや。乞食非人に向ても、偏に慳貪の心のみ也。寔に此心より造り出たす處の罪、無量無邊也。愚痴心より畜生道に入ること、最も分明也。愚痴なる人は、物の理を知らず、唯我が身を思ふ念のみなるが故に、萬事理に契ふ事なし。明に是非を辨へたる人さへ、其身を思ふ念は休め難し。況んや愚痴一偏の人に於いてをや。唯道理なく、無明に身を思ふ念計り也。此無明の中より作り出だす處の罪科無量也。先づ人を忘れて身を思ふ念強きが故に、一切に付いて我はよく、人は皆惡しと思へり。仁義禮智をも辨へず、父子兄弟の親もなく、三

寶をも敬はず、神明にも恐れなく、善人を嫉みて、惡人に親しく、自慢の心增長して、親しき異見を惡しく受け、私欲の心熾にして、萬人の心に背き、非を知らざるが故に、諸人を憎みて我が過を辨へず、正理の道に於いては、聞くといへども耳に入らず、見るといへども目に見ゐず、言ふ事も亦理にあたらず、身口意の作業、皆以て邪道なる計り也。

人我の心より修羅を作り出だす事、最も分明也。人我の心强き人は、仁義の道を知るといへども、行ふ事なり難し。唯一切に付けて、我を立てゝ、人に勝たん事を本意とす。設ひ善根を做すといへども、名利の善根のみ也。尋常の理非に對して、憤り强く戰ふ心休む時なし。常に亢る心强きが故に、其長も高くなる心地して、人を見下し、嗔を含み、胸に猛火を熾にし、我と心を苦しむのみ也。

五戒を持て人道に生ずる事、最も分明也。五戒を持する人は、僞りなき眞の身心を修する人也。故に其報に心正しく、身全くして、六根完具の人間と生るゝを得る也。又五戒は五常に相通じて、正直の道也。此故に知るべし、現に五常正しき男女と生を得來る事は、偏に前世持戒の功力なる事を知るべし。然れども今時、持戒正しき人希なるが故に、人躰を得來るといへども、心は大約鬼畜のみ也。地獄の馬を畫に描きて、其面ばかり人たる相を顯はす事是れなり。此を以て人々自心を顧みて、五戒を犯す事莫かれ。若し然らずんば忽ち人身を失して、萬劫千生三惡道に墮せん事、全く遁るべからず。可恐可恐。

〔原註〕十善は、十惡を慎むを云ふ也。十惡とは、殺生、偷盜、邪婬は身に付く過。惡口、兩舌、妄語、綺語は、口に付く過。貪欲、嗔恚、邪痴は意に付く過。已上十惡なり。

十戒を持て天上に生ずる事、最も分明也。十善の行を正しく修し玉ふ果報に依て、福德高位に至り、快樂自在にして心の儘なる世樂を得玉へり。されば忍辱强く、慈悲深く、善心を起し、善業を作すときんば、微妙の色身を得て、心に自由の樂を得る也。短慮にして惡心を起し、惡業を作すときんば、形賤しく、心苦しみて、萬般不自由の身と生れ來る也。可知、形能く其身自由に、心に愛ひなく、苦しみなく、命長くして、樂しみ多き身心を得來る事、悉く皆善の功德なる事を。此の如く善心善業の目出度事を知て、惡を退け善を修し玉ふべき也。

## 出法

右に書するが如く六道輪廻は、今日の一心の所爲也。故に惡心を去て善心を勤め、惡道を免れて善道に赴くべき敎を、佛は肝要に示し玉へり。然りと雖も此は是れ小乘の法要にして、衆生の機に因て、三惡四趣の輩を救ひ玉ふ方便也。實には永劫の六道輪廻を免れて、不生不滅に歸せしめん事を要とす。是れを成佛とも、往生とも、大乘の極地とも云ふ也。

故に今此に出道の小分を書す。前に云ふが如く、一心に依て六道に墮するが故に、又一心の用ゐ様に依て、是れを出づる也。先づ嗔の心は實に身を切割く劔也、身を縛する繩也、身を打碎く鐵槌也、身を焦がす猛火也、身を鑠かす鐵湯也、身を圍む牢獄也と慥に知て、嗔る心を制し、心を和げて、人を惠み、慈悲心を專として、三寶を敬ひ、下たる人に情深く、上たる人を敬ひ、偏に忍辱の行を守て、後生菩提を思ふ心あらは、便ち是れ地獄を破るの道也。若し然らずして嗔る心を恣にせば、萬劫千生大地獄の苦を受けて、終に免るゝ事有るべからず。

貪欲より世々生々の餓鬼の苦を造り出だす事を、慥に知りて欲心を捨つべき也。元來貧福は、過去の因に定りてあり、今生の所求に依て來るに非ず。天道少しも僞り玉ふ事なし。私なく明に善惡の報を與へ玉へり。今欲心に任せて求むると云へども、曾て得ること有るべからず。邪欲の人は、却て天罰を蒙るが故に、過去の福報も消滅して、災難を招き、命も短く、子孫も不吉也。殊に此心は、未來永劫の餓鬼の苦患なりと云ふ事を慥に知て、貪欲の心を捨て、慈悲を專とし、力に隨て佛法僧を供養し、一切の人を惠み、畜類等に至る迄憐の心を發すべし。是れ即ち餓鬼道を破るの路なり。此の知くせば寔に是れ今生の本意なり、後生の樂なり。

愚痴なる人は、直に畜生なる事を辨へて、己が心を顧みるべし。先づ我が心佛祖の言句に通ずるや、聖人の教に契ふやと見るべし。形人なりといへども、心畜生なるが故に、是等の眞理胸に移らざるもの也。又愚痴深きときんは、世間の理非を分くる事も不自由にて、物ごとに我が心に叶ふこと少し。此故に若し我が心、世人の心に違ひぬると思はゞ、必ず我が愚痴を知るべき也。歌に『我が善きに人のわるきがあらばこそ人のわるきは我がわるき也。』と。此歌、心の鏡也。是を以て相察せよ。されば愚痴にして、愚痴なりと知らざるは、盲の闇を知らざるに同じ。我は實に愚痴なりと知ること、先づ愚痴を破るの初め也。次に人の異見に付くを要とし、親子兄弟を親しみ、一切の人に隨ひ、欲を捨て、慈悲を起し、我は元來愚痴にして、物事の心得然るべからずと、心に思ひ口に云て、惣じて他の心を借りて使ふべき也。是れ便ち畜生道を破るの道なり。

人我の心は、修羅道の因なる事を知り、心を和げて人を隔つべからず。されば大名高家と云ふも、夢の中の夢なれば、羨むべきに非ず、貧賤孤獨も亦夢なれば、苦しむべき道理なし。我と云ひ人と云ふも、皆是れ夢の間也。見る人、聞く人、一人も殘る事なし。昔の人

を思ふに、其名殘りて更に益なし。唯世の中の人は、夢に見たる人に替る事なし。何國より來り、何國に去るや。皆是れ夢中の戯也。此を以て一切有爲法。如夢幻泡影。如露亦如電と說き玉へり。能く此意に眼を付くべき也。されば人我を生ずるは、其心狹き故也。三千大千世界は、限りなき事なれば、縱ひ大國の主たりといへども、小分の事也。況んや小國の中に於いて、人我を諍ふと云へども幾許ならんや。纔に百二百五百千人の間なるべし。其外へ出づる事希れなるべし。大方は五十三十の中に於いて、我を立てる事を思ふと見えたり。誠に淺間敷心に非ずや。此理に眼を付け、公に心を用ゐて、萬人を惠み、慈悲を專とせば、却て萬人は下となり、自ら向上の德備はるに非ずや。此心即修羅道を破るの路なり。

五戒を持て人間に生ずといへども、生老病死の極苦の責を蒙るの本也。縱ひ五常正しき身なりといへども、實有の夢醒めざるの間は、苦樂の境界休むことなく、何時までも人間に還て、苦患を受くべし。一度身心共に幻化なる事を悟らずんば、出離することあるべからず。此故に可知、善と云ふも幻、惡と云ふも幻、苦と云ふも幻、樂と云ふも幻、高位と云ふも幻、下劣と云ふも幻、名と云ふも幻、利と云ふも幻、惣じて有爲の轉變、皆是れ幻にして、更に實有なる事なし。非情草木の花咲き實熟する事も、本是れ一物無き處より出生





〔人間の八苦〕一生苦、二老苦、三病苦、四死苦、五愛別離苦、六怨憎會苦、七求不得苦、八五陰盛苦。
〔天上の五衰〕五衰に大五衰、小五衰あり、大五衰は、一衣服垢穢、二頭上華委、三腋下汗流、四身体臭穢、

して、元來なき物なれば、畢竟無也。世界、國土、人畜、蟲豸、悉く皆幻也。されば幻化の世界に幻身を留めて、是非を思ふこと極めて錯に非ずや。佛祖の出世も、唯此實有の夢を醒さしめんが爲め也。別事有ることなし。早く善知識を求めて、出離の道を修行すべし。是れ便ち人道を出づるの法なり。

十戒に依て天上に生ずといへども、其果盡くるときんば、又忽ち大地獄に墮して、無量の苦しみを受くる也。是れを天を指して射る矢の、弓勢盡きては忽ち落つるに譬ふ。又痴福は三生の怨なりといへるも是れ也。上天の極果に、八萬劫の樂みありといへども、終には盡き果つるの期あり。此時に到ては、永き樂しみも一夜の夢となりて、無量の苦しみ身に來れり。人間の八苦よりも、天上の五衰は堪へ難しといへるは是れ也。此苦を思ふときんば、天上も亦苦界にして、八萬劫の樂しみは、却て苦しみの因緣也。世の諺に北州の千年、蜉蝣の一時と云ふこと、能く賢聖の意に相通せり。又古に曰く、智者常懷憂。如獄中囚。愚者常歡樂。猶光音天と。寔に樂しむ心は、愚痴の至也。唯苦しみの中に成佛の緣あり。樂しむ心を放下して、一筋に無上菩提を勤求せば、是れ便ち天上界を出づるの道なり。

念願書略

五不樂本座。小五貢は、一樂碎不起、二身光忽滅、三浴水著身、四著塵不捨、五眼目數瞬。

〔原註〕此文稍常書し玉ふ修行の念願に、聊か異るが故に、是れを拔書して、此に載す。本書は尾州大野村玄休菴にあり。卽ち石平の眞筆也。

世法卽佛法也。若し世法を以て、成佛するの道理を用ゐずんば、一切佛意を知らざる人也。佛世一枚之段に有之也八金剛、四天王、五大尊、各威勢を振ひ、物の具を著し、鋒刀杖弓矢を持て雙び在すなり。此威勢を用ゐ得ずんば、六賊煩惱に勝つこと有るべからず。佛像建立之段に有之也それ佛法は、人間の惡心を滅する法也。願くは佛弟子を、萬民の惡心を治する役人に仰付けられ、國土の功德と作し玉ひかしと、念願し奉るもの也。

## 與或士

佛寶、法寶、僧寶、是れを三寶と號く。然る間佛法の寶、卽國土萬民の寶とならずんば、三寶の名も僞也。又出家と號くる事は、三界を出離するが故也。若し出離の修行なくんば、出家の名も僞也。佛法便ち世間の寶なる趣。一、佛法は武勇に使ふ寶也。二、佛法は諸法度に使ふ寶也。三、佛法は五倫の道を正しく使ふ寶也。四、佛法は諸藝能に使ふ寶也。五、佛法は渡世身過に使ふ寶也。六、佛法は三毒を去て、心病を治する寶也。七、佛法は諸の苦を去て、煩惱を斷ずる寶也。八、佛法は諸惡を去て、諸善に用ふる寶也。九、佛法は一切の所作の上に用ゐて、障りなき寶也。十、佛法は不生不滅にして、極樂に住する寶也。此の如く使ひ得ずんば、佛法者に非ず。





## 追腹

去處にて人數多集り、種々の儀を語りける折節、一人云ひけるは。當代主君の死期に、追腹を切る業あり、是れ道なりや非道なりや。時に一人答へて曰く、今時追腹を切る人の心に凡そ三の科あり。一には主君の重恩を蒙り、是れを報ずべき樣なし、せめて二世の忠孝を作さんと云ふて切る人もあり。二には名聞甚だしきが故に、何事にも我を立て、譽を顯はし、後の世に名を殘さん事を思ふて切る人もあり。三には自らは思寄らずといへども、世人の口邊を恐れて、悲しみながら切る人もあり。誰か是等を道とせんや。勝れたる不忠非道の作畧也。其故は人の死後に智識を賴み、懇に三寶を供養する事は、偏に三界を出離せしめん爲め也。然るに追腹を切りて、後世の供をなすと云ふことは、未來永劫輪廻の業を授け奉りて、世々生々主君の枷鎖となるの仕業也。大なる不忠に非ずや。謀反逆心の罪は、今生一世の不忠、追腹の罪は、多生の不忠也。佛出世ありて、難行苦行の功を以て、無量の法門を演說し、普く衆生を度し玉ふこと、偏に三界を出ださしめんが爲めのみ也。然るに此趣を知らずして、主人を地獄に引落して、永く苦を掛け奉り、成佛の種を斷つこと大なる重罪に非ずや。又一人曰く、此道理尤もなり。然らば主君の爲めに身命を抛て、一陣

に進み出でゝ死を致す事も、主君の惡業とならんや。答へて曰く、此は是れ厚恩を報ぜんが爲めに、此身を捨てゝ敵を滅さん爲めの忠也。何ぞ主君の惡業とならんや。又問ふて曰く、譬へば軍陣に於いて、主君討死し玉ふ後、敵の中へ趣け入りて死せんも非義ならんや。答へて曰く、是れ猶ほ正理也。主君を害せし敵を討たん爲めの忠也。但其人々の心得に依て、善惡あるべき也。又問ふて曰く、兎角主人の爲めに死せば、主人の惡業となる間敷や。答へて曰く、武勇の家に生るゝ人は、君恩を報せんが爲めに、義を重んじて命を輕んずること、侍の本意也。殊に況んや賊徒を退治し、國を治め、民を養育するの役人也。何ぞ惡業と云んやと也。此論實にもと思ふが故に、是れを認む。寛永二十年十月十一日書之。

## 願書

光陰箭の如くなりといへども、老の來る事を知らず。魔障雲に同じくして、心月明なる時なし。然れば我等迷倒の心より、日夜業障を造り出たし、身心を惱ましめて、流轉生死の苦因となすこと甚だ限りなし。或は貪欲を起して、及ばざる事を願ひ、叶はざる事を嘆き或は嗔恚を發して、自他の身を損害し、禍を子孫に及ぼし、或は愚痴を發して、物ごとに深く著して、正理を辨へず。凡そ此三毒は自心を痛しむる始めにして、終に八萬四千の塵



勞を造作すといへども、中にも愚痴を以て根本とす。而も三毒十惡の報は、永く三惡道に墮して、無量の苦を受けて、出づる期なしと說き玉へり。此故に我常に是れを悲んで、一切衆生と同心に、貪嗔痴の三毒を轉じて、戒定惠の三學となし、八萬四千の塵勞を破りて、八萬四千の法門を悟らん事を志願す。末法下機の身に於いて、之を思ふこと又愚なりといへども、心中の所願休む時なし。老の到るに隨て、猶ほ是れを思ふ事切也。今既に正像過き了つて、末法に至るが故に、佛敎これありといへども、佛意を辨へる人なく、修行の名猶ほ聞く事なし。爭てか見性成佛の人あらん也。今時家を捨て釋門に入る人も、專ら名聞利養に住して、曾て佛子の意に非ず。終日俗家に諂て權門に徘徊し、世人は精舍を穢して逍遙の園となし、尊僧の義を失ひ、三寶の德を無みす。誠に以て淺間敷次第也。之に依て佛世一般の趣を示して、兩家の惑を救はんと欲すといへども、時既に末世也、人皆下機也、又未だ我が力滿たず、偶遁世修行の身と成りて、四方に周流すといへども、眞に知識に緣なくして其功空し。生死事大也、年月我を待つ事なし、如何にしてか生死の大事を免んや。右の二意に依るが故に、竊に十箇條の愚意を述す。予元來一文不知にして、內外の敎典に通せず、和漢の文法を學せず、猥に心に浮ふに任せて、是れを書記し畢んぬ。見る人謗を

なさゝれ。我が志す所偏に無智の僧俗をして、或は興法を思はしめ、或は菩提の緣を結ばしめんと思ふのみ。謹み敬つて啓し奉る。南無十方三世一切諸佛諸大菩薩、日本國中大小神祇等、弟子某、縱ひ此身は奈落の底に墮すと曰へども、十條の意を失せずして、生々世々に於いて、終に四恩を報じ、三有を導き、一切衆生と共に、無上菩提を成せん事を冀ふ者也。

右者、師遷化之後、石平山にて、反故の中より拾ひ出だし、卷となす者也。



# 反古集 卷下

## 與或士

〔斷無の見〕外道の邪見なり。けだし外道は、五蘊今世に滅し、更に再生せずと計するなり。

菩提に御進み候由承はり、珍重に存じ候。然れども禪門は、佛心の正宗たりといへども、惡しく心得候へば、外魔の見となり申し候。大事の義にて候間、能く〳〵御心得有るべき也。或は早濟(はやすまし)して向上に成る人あり、或は悟りたるとき、斷無の見に落ちたるあり、或は邪法に依て病人となり、氣違となるあり、今時世間に種々の化者あつて、多く人を惑はし申し候。彼れに惑はなれば、佛法病著きて、黑闇に落ち入らるべき也。然る間先づ佛法の大要を能く心得らるべし、佛は是れ大醫王也。衆生の煩惱の病に責めらるゝ事を悲しみ玉ひて、八萬四千の法門を演說して、八萬四千の煩惱の病を治し玉ふのみなり。譬へば神農の百藥を以て諸の病を治し玉ふが如し、又惡醫師是れを以て却て人を損ふ事あり、是れ藥の咎に非ず、邪醫の咎也。今時の佛子もまた此の如く、佛法の正理を辨へず、邪法を授けて、人を損ふ類多し。是れ法の咎に非ず、邪師の過謬也。偏に煩惱の病を治する事は、明

師に依る也。此故に明師を知る事を肝要とす。今明師を知るには、其人に病有るか無きかを見知るの外は無し。是れ凡夫の人を量り見るの作畧也。然りと雖も、今時明師を得る事難し、只我と此病を治すべき用心專一也。それ佛道に入るの要は、理入行入の二を出でず。一に理入と云ふは、一切有爲の法は、悉く是れ幻化なる事を悟て、實有の心病を消滅するを云ふ也。二に行入と云ふは、人々の根機に隨て、坐禪、行道、誦經、念佛、受戒等の諸の行力を以て、身心の煩惱を責め盡すを云ふ也。今又別して武士の行入を書付け越し候間、日夜是を守らるべき也。

一、生死を強く守て、奥齒を咬合せ、眼をすゑて、忽ち死すべき心を以て、一陣に可進。

一、強き馬に乘りたる時の機を持て、心を張掛け、勇猛精進の機を常住可し守。

一、此臭皮袋、更に詮なき理に眼を付けて、一切の執著を可し捨。

右の心を能く〳〵用ゐらるべし。委くは頓て上方へ參り候間。その時分面上に申す可く候。以上。

〔臭皮袋〕人間の肉体をいふ。

與或士 書頭に理入行入の斷りあり、爰に之を除く。此ば是れ其行入の文なり。

此身心を愛して、八萬四千の煩惱の病に責めらるゝを凡夫とし、此心病無くして、無事なるを道者と申す也。我も人も此煩惱の病責め拔き候へば、成佛にて候。此病治せざる間は、萬劫千生惡業の衆生にて、全く成佛に非ず。此理に眼を著けて、强く身心を責むべし。只起る念にはかまはず、敵の鎗先へ走り懸かりて、撞拔かるゝ心を持つべし。假にも身心を愛する事あるべからず。以上。

與正誓

氣相能く息災の由、一段の事に候。我等も宗門の公事、濟み次第に上り可申候。後生一大事、油斷有る間敷候。死の來る事、今も知れ不申候。ひしと心に掛けたらば、必ず行當り申さるべく候。同じくは恵雲も同道にて下り可被申候。返々菩提の事、十二時中心に掛けなは、惡業責め可申候。以上。

與或士

其元萬事御苦勞の段、察し入り候。御氣力如何と存じ候。然れども御奉公の義に候間、折角御勤め可有候。同じくは役儀を、直に工夫に御用ゐ候へかしと存じ候へども、定めて御不自由たるべきと存じ候。俄には成らざるものにて候間、漸々に御油斷なき樣に可被成候。已上。

〔原註〕此の如くの機の位を知らざれば、幾年修し行じても、心に徳なし。只今の心を使ふ位を、能く知るべきなり。

〔原註〕今時修行の肝要、此一段にあり。強く着眼すべし。

又

貴公は修行久しき御心掛にて候へども、さのみ徳も候はぬば、笑止に存じ候。常々の心遣に、色々の品有之候。是れを能く〳〵穿鑿尤もに候。以上。

與江州衆

爰元にても、後世沙汰致す衆、少々出來申し候。其元の様子、心元なく存じ候。彌強く御進み可有候。凡夫心にて向上を用ゐ候事、不成物にて候。兎角心を丈夫に起し習ふ事、肝要にて候。無事心を以て、亂心を収め候事、全く難成候。其御分別尤もに候。其爲めに四民日用書き申し候。能く〳〵御覽可有候。以上。

又

其元何れも菩提の御心掛、御油斷なき由委しく承はり、大慶致し候。心短く候ては、用に立ち不申候。古人も三十年四十年を經てならでは、少しも色付き不申由被記置候。我れ〳〵も油斷は仕り候はねども、何のへんも無之罷在候。平次右も此前よりは進み候かと見及び申し候間、彌御進め頼入り候。以上。

答或士





佛祖の言句に相契ひ玉ふの趣、具に拔見申し候。貴方の見は一々虚妄分別にて、全く眞悟に非ず。皆是れ古人の意にして、其方の意に非ず。天地未分虚空同鉢と見ると云ふとも、其身心の行ひ是にあらずんば、唯隣の寶を數ふるか如くにして、自己には何の益も有るべからず。又小家の貧き人、他の大家に到りて樂しむに同し。此前は我見も其方と同し、今は大に易りて、唯能く自心の非を知る也。數十年日夜安く睡られざる程勤むれども、未だ畜生の見を出でず、今は是れを出でん事を願ふのみ也。又平常心に契ひて、逢茶喫茶、逢飯喫飯、日を送ると被仰越候。是れ猶ほ今時世間にはやる處の惡悟也。貴方平常心に契ひ候は〻佛也。此上に何事か有んや。直に虚空の碍なきが如く、苦もなく、悲もなく、愛もなく、憎もなく、望もなく、嫌もなく、萬事に於いて碍る事無之也。大略心は使はれずして、道理計りなるべし。今時世上の高僧達、佛道を輙く思ひて、口には我平常心に契へり、無事の人也と云ひ玉へども、其行ひを見るときんば、此糞袋を愛し惜まるゝ事甚だ深し。或は我を立てんが爲めに他人に怨をなし、我が心に合はざるを惡み、嗔恚を起すのみならず、飽くまで貪欲深く富貴の人に諂ひ、位を爭ひ住持を望み、我慢偏執熾にして、下なる人には、無理をなせる事多し。是れ皆鬼畜の心にして、全く人心に非ず。今時大に亢て、悟得すと

云ふ人を見るに、未だ畜生心を盡されたる人を見ず、又未だ非を知りたる人をさへ見ざるなり。其方も詮なき事を樂まんより、只惡心を盡す事をのみ、勤め行はせらるべき也。

與或士

御老母御達者の由、念佛油斷なき樣に、朝夕御勸めあるべく候。是れ第一の行なり。今時心得愚なる人は、念佛を淺き事に思へり。是れ大なる錯也。佛祖何れも工夫長養なくして修行成就したる人無之候。見性の後にも、猶ほ工夫長養專なり。達磨大師も西來の後、九年面壁なされ候。然れば工夫と念佛と、少しも替りあるべからず。替りたると思へるは、其人の心到らざる故也。今時修行もなき人の、少しの理窟を以て、悟りだてを致す事、甚だ愚痴の至也。南無阿彌陀佛の一念の中には、佛もなく、衆生もなし。慥に一切を離れ、三界を滅却するの大法也。願はくは貴方も、此行を御用ゐあるべく候。今時古人自心の働を沙汰し置れたる處を、取來て我物となして心得だてするあり。是れ極めて愚なる事に候。道理を少し沙汰する事は、何れの人も安き事也。只常に長養する人、古今共に希れに候。萬事を捨て、念佛を唱へ玉ふ事、何れの行にも勝れ可申候。生死を脫くること、修行無くして全く不成事也。心を御付け候て、浮世の人をさげすみ玉ふべし。修行無くして、今何れ





の人か、生死を離れたる人有之候や。但念佛を唱ふる人の中にも、極樂の正理を知らずして、光明紫雲を求むる人あり。此念佛は有漏の因にして、出生死の因に非ず。只一切を離るゝの念佛は、工夫長養に能く相應致し候。返々今生に於いて、生死を離れ玉はずんは、來生更に益有るべからず候。以上。

與或士

古より佛法に歸する者は、在家にても、三歸五戒を受くる法にて候。然れども奉公の身には、外には持ち難き事も可多候。內心に能く是れを持たるべし。其爲めに五戒の義、書付け進じ候。三歸とは佛、法、僧の三寶に歸依致す事也。五戒とは殺生、偸盜、邪婬、妄語、飲酒を愼む事にて候。

殺生戒と云ふは、一切の命ある者を殺さぬ戒也。さりながら武家は弓箭を業とする身なれば、出家の如くに持つ事は協ふべからず。唯科なき者を殺さず、無益の殺生を爲さゞる樣に愼み玉ふべき也。古の仁慈の帝は、罪人を殺すを見玉ひて、國に凶人あるは朕が科なりとて、大に是れを悲しみ玉ふと云へり。小家迄も下々治らずして、惡事出來する事は、大方主人の錯也。殊に一人なりとも、人を殺すと云ふは、大事にして小事に非ず。能く〳〵

吟味を作し玉ふべし。總じて生を殺す事は、甚しき惡事にて候也。歌に『わだつ海の深きに沉むいさりせでたもつかひある法を求めよ。』

偷盜戒と云ふは、盜をなさぬ戒也。人の物を盜まぬ人も或は人の目を眛し、後暗き事などを作すは盜に同じ。堅く慎むべき處也。況んや一針一草にても、主ある物を偷まんをや。歌に『浮草の一葉なりとも磯かくれ思ひな掛けぞ奥津白波。』

邪婬戒と云ふは、在家に限る戒也。男女共に互に夫妻の外に心有る事を戒め玉へり。總じて婬亂の事なき樣に慎み玉ふべき也。歌に『さなきたに重きがうへのさよ衣吾がつまならぬ妻な重ねそ。』

妄語戒と云ふは、僞を云はぬ戒也。是れ佛道には、信を要とする故也。總じて僞ある人は、君臣父子の道にも違ひ、天神地祇の命にも背く也。能く慎むべき者也。歌に『なき名ぞと人には云ひて有りぬべし心の問はゝいかゝ答へん。』

飲酒戒と云ふは、酒を飲まぬ戒也。さうながら世間に出交はる人は、出家の如く此戒を持つ事は成りがたき事も有るべし。其時には唯心の亂れぬ樣に、慎まるべき也。歌に『花の下露の情は程もあらじ醉ひなすゝめそ春の山風。』





常々此の如く慎み有るべき也。生を受けぬる者は、頓て死すると云ふ事を忘るべからず。殊に武士たる人は、生死を輕くしてこそ、君の御用にも立たるべけれ。又死の近き事を知り玉はゞ、何の望かあり、何の樂か有らんや。只菩提の道を要として、三途地獄を出離せらるべし。又心經大悲咒尊勝陀羅尼八句陀羅尼光明眞言等の短き經咒を御誦み候て、代々の先祖を始め、親類並に見聞きし程の人、三界の萬靈に至るまで、回向し玉ふべき者也。以上。

## 與或士

御息女死去の由承はり及び御心底察し入り候。然れども女人の若死は、成佛の因にて候間左樣に御心得有るべく候。三界無安、猶如火宅の文を以て推量り玉ふべし。人間の迷にて、生を樂み申す事人々の慣に候へども、何を認めて樂と申すべきや。昨日は今日を待ち、去年は今年を待ちて、年月は重り候へども、樂は無くして苦患は次第に多く積るに非ずや。殊に女人の心の中を、御さけすみ有るべし。萬般に付き、身心不自由にして、勝りて苦しむのみ也。かほど苦なる世界にながらへて、何の益有るや。早く生を去る事は、誠に苦を去るにて候はずや。加樣の理は、申すに不及候へ共、時に當り御身の上になりては、御迷ひ

〔原註〕若死成佛の語は、當人の恐の樣を慰んが爲め也。而も亦道理是の如し。

有るべきかと存じ候故、此の如く申し候、追々何れの人も、死し去て惡き事無之候。偏に菩提の功德、御授げ候樣に可被成候。以上。

又

九州筋僧俗共に、殊の外無道心に候ひしに、上輩の衆は、少々心入れ直に成り候樣に承はり候。寔に正理を明め行ずるば、大切の事に候間、其元の義、とても事に確と御用ひ候へかしと念願に候。何れも御油斷なき樣には、三五郎被申候。但し取沙汰許りに候や。實も出來申し候や。委く承はり度候。已上。

〔三郎九郎〕正三老人の俗弟、天草の代官となりし人なり。

與不三

先日飛脚參り候時分、何角と致し、狀にても不申候。三郎九郎相果て、我等年寄殘り候て、一入迷惑申し候。三郎九郎內方へも力付け可給候。一筋に後生願ひ候樣に勸め申さるべく候。人間の苦患皆以て如此に候間、大切の上の大切なる事は、生死一大事にて候と勸め玉はるべく候。已上。

又

此元に於いて、肥前衆上下共に、佛法歸依の人多く出來候て、何より以て滿足申し候。薩摩衆も同前に候。其外方々に信心の人、數多出來申し候。其元にても油斷有る間敷候。已上。



與或士

爰元にて、此比佛法の興り申すべき瑞相數多見候間、一々書付け越し申し候。一、十二三箇年以來、珠數屋隙なくなり申し候。一、在々處々より古佛を探し出し、再興致し候。一、京都大坂に於いて佛師數多出來、皆々隙無之候。もなくなり候と承はり候。一、跡形もなき古き堂などに、種々の靈驗ある由にて、群集致す所、方々に有之候。一、佛書の類、殊外賣れ申し候、此故に次第に古の法語等、乞ひ求め尋ね出して開板致し候。一、太神宮へ諸國より、童部とも夥く拔參り致し候、是れは天地に殊勝の氣發りて、則ち正直なる心に移りたる故かと存じ候。一、京中辻々の地藏祭、去年七月より童部とも見事に致し候。此五月にも盆を待兼ね候て、辻々にて祭を見事に致し候。此等の相を以て、占ひ申し候に、漸々に必ず佛法興り可申時節かと存し候。さりながら我々は命つまり候間、次の生にこそ、法に逢ひ候はんと存じ候。已上。

〔原註〕月心は師の俗弟也。

與月心

〔原註〕師綽常の少善根、少功德をも、是れを重と玉へり。故に又少惡、少不善の者を、除み玉ふ事也。曾て曰く、世人道理の間の功德計りを知りて、無道理の處に功德有る事を知らずと也。不思議の功德と云ふは、諸經、念佛等の妙德の類也。又天德院に於て、無緣の者を弔ふを見て曰く、江戸の寺にては、無緣の者を弔ふ事大なる功德也。依之覺えず、大難をも滅せんと也。此の如くの善を作すときんば、覺えず直に罪業災難を滅する德あり。然れ共歌はれざるときんは、諸人功德無しと思ふ也。

三郎九郎思立ち候て、去年より十王建立致し、脇立ともに、十三躰有之候。人々先祖の遺像に致す心得なる故、大方施主有之候。我等一族の分は、皆々造り申し候。道入老は不善根の人に候へば、先づ今生に於いても、子孫に至る迄、不吉に有るべきかと笑止に候間、今一二躰殘りたるを、二親の爲めに造らせ申度候。堂の義は、足助宮平(あすけみやひら)に立て申し候。さて朝夕二時に鐘を鳴して、佛事勤行を正敷し、人の心をも勸めん爲めに、每事如法に致し候。此處の鐘を撞き候へば、五千人程の耳に入り可申かと思ひ候。彼是以て隨分功德に可成樣に存じ候。扨て又天草の寺の事は、大なる善根を仰付けられ、誠に子々孫々に至る迄、勝れたる功德に預る事、難申盡義に候。以上。

## 與或士

御力落の段推察申し候。御迷惑は道理至極に候へども、何事も皆過去の債にて候間、左樣に御心得有るべきなり。總じて自ら作したる罪なき處へは、曾て惡事の來ると云ふ事は無之候。實に先き〳〵人に與へたる科なる事を、慥に知て後悔の心有る間敷候。而も萬人共に、命存へて居候ほど、苦患多く出來申し候。若き時相果て候人は、此世の苦を早く遁れ申すにて候。八萬四千の煩惱苦患は、存命に付きて有之候。早く生死の大苦を去て、安



〔原註〕早死成佛の義は、憂を奪ふの方便也。苦体の義、苦を去るの義、明に可知之。

樂になる人は、能き仕合にて候。然るに此人を嘆き候事は、大なる錯にて、却て死せる人の苦患となり申し候。此思分け尤もに候。死して苦を去るの理、能く〳〵分別可有候。後世を能く知ると申すは、此世は苦患の世なる事を慥に知て、死を痛まぬを後世者と申す也。三界無安、猶如火宅の文を能く〳〵見玉ふべし。速に火宅を遁れ候人は仕合に非すや。只今其方の胸中、如何樣に候や、なからへて能く候や、我が胸を以て子共も此の如くあるべしと知り玉ふべし。何れの人か安樂ならんや。早く隙を明け候人は、慥に成佛の人にて候。必ず御嘆き有る間敷候。已上。

## 與女人

成佛と申すは、自らの惡心を治めて、本心となすを申し候。扨て如何樣にして、此心を治めんとならば、堅固心を以て、油斷なく、己を責めて、己に勝つ修行を作すべし。心弱く候時は、妄心迷亂する者にて候。只々强き心を以て、日夜に心に心を付けて守るべし。更に心の外には、地獄、餓鬼、畜生無之候。以上。

## 聞書

一日若き士來て、修行の用心を問ふ。師示して曰く、鐵の弓に鐵の弦を掛けたるが如くに

〔原註〕修行の肝要、此にあり。總て僧侶男女の事業、皆此心を以て本と爲す。心身共になさけば、何事をも成ずべからず。

〔原註〕何れの人も逼る時は、此の如くなるべし。兼て恐之可動也。死苦を始め、萬事此の如く皆分別にて收めんと思ふ故に彌苦む也。無分別に切るゝ位の機を可用也。

〔原註〕忽令知不自由、直勝之機令得也。

心を張立て用ゐて、奉公を勤むべし。是れ即ち坐禪也。別に用心無しと也。

一日さる待來て、此比無常の意少し乘て、心合物哀になり候と云ふ。師呵して曰く、唯今鎚を取て、大敵に向はん者が、左樣の心を樂み居て、何の用に立たんや。只心を丈夫に用ゐしめされよと也。

さる處にて、夜中に或士を喚起して曰く、唯今大躬の鎚を胸に突掛けは如何と也。

一日さる士來て曰く、此間大病を受け死に臨み候に、何と致し候ても死し得ずして、命の惜き事甚だ切也。此の如くの時は、如何してか、心安く死する事を得候はんや。師示して曰く、切るゝ心なく、種々分別に渉て、何として死せば此苦を免れんや、角として死せば心安く死なれんや抔と思ふ故に、彌死なれざる也。只無分別に切るゝ心を用ふべしと也。

頁有て曰く、今度の切なりし事を忘れめさるゝな、復せまらん時にも、油斷めされば、此度に替るべからずと也。

一日さる人に向て曰く、我が法は、臆病佛法也。何とぞ自由に死にたさに修する也。少々の事にては、心安くは死なるべからずと也。頁有て、不圖高聲に曰く、唯今其方の胸を捕へて撞きすゑは、如何あらんやと也。



〔原註〕能此機可著眼、師法肝要在此。

〔原註〕此機受に、諸訛あり。或は其時は何事も思はれず、誠に無念無心なるべし抔とすます也。其義に非ず。堀底に在りし時の機を、直に受けて用ふる事也。其時節、爭か機を拔かして居られんや。無理に死を究め、齒咬を作して居る機也。平生此機を守る事也。是れを守死心とも、捨身の機とも云ふ也。

或る人語て曰く、師此前、今頸を切て行くとも、何とも思はじと、一日の中に四五度も獨言を仰せ有りしと也。

一日或る士に示して曰く、途をあらく時にも、心を丈夫に用ゐて、譬へば思ひがけも無き所より、鎚など不圖鼻の先に突掛けたりとも、びつくともせぬ樣に用ふべし。總じて武士は、平生此の如くの機を用ふる筈なり。

一日佐和山衆來り、修行の用心を問ふ。師示して曰く、其方先年大坂にて、塀に附き居たる時の機也。常に其心を可用と也。

一日了心庵に於いて、越州の人來り、國元に歸り候へば、親祖父とも無道心者にて、佛法好き仕る事を大に制し申し候故に、自ら油斷に罷りなると云ふ。師聞きて曰く、是れ貴き事也。必す此教化を忘れめさるゝな。若し忘れめされば機違に成りめさるべし。其故は此前より、儒道者の佛法を聞きたる者に、終に一人も直に成りたる者なし。腹の黑き親とも、多く是れを見來る故に、各も亦此の如くならん事を恐れて制する也。尤もの義に非ずや。然る間國元に於いて、佛法だてする僧達に化されめさるゝな。唯武勇の用に立つ樣に、心を丈夫に用ゐて、自己の餓鬼畜生心を、修し拔きめされよと也。

〔原註〕是れづゝきれてすわりたる心也。働は時に可隨也。

一日さる女人來て、浮心張合の機の位を問ふ。師答へて曰く、疣の皮切を忍ゆる心也。夜話の次で、衆中に向て曰く、今忽ち機違あつて、不圖切付けば如何せんや。一人曰く、飛込んで捕ふべき也。師聞きて曰く、吾は左に非ず、是非に及ばぬ迄よと也。

一日さる士に示して曰く、途をありく時にも、機を正しく用ゐて、一足一足にしかくと、心を蹈付けくしてありくべしと也。

一日さる兵言宗の法印、佛法を持ち來て、種々の理を問ふ。師聞きて曰く、用に立たぬ事を云はんよりも、唯死ぬ事を仕習ひめされよ。彼が曰く、死ぬ事などは、何とも不存也。師氣色替りて、只今打殺さんずが、何ともなく死しめされんずかと、大に呵し玉へば、彼の僧是に於て忽ち非を知ると也。

一日さる僧、鯨波坐禪の機を受けたりと云ふ。師聞きて曰く、それは居りたる機なりや。彼れ高聲に曰く、唯しころを傾け、わつと云ふて懸かる機也。師曰く、それは抜脱也。

一日鯨波坐禪の沙汰有りける因に、或る武邊の士云く、今存じ候へは、大坂の戰場に有りし時抓が、能き坐禪にて候也。師聞きて曰く、何と貴方は、其時の心を今に用ふるや。彼の士曰く、今は存じも出たさず。師曰く、偖も惡い御侍哉。吾は其時の機を今に抜かさず用ふると也。



さる家の小姓來り、修行の用心を問ふ。師示して曰く、心をはつしと用ゐて、機の抜けざる樣に仕習ふべし。常に此の如くせば、事に臨みたる時、心すわりて向ふの樣子、明に見ゆべしと也。

夜話に曰く、昔さる者胴骨をためさんが爲めに、物すごき處の墓原へ行きければ、塚の中より手を出だして、帶をむずと捕ふ。此男少しも驚かず、意趣を聞きて、幽靈の本望を達せしと也。我若き時、此物語を聞きて、我も加樣の事に逢ひたりとも、何とも有る間敷と思ひける也。然れども實に死する事は、又難く思はれたりとなり。

夜話の次で、秀可長老の曰く、此前夜中他所より歸りければ、腰より下、血に成りたる若き女人出向ひ、獄中に入りて、苦を受くる時如何と問ふ。某答へて曰く、出圓通、入圓通、何處有獄中。靈曰く、莫論獄中、見此躰。某曰く、其躰即佛性。靈曰く、吾が爲めに名を附け給へ。某、本空禪定尼と付け了りて絶入致す也。此答話何と惡く候や。師聞きて曰く、答話の善惡は置きて、絶入したる云分け召されよと也。

一日無智の遁世者、來て曰く、某蒙昧にして、何の勤も罷成不申候。唯一口にて成佛いた

す義あらば、授け玉へ。師聞きて曰く、中々一口にて成佛する事あり、授くべし。只我を忘れて念佛申すべし。我をさへ忘れば、成佛也。

一日衆に語て曰く、各は何より發心召されたるや。兎角緣あるもの也。我は謠を好きて謳ひけるが、定家の謠に、古ことも今の身も夢も現も幻も、共に無常の世と成りてと云ふ所が、不圖のりてより、思ひ付きたりと也。又曰く、十八九の比、曉起してちよつと青霄を見る因に、青天は平等にして、彼我の隔なきが、我々は何とて彼我の情を生ずるぞと、疑ひ起りてより思付きたりと也。

一日さる處にて、七十に餘る人始めて後生の願ひ樣を問ふ。師示して曰く七十に成りては、最早修行も坐禪もならぬ也。さりながら爰に一つ願ひ樣あり。是れを可用。十二時中念佛の中に飛込み召されよと也。

一日諸僧に向て曰く、只今化者出では、如何治めんや。衆擬議す。師曰く、我此前は莫忘想と云はんずと思ひけるが、今は云ひ樣替はれり、あつかべい、とつくに我化けたりと云はんずと也。眞有て曰く、唯正三が化けるがてわくをじやると也。

或る時一僧師に謂て曰く、さる儒者、佛法は來世を願ふ故に其理遠し。我が儒は今世の道



を守ると云ふに對して、佛法と云ふも、今日の心を能く用ふる事也。其心則ち來世に到る也と挨拶致す也。何と此語惡く候や。師聞きて曰く、此の如く云ひたりとも、最早受くべからず。其方その云分けしたる分が損也。それよりは只其方は儒法好、我は佛法好也と云て、念佛申したるが增し也。

一日さる人來て、咄の次でに、此比我等家中にて、常々諸人の善人なりと申したる者、死去仕り候が、火葬の時に、少しも臭氣無之候と云ふ。師聞きて曰く、然るべし。行者抔も強く行を作したる者は、臭き事有るべからず。殊に能く身を修し、心を修したる人の火葬などは、曾て臭き事有るべからず。偖後世願ひ抔を燒く時臭きは、でかうまだしひと思ひめされよ。我も最早臭き程にはあらじと也。

一日或る人の死したるを聞きて曰く、偖も隙あけ哉。先づ娑婆の隙を明けられたり。總じて死して死損無く、生きて生損多きもの也。

一日さる士來り、問ふて曰く、死して後何と成り玉はんや。師答へて曰く、此界は欠缺と云ふて、苦の世界なる間、何とぞして二度出ぬ樣にと修する也。

一日或る家の家老職の人來るに、示して曰く、古今共に利根才覺の者、又諸藝に達する者

〔原註〕此意百萬事、賊無餘處、作云分者、世多也。

は多きが、唯心の公けにして、老なしき者希れ也。能く此に眼を可着也。

一日若き侍來て、面を俛れて居ければ、師見て曰く、面を俛れて居るは、分別の相也。顔をあげ、胴骨をすゑて、居習ひ召されよと也。

一日神田にて、鈴木某の小娘兩人、出て師の前に居す。之を見て曰く、偖々不便千萬なる事哉。如何なる苦をか受けんず、人間の一生程、たはけたるものなし。一人女人は不便也。夫を持ち子を持ち、萬事不自由にして、其心に苦斷ねざる也。頁有て曰く、我等は最早難處を越えて、今少しに成りたりと也。

一日六十に餘る遁世者に向て曰く、最早死期近し、油斷して耻かきめさるゝなと也。

一日さる僧に示して曰く、齋を喰ひ施物を受くる事、九寸五分を以て、胸元を突き通さるゝ樣に思ひめされよ。扨も〳〵大事の事也。愚に思ひめさるゝなと也。

一日曰く、何某は眞實之有りといへども、修行のすべ相違ふ間、用に立つべからず。時に一僧問ふ、相違の趣如何。師曰く、あれほど婆婆が大事にては、何の用に立たんや。我が爰に出でゝ居る迄、是れを苦しむと見えたり。總じて彼は他の非を病む處强しと也。

一時本秀和尚、三州香積寺に住持の時、性氣疲れて大に病み玉ふ事あり。師彼處に見廻はり玉ふ度毎に、曰く、唯死なんずと思ひめされよと也。本秀之を受け、死切て養性し、終に本復し玉ふと也。

一日或る士來るに語て曰く、國を治むる事は、賞罰正しき所にあり。然るに多くは其惡人を糺して、是れを罰する計りにて、善人を尋ね出し賞を與ふるの事希れ也。先づ第一に善人を賞し玉ふべき事如法なるべし。上に善人を愛し玉はゞ、下自ら善に歸すべしと也。

一日諸僧に向て曰く、今人の身の中にて何者が第一臆病なりや。一僧曰く、心第一臆病也。師曰く、耳第一臆病也。其故は何くにてそ、化者幽靈出る抔と聞けば、はやすこき心出づる也。

一日僧に問ふて曰く、今人間の心に持ちたる物の中にては、何れか寶なりや。一僧曰く、智惠寶也。或は曰く、慈悲寶也。或は曰く、菩提心寶也。師聞きて曰く、是等皆寶也といへども、唯今各の心に持ちたる物に非す。只今凡夫心に持ちたる處の僉義也。今諸人持ちたる處の中にては、愧を知るが寶也。人愧を知らずんば、何ともすべき樣有るべからずと也。

一日さる家中衆來るに向て曰く、唯今主人より我が嫌ひの佛法を、何の故に聞くぞと御尋

ねあらば、如何に云分けめされんや。一人曰く、專ら武勇を勤めて一命を主君に抛つ義に候と申すべき也。師曰く、佛法を聞かずとも武士たる者、誰か是れを爲さゞらんや、何ぞ死事を僧に習はんやと難せらるべし。我曰はゞ何とぞして御恩を存じたさに、佛法に歸依仕ると云ふべし。其道理は如何と仰せあらば、其時に於いて德用等の法語を指出たして、此の如くの次第にて候と云はんずと也。

〔德用〕とは正三老人の垂示萬民德用と題する書をいふ。

一日或る人來り、最早修行に赴きて、四五年も過き候へども、曾て性にしまずと云ふ。師聞きて曰く、扨も聞き事哉。左樣に輙く性にしむものと思ふや。我も七十年修すれども、未だ性にしまず、只無理に齒咬みを作して修する迄也。其方も病者なる間、藥をも用ひ、能く養生を作して久敷修すべし。長生せねばならぬぞと也。

一日さる士來り、勇猛心起りたりと云て、勇みに勇んで心相を語る。師見て云く、ちと靜まりめされよと也。彼の人高辭に成て、此機也々々と云ふ。師聞きいれず、柱に打掛かり居て睡眠し玉ふ。彼の人暫く有りて心靜まり、機落付きて合點仕り候と云ふ。師晩に至て、衆に語て曰く、何某は慥に機起りたる也。さりながら彼が如く機盛に成り來る時には、其者と論ずべからず。たゞ張合ふて居れば、頓て其機くたびれて非を知るもの也。





一日ある僧、某は死を何とも思はずと云ふ。師聞きて曰く、それでも我は秘藏なるべしと也。

先年三州にて、法友の長老何某、佛道修行を作す事、大なる曲事也と云て、本寺より是れを擯罰す。時に師同道にて、訴訟の爲めに、江府に下向し玉ふ折節、親族何某、師に謂て曰く、遁世者の世間へ出て、加樣の事を執持ち玉ふ事、僻事に非ずや。長老も此次でに、寺位を捨て、道心者に成り玉ふべしと有りければ、師曰く、我此長老と法友にて、常に兄弟の如くす。此時節何ぞ遁世者也とて、身を引かんや。我早く覺悟を窮めて下だる也。今政道無くば、加樣の難義に逢ふ輩は、世々生々に於いて、本望を遂ぐるより外有るべからず。然るに御政道正しき故に、今生にて忽ち埒あきて、鬱憤を遂げん事、誠に忝き御恩に非ずや。若し長老の訴訟協はずして、正理を持ちなから裁許に負けて、遠島めされば、我其時に於いて、彼の長老の法友某と申す者にて候と云て、罷出で一訴訟致し候て、磔に懸かるべき也。然らは其方達も、正三が親類に成りたる不祥に串指に逢ひめされよと也。

〔原註〕後長老出公儀、終伏本寺也。

師此前三州山中村に居し玉ふ時、村隣やなみの名主の下女來て、我等賴みし人、夫婦とも慳貪邪見にして、明暮打擲に逢ひ、迷惑仕り候也。最早今生は取はづれ候間、何とぞ來

世を御助け願み奉ると云ふ。師聞きて、扨も其方は有難き女人也。必ず成佛すべしとて、則ち禮拜を作し玉ふ。彼の女驚きて其故を問ふ。師曰く、汝は過去惡人にて有し故、頓て惡道に墮して、永く大苦患を受くべき身なれども、佛菩薩の慈悲に因て、今生にて其惡を盡して、來世必ず成佛すべき因緣あり、汝が主人は、二人ともに佛菩薩の假現也。向後必ず呵責するを恨み嗔る事無く、彌悅びて業障を盡すべしと示し玉へば、彼の女ひしと肯ひ、其後は打たるゝを還て悅び、能く奉公を作しける程に、夫婦の者も、大に非を知り、終には善人と成りけると也。

一日若き僧の曰く、今若き中に情を出さずんは、修行成すべからずと存じ候と云ふ。師聞きて曰く、然り、さりながら四十に成らざれば、修行定まりかたし。世間の分別も四十に及ばざれば、定まらぬ物ぞと也。

師若き時、傍輩の士來て曰く、佛神と曰ふは、無き事也。罰も利生も、皆たわごと也。我只今にも社壇に糞尿を作すべきが何の罰も當るべからずと云ふ。師聞きて曰く、佛神無に非ず、此の如くの無作法を作さば、忽ち罰を蒙むるべき也。彼曰く、先日も當地宮の社壇に糞尿を作しけれども、何の罰も當らず。師曰く、其に增したる罰有らんや。誠を以て佛陀



神明を貴ひ、上を敬ひ、下を憐み、忠を盡し孝を勤む、仁義禮智正しきを以て、眞の武士とす。畜生こそ佛神を知らずして、神前佛前にも、猥に糞尿をなすもの也。其方が働き畜生に同し、是れ大なる罰に非ずやと有りければ、彼の人大に非を知て、心を醮しきと也。

一日草分義の段を講し玉ふ次でに曰く、何と古人にも、吾が如く、義を專に敎へたる人有りやと也。

一日さる僧曰く、何某は今生にて、心を修すると云ふ事は、大に肯ひて隨分精出だし候へども、後世を無き事と思ひ候間、用に立たず。師聞きて曰く、是れ惡きにあらず。今生さへ能く勤むれば、今世も後世も、無に成るほとに苦しからず。皆人後世をば大事に思へとも、唯今の心を修せざるゆゑに、却て用に立たずと也。

一日或る僧、徒然草を讀みて、其物に付いて、其物を費し損ふ物、家に鼠あり、身に虱ありと云ふに至る。師聞きて曰く、身に虱あるよりも身に病あるが增し也。

師一時さる處に居し玉ふ折節、罪人たりと云ふて、女一人、馬に乘せて、其屋の前を引通す。師之を見、つゝと出でゝ、奉行の人に斷りて暫し馬を止め、彼の罪人に示して曰く、汝過去

〔原註〕無に成ると云ふは、至り段る處の大都也。すきと離れずと云ふとも、修行の長はと、無に成るべき道理也。外に後世を願はず、直に只今の心に眼を付けて、修する所肝要也。

〔原註〕貧樂と云ふは、早や貧苦に負くる機あり。貧苦に勝て、負けざれは、其心大福長者也。此意を得せしめん爲め也。

〔原註〕師一切の事に於いて、此の如く自然と、機付きて感し玉ふ事深し。故に常に衆を呵して曰く、途橋を過るにも、機を拔かし、うつかとして過ぐるらんと也。

の因果に依て、此の如くの罪に逢ふ。今既に因果すきと返しおはれり。是れより心を改め、一念に念佛申して終るべし。後世必ず成佛すべしと有りければ、彼の女大に肯ひて念佛す。是れより彌よ正念に住し、念佛のみにして、最後能く終りけると也。

一日大に機へりたる僧、來て法要を問ふ。師之を見て曰く、其方に何を授けたりとも、今の機にては、用ゐらるべからず。唯其方は、先づ立て跳て、機を調べめされよと也。

或る人世に落ちぶれたるが、來て咄の次でに、我貧樂にして、心安しと曰ふ。師聞きて曰く、貧樂は惡し、福樂が能くおぢやると也。

師一日語て曰く、諸人、大井河に橋を掛けたがる計りにて、岡崎の橋を御恩とも思はずして通る者ばかりと也。

一日食事の次で、さる士に示して曰く、百姓の苦勞するを見めされよ。一粒の米に、百年の功あたると云へり。うつかと喰ひめさるゝな。奉公しめされても、此替り程は、得勤めされまじと也。

一日さる所にて濃茶の次でに、示して曰く、此前宇治にて是れを拵らゆるを見けるが、中々諸人大に功を盡す事也。道心者などの呑む物にはあらずと也。





一日寸紙の落ち散りけるを採聚め玉ひ、次でに曰く、始め楮を採るより、幾許の人の手に渡りて後に紙と成る也。寸紙をも疎にすべからずと也。

或る大身の人、世に落ちぶれて、小身の躰に成りたるに示して曰く、其方に二の病あり。先づ右の大身を、大にせおふて居めさるゝ位あり。是れ大なる苦み也。又利根智、人に勝れたり。この二つ大病也。能く此に眼を着けめさるべし。さりなから機に造作無き處あり、是一つの取柄也。是れより入りめされよと也。

一日ある士に向て曰く、其方抔の境界は、辻堂に同じき故に、何を云ても用に立たず。彼の人其故を問ふ。師曰く、辻堂と云ふものは、主無きか故に、種々のもの入り來る也。其方抔も、一日拔脫に成りて居めさるゝ故に、無量の事とも入り來るにあらずや。しつかとして、主を置きめされよと也。

一日さる處にて、或る者山椒の袋に、ふじなみ三郎と書き候へは、風ひかずと云ふ。師聞きて曰く、能き詛を聞きたり、我も袋に書くべしと也。時に一人問ふ、藤波三郎と書き候へば、何としてか風ひかざるや。師曰く、詮なき事を疑ふ人哉、詛ならば、先づ書きて見たるが能き也。益あれは調法也。益なくんば、其時無用にする迄也。其方黃檗は苦く、蓼

は辛きを、如何樣の理にて、黄檗は苦く、蓼は辛きと知るや。花にも赤きあり、白きあり、此理をも亦能く知り得るや。此の如く物に不審せば、何事か一つも埒あかんや。唯黄檗は苦き物、蓼は辛き物と迄知て、用ゆるか能きと也。

一日さる人來り、咄の次でに曰く、某は元より身に垢なく、臭氣少しも無しと云ふ。師聞きて曰く、偖々業輕き人哉と也。後に一僧、師に問ふ、先程の者は、實に業輕き者なりや。師曰く、餘の業は又深き事も有るべし。先づ垢の業は輕き也。

一日さる者來て曰く、或る浪人の後室、綿の貯を以て、生命を送りけるが、今金子少分に成りける時、思切て自害して果てたりと。師聞きて曰く、偖々強き者哉、我はならぬぞと也。後に一僧、師に問ふ、是れ生死自由の人なりや。師曰く、自由の人と云ふにはあらず、能くは思切たるにあらずや。其方抔は、釋迦達磨の樣に生死に離れざれば讃めず、其人〳〵の位により、事に依て、賛する事を知らずと也。

一日人來て曰く、此比さる者死後に葬送の儀式を麁相に致しければ、流轉して樣々其事を告ぐるに依て、又幡天蓋等を結搆に拵へて送りければ、其靈收まりたり。然るときんば天蓋等に大に功德ありと見えたり。是れ無くして送りたる者は、皆地獄に墮せんや。師答へて曰く、此者は始めに是等を望む心ありけれども、叶はざる故に流轉す。後に其望合ふが故に、其念收まる也。總て天蓋等に依て念收まるとは云ふべからずと也。

一日示して曰く、人は命ぶけんにて居るもの也。譬へば錢ならば、百の錢十三十使ひたらば、減りたると思ひて、惜き心あるべし。然るに命は時々に減りゆけども、氣つかずして、是れを惜む人無く、澤山に思ひ居るに非ずやと也。

一日石平山にて、法式を行ひ玉ふ時節、江戸の親類中より、法式に付きて、異見の狀到來す。師是れを披見して、今我に異見を云ふ人無し。眞切に有らざれば、異見は言はざるもの也とて、此狀を本尊の脇に置き、數日拜し玉ふと也。

一日語て曰く、謎の本に、成佛とかけて、くさりと解き、地獄と掛けて、くまでと解くとあり。是れ淺き事也といへども、其理當れり。今時の學者、成佛地獄の理を、是れ程にも心得たる人稀れなりと也。

師一日或る處に於いて、威儀正しく坐し玉ふ。亭主之を見て曰く、僧人と成り玉ひては、誰をか詔ひ玉はんや、隨意に坐し玉へと也。師聞きて曰く、世捨人とは、無作法者を云ふ

〔原註〕師の人を讃め玉ふ處如是、以一槩其論。

〔原註〕今時成佛地獄を、餘所にのみ心得て、只今の苦を知る者なし。故に此語あり。又曰く、後生浮ぶと云ふ事も、只今の機にあり、全く今日の機を離れて、後世の道理なし。今能く浮ぶ心を用ゐて、一切の苦みに勝つべしと也。

と思召か。左様の義に非らず。僧は佛祖の正法を修し、其威儀を守るが故に、隨處因義坐臥經行すると也。

一日語て曰く、今時の人の曰く、科人を成敗するは罪にあらず。故に人を斬るにあらず、只咎を斬る也。或は曰く、我は殺さず、咎が殺す也と。此等は是れ出來口と曰ふもの也、更に正理にあらず。若し殺さずして叶はざる者有るときんば、不便千萬なれども、法度の爲めなれば、助ける事成りかたし、是非に及ばずと、慈悲心を以て殺すべき也。

一日機の沈みたる人に向て曰く、何をぞして、途なと精を出して行く時の機なりとも、用ねて見らるべし。又腹立ちたる時の機なりとも、用ねて見めされよと也。

師行脚の時、或里にて宿を借り玉ふに與へず。さらば樹下に宿すべしとて、山つきに立寄り玉へば、幸に主なき草堂あり。師見玉ひて、是れ天の與ふる處也。今宵爰に宿する因緣こそ有りつらんとて、あたりを見廻はし玉ふに、其境勝れて清淨也。折しも天清く晴れて月特に朗也。師從者の僧に謂て曰く、さても此處に宿する事、不思議也、天明に地潔し、寔に此清氣を受けぬと云ふ事あらんや。今宵は一生の修行の本懷を遂げんと思ふ程の機起れりと也。序に示して曰く、其方抔は、平生惡念に司られて居る間、清氣移るべからず。

〔原註〕鬼角機の治まる位、與立てる位を知らざれは、用に立たざる也。此に强く眼を著くべき也。



善を見ても惡く移るべし。吾は早惡心を修し抜きし故、怨に逢ふても還て慈悲の心出來、萬境に對して、善心の生ずる迄なり。其方抔も一心堅固に用ねて、自已の諸惡を修し抜き外の清氣を受くべし。朝にも疾く起きて、天の清氣を受け習ふべしと也。

此前三州にて、圓齋と云ふ浪人の內方、久しき望みにて、石平山に來て後世の義を問ふ。師彼がけはひて、色好き衣裝を重ね著たるを見て曰く、後世の望みにて、我に逢ひ玉はんには、大に相違したる樣子也。殊に歳半に過ぎたる人の、其假粧は何の爲めぞや。其相は若き時、人を化さん爲めに作す所也。今日は曾て用無き事也。總して女人の寺參抔の時、色好き衣裝を著る事、甚だ道理に背けり。但し僧を化さん爲めならんやと、大に呵し玉へば、彼の女人忽ちに肯ひて誠に道理暗く候故に錯り申す也。向後は心を付けて、身心を改め申すべしと云へるが。其後は寺參のみにあらず、親類中の出合にも、色無き衣裝を着せりと也。而も又常に若き女人等を諫めて曰く、男子は公界をもする者なれは、好き衣裝を着るも理あり、女人の出合は、如何にも隔心無き親類中の者計りにして、外の人には深く藏るゝ身なれば、誰が爲めにか是れを飾らんや。然るに陰に在りながら、美き衣裝を好む事、大に道理に背きて、我と苦を設くるにあらずやと云へるとなり。

〔原註〕此段諸人の鏡也。物ごと惡しく胸に移り、人の惡のみを取る事は、偏に自已の惡念多き故也。是に於いて慚愧の心を生じ、自らの惡心を責め抜くべき者也。

一日少年の女性、父母と共に來て法要を問ふ。師示して曰く、能く〳〵思ひ知るべし、元來女人は、性暗きが故に、先づ嗔り強く、貪り深く、愚痴甚しき也。此故にあたはざる世樂を願ひて、却て苦む事多し。又疑ひの心多くして、人の心を邪推し、人の思はぬ事を思ひ、曾て我が非を知らざる也。故に他人親類に付きても恨深し。親ひべき夫婦の中にも、我慢を起して胸をやき、今生晝夜苦みて、後生永く地獄に墮する也。是に依て女は罪深しと佛說き玉へり。然る間今日より大願を發して、思ひ定むべき義あり、後來他の家に至らん時、何樣の無理に逢ふとも、已に勝ち得て、苦む間敷と思ひ定むべし。第一は吾非を知て、人に隨はん事を守るべしと念比に示し玉へば、彼の少女大に肯ひて、則ち父母に向て曰く、示しを承はるに女人の苦む處は、元の心得一つ惡き故也。皆他家に行く時、此身を樂まんと思ひて行く故に苦む也。始めより奉公に行くとだに思はゞ、苦み有るべからず。萬人の機に契ふ事こそ成りがたきなれ、何ぞ一二人の機に應ずる事を作し得ざらんや。能く他家の機に合て、父母の心を安ずる處、是れわが役義也。此外に我に役無しと云ひけるが、果して他の家に嫁するの後、夫並に姑の機に契ひて、大に馳走せられしと也。

一日或る僧來り、道心の義を問ふ。示して曰く、道心と云ふは、生死を離るべき一念を強く起し、縱ひ無間の底に入りても、此念を失はずして、生々世々に於いて、終に生死を出でんと強く守るを云ふ也。

（原註　女人のみならず、僧俗貴賤共に斯の如くの萬人に嫌はれて苦むも、亦萬人に馳走せられて苦み無きも、只心向け一つに因る也。而も今世のみならず、永く後世の苦樂に至る迄、心一つの所爲也。能く眼を可著也。）

一日人來り、菩提心の義を問ふ。示して曰く、菩提心と云ふは、眼に見、耳に聞き、心に思ふ事、皆虛にして、更に實体無しと思ひ定むるを云ふ也。

一日人來て、成佛の義を問ふ。師示して曰く、成佛と云て別の物に成るに非ず。如來の法藥を用ひ、煩惱心を修し拔きて、本の心の病無き時に至るを云ふ也。佛の心と衆生の心と、更に替りある事なし。唯煩惱の病のあると無きと也。

師一日さる所へ至り玉ふ折節、その處に侍多く寄會ひ玉ふに依て、亭主曰く、能き所へ來り玉へり。皆々の爲めに成る義を、一句示し玉へ。師聞きて曰く、何れもは歷々の人間にて候間、只畜生にならぬ樣にし玉へと也。

一日さる女人、子息の二十許にて、病死せるを嘆きけるが、涙を止めて曰く、此子生れし時親類ども聚りて悅びあへるを見玉ひて、目出度がるは好いが、頓て悲みとならんずが笑止なよと道人の仰せありし事、今行當りて是れを知ると也。

一日示して曰く、前世の罪業、我が心と成て、日夜我を責むる事を能く知るべし。或は嗔

（原註）分別にて滿し居るを云へるには非ず。此の如く思ひ定めて、終に徹せん事を要とするを云へる也。

恚と成て責むる時もあり、愚痴と成て責むる時もあり、貪欲と成り、色欲と成り、我慢執着と成て責むる時もあり、此に眼を付けて能く是れに勝つべき也。

師遷化の日より五六日前に、馬場某來れり。師之を聞きて曰く、最早人に逢ふ事用無けれども、是れは執權中へも物事自由に云ふ人也。娑婆の暇請に逢はんずとて對面して曰く、内々申す所の佛法世法一枚の道理、能く聞き分け玉ふや。四民に書き置く通也。能く〳〵得心候て、予が念願御達し賴み申す也。此れ一つ申さん爲めに、御目に懸かると也。師病中、曉でとに大息をついで曰く、佛法世法一枚の道理、終に公儀へ申し達せずして打腐る事哉。今に成りては、其緣有りと云ふとも、躰既に用に立たず。一日生れは、一日の苦みなる間、少しなりとも早く死したるが増し也。最早今度は、佛祖の恩を報ずる事を得ず。頓て出でんず出でんずと云ふて、牙齒を咬み玉へり。誠に遷化の日に至る迄、偏に此事のみにして更に無他事。

反古集終



# 驢鞍橋

## 解題

驢鞍橋は、鈴木正三老人が晩年に江戸にいでゝ道俗を接引せられし語を、門人惠中つねにその傍に侍して、聞くにつけ見るに隨ひて書いつけたるものなり。老人が人の爲めに釘を抜き楔を奪ふの手段を見るもの、實にこの書より善きはなく、參玄の徒には、こよなき珍なるべし。

この書、久しく絶板して、坊間にも見ることまれなり。今本書を收むるに當りて、渡邊南隱禪師藏に係る萬治三年孟春開雕の舊本、および大内青巒居士の藏する古寫本によりて校訂を加へたれば、訛謬なきにちかゝらむか。

# 驢鞍橋 卷上

惠中記

正三老人行脚の後、三州石平山に居して生を利すること年久し。末後に慶安元年戊子の夏、關東江城に到て諸人を接引す。予胡亂に其語を認めて阿爺の下領と成す者也。

○一、師一日示して曰く、近年佛法に勇猛堅固の大威勢有ると云ふことを唱へ失へり。只柔和に成り、殊勝に成り、無欲に成り、人能くはなれども、怨靈と成る樣の機を修し出す人無し。何れも勇猛心を修し出し、佛法の怨靈と成るべしと也。

○二、一日示して曰く、佛道修行は、佛像を手本にして修すべし。佛像と云ふは、初心の人、如來像に眼を著けて如來坐禪は及ぶべからす、只二王不動の像等に眼を著けて二王坐禪を作すへし。先づ二王は佛法の入口、不動は佛の始めと覺えたり。然れはこそ二王は門に立ち、不動は十三佛の始めに在ます。彼の機を受けすんば煩惱に負くべし。只一頭に强き心を用ゆるの外なし。然るに今時佛法廢れ果て、すべ惡く成りて、活きた機を用ゆる者

なし。皆死漢計り也。佛道には活漢とて活きた機を用ゆることを是れを知らず、殊勝になり、柔和になり、沈入りて佛法と思へり。或は悟りたる抔とさもなきことを鼻に上げ狂ひあり く者多し。只我は殊勝けなことをも、悟りけなことをも知らず、十二時中浮心を以て萬事に勝つ事計り用ゆる也。何れも二王不動の堅固の機を受修し行して、惡業煩惱を滅すべしと自ら眼をすゑ、拳を握り齒ぎしりして曰く、きつと張懸けて守る時、何にても面を出す者なし。始終此勇猛の機一つを以て、修行は成就する也。別に入ること無し。何たる行業もぬけがらに成りてせば、用に立つべからず。強く眼を著けて禪定の機を修し出すべしと也。

○三、一日示して曰く、佛道修行と云ふは、二王不動の大堅固の機を受けて、修すること一つ也。此機を以て身心を責滅すより外、別に佛法を知らず。若し我法に入らんと思ふ人は、機をひつ立、眼をすゑ、二王不動惡魔降伏の形像の機を受け、二王心を守て惡業煩惱を滅すべし。古來より此佛像の沙汰したる人聞ねども、如何にしても我胸に相應して用ゐて、萬事に自由也。佛は勇猛精進と諸經に多く說き給ふと見えたり。此機を受けずして煩惱に勝つと不可有。第一に佛像の機を受くると云ふことを能く可知。無稍にして此機移るべからず、專ら佛像に眼を著けて二六時中金剛心を守るべしと也。

○四、慶安二の春、洞家の僧來り法要を問ふ。師示して曰く、佛道修行と云ふは自己を守ること也。曹洞宗に老僧も小僧も云ふ事也。自己を取放ちたりと、是れ好き詞也。是れに仍て自己を忘るべからずと云ふ事を、草分の中に書く。此段を能く見るべし。修行の肝要は、自己を守る一つ也。一切の煩惱は機の拔けたる處より起る也。只強く眼を着けて、十二時中萬事の上に機を拔かさず。急度張懸けて守り、六賊煩惱を退治すべし。夢中とも拔けぬ程に守らで叶はず。隨分守ると思ふてゝ覺えずぬけて、彼の煩惱に負くへし。ともすれば意馬妄想の鞍にかけ入り、心猿名利の梢にひよつ〳〵と移るべし。強く眼を着け、莫妄想の一句を轡づらと成して、急度引詰めて守るべし。刹那も機を拔かすへからずと也。

○五、一日右の僧に示して曰く、我も悟りなどと云ふ事を知らず。其方達も左樣の事を求めずとも、人間に生を得、出家と成りたる功德に、なにとぞして餓鬼道を免かるへし。殊に今時の出家は、餓鬼心深き也。先づ小僧より智者の名を貪り、人に勝たん事を思ふ智欲餓鬼有り、其後江湖頭餓鬼、轉衣餓鬼、寺餓鬼、法幢餓鬼、隱居餓鬼、此念を本として所有餓鬼心を造り出し、片時も安き事なく、一生空く餓鬼の苦に責められ、未來永劫此念に

（草分）こは正三老人の物せられたる遺之草分なり。

引かれて、三惡道に墮すべき類ひばかり也。必ず用心して餓鬼道を免かれめされよ。又人に娑婆を授けらるゝ事莫かれ。或は汝を長老になさんとも云ひ、又は能き徧參僧也、學文を休するは惜しき事抔と云ひ、兎角其方身上を持たせん抔と云ふは、皆娑婆を授くる人也。今時娑婆を奪ふ人一人も無し、皆名利を授くる人計り也。能々用心して娑婆を授けらるゝ事莫かれと也。

○六、一日或僧に示して曰く、出家は古則を守り習ふが好き也。趙州の無を見るべし。機を強く用ひ、十二時中一切の上に於て、無々々々と守り、夢中ともに拔けぬ程にすべし。就中死を守るは失なしと也。

○七、一日示して曰く、初心行者はいかにもして眞實起る樣にすべし。眞實起らざる先きに無理行抔し、強く坐禪抔すべからす。無理に根機を出し荒行抔すれは、性疲れ機へりて、何の用にも立たす、只在て果す也。何れも覺え有るへし氣相惡き時は、常よりも心惡く成る物也。修行と云ふは機を養ひ立つる事也、故に古人も長養といへり。必ず機をへらすへからす。今時無理行をなし、亦ぬけから坐禪をなして、機へりて病者と成り、氣違と成る者數を知らす。只志を進め眞實を起すへしと也。





○八、一日示して曰く、修行と云ふはなるほと強き心を用ふる事也。六賊とて六處にて本心を盜む者有り、此賊は我心の弱き處より起る也。然る間機を強く用ゐて、已が心を睨付けて守るへし。皆聞きそこのうて無常と云はれて、はへ土をかき、無念と云はれてあつかり坊に用ゆる也。大なる錯也。なるほと強き心を守るべしと也。

○九、夜話に曰く、我佛法興隆の御政道、御公儀へ諂へ奉り度思へとも、未だ天道に不許、先つ先祖先達血の涙を流し、修し行し殘し置かれたる處の佛法、御下知なき故に廢れ果り、是れを御捨てなされ、御外護に預からさる事、我等の迷惑是れにすぎす。兎角御下知無くては佛法正理なるべからす。偏に佛法正理なるやうに御下知仰き奉ると、指出〳〵御訴訟申上度事大願也。又曰く、哀れ御意を以て佛法をなほさは、只一口にて手もなくなほすべし。此前より是れを思ふに、自由に云はれさりしが、今はよくのみこんで居る間、天下の佛法を只一言で忽ちなほすべし。時に僧問、如何樣なる一言なりや。師答曰、諸宗ともに成佛の爲めにせよと、此一言を以て忽ち正法になす事也。然る間諸宗を集め、誰か成佛の爲めにするゞと僉議すへし。文字の爲め、智者の爲め、位の爲め、寺の爲めにするは、皆是れ成佛の爲めに非すと僉議して、敎へ修さすれは、一筋に正法に成る也。是れを申上度

念願計り也。

○十、一日去る道世者來て、修行の用心を問ふ。師示して曰く、萬事を打置て唯死に習はるべし。常に死に習つて、死の際を明け、誠に死する時、驚かぬやうにすべし。人を度し理を分る時こそ知惠は入れ、我成佛の爲めには何も知りたるは怨也。只土に成りて念佛を以て死に習はるべし。彼者云、盲安杖を常に披見仕る、是等を見る事も惡しや。師曰、見て覺ゆる事は皆怨也。只念佛を以て死を輕くすべし。又彼者、惡心休み欲心抔なしと云ふ。師曰、少しの處收りぬれば、是となし居る物也。何程無欲に成り、人好く成りたりとも、此娑婆を樂む念、又我身を思ふ念は休むへからす。是れを離れすんば皆是れ輪廻の業也。是念を滅するには、身心は是れ怨家なりときつと睨詰めて、念佛を以て責滅すばかり也。別に道理の入る事にも非ず、智惠の入る事にも非す、人を賴みて成佛する事にも非す、人の引て地獄へ落すにも非す、地獄へも天道へも只今の念が引て往く也。瞋恚は地獄、欲心は餓鬼、愚癡は畜生、是れを三惡道と云ふ也。此上に修羅人間天上の三善道を加へて、六道と云ふ也。皆是れ一心の內に有る六道也。此間を離れす、上に登り、下に下り、廻り休まさるを六道輪廻と云ふ也。是れは只今其方の心の輪廻するを以て知るべし。善念頓て惡念





に成り、惡心も亦善心に成る也。天道より地獄に往き、地獄より天道に往く證據是れ也。余の惡道を廻る事も如是。此念を離れて不生不滅なるを成佛と云ふ也。如是我と念根を修し盡して、成佛すること也。何として傍より其方の念を休めんや。強く眼を着け、南無阿彌陀佛〳〵と命を限りにひた責めに責めて、念根を切盡すべし。總じて大なる惡、及ばさる望は休む物也、されとも兎角なにか有る物也。念根の切盡す事難し。然る間此蝟袋を敵にし、念佛を以て申滅すへし。是れ念根を切る修行也。彼者云、然らば此身を離る事と心得て置くべきや。師呵して曰く、心得て置くは惡き也。佛道と云ふは心得て置く事に非す、身心を修し盡す事也。

○十一、一日誦經の次て示して曰く、体をすつくと持ち、機をほゞの下に落し付け、眼をすゑて誦經すべし。如是せは誦經を以て禪定の機を修し出すべし。ぬけからに成りて誦せば、功德とも成るへからすと也。

○十二、一日初入の僧、無緣の僧と成り諸國を乞食し廻らんと云ふて、師を辭す。師呵して曰く、內々聞きし事言語道斷無分別なる思ひ立ち也。先づ佛道を修せんと思ふ者は、善き師を求め善き友に交はる事肝要なり。然るに修行昨今の思ひ立ちにて、途方も無くすべ

をも辨へず、徒に諸國を行脚せんこと我同心なし。古來先達の行脚と云ふは、師を尋ね、道を求め、身命を不顧、千萬里の行脚をなすも有り、或は得法の人、諸方を勘辨に行脚せられたるも有り、或は丈夫底の人、萬緣に觸れ、いよ〳〵性をためさん爲めの行脚も有り、或は心有る人山水草木に向て、心を磨かん爲めの行脚は有れとも、其方如きの途方無き者の行脚を爲し、德有る事を知らす。在在處處を妄にうろたへ廻り、無作法者と成り、爲方無くは盜をもし、忽ち故なく惡人と成るへし。此つれに行脚して寶僧に成り、氣違ひに成りたる者數を知らす。我彼襟の者にあきはてり、沙汰を聞くもいや也。若し我異見をも聞かば留るべし、左無くは向後出入無益也。今世後世の緣を切ると大に呵し給へは、其者頓て留りぬ。

○十三、一日武士來て法要を問ふ。師示して曰く、後世を願ふと云ふは、此袋を何とも思はず打捨つる事也。是れを仕習ふより別の佛法を知らす、我は若き時より是れ計りを仕習ひし也。先づ千騎萬騎拔きそろへたる備の中に趨入り、胴腹を撞きぬかれて、死に〳〵して死習ひしに、是れは頓て仕習ひて趨入られたり。亦谷底に大蛇口を張り居るに飛込み、角に取着き居習ふに、是れも頓て仕習ひて角に取着き居られたり。爰になにもなき坪の下へ、只落ちて死んで見るに、中中張合無くして飛ばれさる也。然れとも此比になつて少し飛ばるゝかと思ふ也。各々もなにとも思はず、自由に捨らるゝ程さま〳〵工みて、此身を捨習はるべし。なる程強き心を用ゐすして叶ふべからずと也。

○十四、一日去る長老來云、某此比坐禪の時、只今死す〳〵と云ふ氣少しの間起る也。是れは氣のへりたる儀なるへしや。師聞て曰く、夫れは內より我に授くる也、第一能事也。此機起らさる者は、外より授くる事也。

○十五、夜話に曰く、修行と云ふ物、中中上り難き物也。我今十二時中坐禪ならさる事なし。喩へは大勢に交り、上下へかえし、相撲を取り、躍をゝとり、何程はね狂ひたりとも、坐禪の機少しもたじろくへからす。また好く若き時より心つきて自己を守りしが、其時分よりはや念には勝つてばかされざる也。夫れより次第よく修しつめ何たる事にもたじろかぬほどに仕付けたれとも、まだ夫れでも生死の爲めには不成、中々大儀な物也。

○十六、一日示して曰く、初心の人は先づ信心を祈り、呪陀羅尼をくりて身心を盡すが好き也。或は八句の陀羅尼を、十萬返も、二十萬返も、三十六萬返も唱へて業障を盡されば、志も進み眞實も起るへし。先づ能き御坊主を捨て、一向の土に成りて勤むへし。因に源長老

に向て曰、御長老も楞嚴呪をせめて一藏誦みめされよ、少々の事にては御長老も捨るへからすと也。在家の男女隨分誦呪念佛して、師の院に就き、塔婆を立て供養す。因是得德者數を不知。

○十七、一日向ゝ衆曰く、我此前より娑婆捨つたと思ひたるか、今思ふにそでも無き事也。さゞ今のもまだでかうろではあらしと思はるゝ也。

○十八、一日近比の遁世者に示して曰く、如何樣なる者も頭をすれば、早打上つて人に貴はれ、殊勝に成り、賢僧に成り、德有る御坊主の振をする也。今時の道心者皆此つれ計り也。其方も我法によらんと思はゞ、一向の土に成り、謙つて向上に眼を著けす、足元より修すべし。なまけた振をし、さも無き事を鼻に上げてありかんと思はゞ、出入無用也。

○十九、一日亡者弔ひの次て、師愕然として曰く、皆人計りを弔ふ〳〵と思つて、我も頓て弔らはるへしと云ふ事を知らず。假にも思ひよらず、只有りて俄に詰りてぎくついて死す。さても暗き物哉と也。

○二十、一日或武士に示して曰く、佛法なくして武勇つかはるへからす。血氣の勇は何程強しと云ふとも、とこゞに臆病なる處有るへし。我も高き坪の上に立て下を見れは、足振



へて臆病出づる也。佛法修行なくんば、大丈夫の漢と成るべからすと也。

○廿一、一日石平山に引籠む。僧師を辭す。師示して曰く、先つ道中油斷無く心を守り、古塚有らは施餓鬼を誦し弔ふて通るべし、塚に殘る亡魂慥に有る物也。疎に思ふべからず。是れ一つ。亦彼處に至りても何の變も有るべからす、替る事あらんと思ふ事莫かれ。誠に何としてもなんの變も無き物也。是れ一つ。亦今時の出家無信心にして小用の後手を洗はず、經卷を取り佛を禮するつれ也。彼處に至りて左樣の格をなすべからす。如何にも身心清淨にして禮拜誦經し、佛神三寶に道心を祈り、万靈を弔ひ、自己の功德を勤むべし。善惡ともに本に酬ふの理を能く知るべし。是れ一つ。亦和合僧とて僧は和合を守らで不叶、六和合を守て衆に交るべし。其故は人惡き者は、先づ居處もつまる物也。只人に負けばいつくに在りても住好かるべし。是れ一つ。亦彼處を住處と定め、近國の能き人を尋ね、行逢ひては歸り〳〵すべし。十人に逢へば十の德有る物也。是れ一つ。亦謙つて身を不ゝ惜、屎尿をも飛びかゝつて掴んで捨てんと思ふべし。萬事なまづけならして叶ふへからす。總して修行には身を使ふが好き也。是れ一つ。右の趣き能々持ちて道心堅固なるべし。必ず拔かすべからずと也。

〔德用〕これも老人の垂示にて、萬民德用といふ書なり。

○廿二、一日老ひたる武士來て曰く、某老ひたれども、まだ今時の若衆に何時でも頭を擧げさすべからずと、一口に呑込んで居る也。我武士一人にして遊民に非ざる間、惡道に落ちじと云ふ。師呵して曰、夫れに增したる惡道有らんや。誰をも彼をも一咬にと思ふは、畜生心也。畜生こそ己に劣るを呑み喰て驚し廻して我手柄とする物也。其方の心是れに同し。人間の心に非すと也。

○廿三、一日普請の時、衆僧筒筵に草臥たるを見て、示して曰く、何と御坊主達、誦經より爲し易しや。是れを以てよう思知れ、少しの間の誦經抔を大儀と思ふへからす。世間の者は日々にかやうの苦勞を爲し、世を過ぎる也。出家なほ通例に誦經抔してよかるべからす。亦晩に至りて曰く、普請は好き業障盡し也。業障を盡さねば修行上からすと也。

○廿四、一日去る人來て成佛を問ふ。師示して曰く、成佛と云ふは本來空に成る事也。元の如く我もなく、人も無く、法も無く、佛も無く、一切にくつとつゝ離れて、手を打拂ふて隙を明くる事也。悟にても何にても有らは、ろでは無き也。婆子燒庵の古則抔好き證據也。亦曰く、隙なき人折々來る事無用也、我云ふ程の事は德用、草分等に書く。あの外は云ふことなし。是れを好く見らるべし。彼者、隨分修行仕れど少しも上らすと云ふ。師曰、





たやすく成る事に非す、其やうに安く成る事ならば、我は羅漢にも菩薩にも成るへきが、未た餓鬼畜生を離れす、然る間次第つよに修すへし。一旦頭の火を拂ふ樣なりとも、跡つゞかざれば用に立たす、急に成る事と思はゞ退屈すへしと也。

○廿五、一日人來り世間物語を爲し歸る次て示して曰く、人皆一大事を忘れてたわ事計りをつきて、一生空く過す物也。あの樣な者はよせ度もなし。誰も機を拔かし付けたらば、心を取るへし。忘れて守る程無くては、事に合ふて不覺を取るへし。たくみて持つ間では、時々にぬける物也。

○廿六、一日老僧來りて法要を問ふ。師示して曰く、工夫修行成るへからす、只小庵に安居して晝夜經呪を誦し、無緣法界を吊ひ、日用を送らるべし。何と禮拜抔せらるゝや。彼人、中々三拜を仕ると云ふ。師曰、其つれにて何として眞實起るべし、責めて五百禮も千禮も爲し、身心を責めて業障を盡すへし。亦一生に成佛せんと思ふへからす。曠劫多生を懸けてする事也。何とぞ今度餓鬼畜生を出で責めて人間にならるへしと也。

○廿七、一日示して曰く、東へも西へも行かんと思ひ、一足づゝ運べば、必ず行き着く物也。然るに修し行する處に於ては、尺取虫の樣にもいじる者無し。皆婆婆に心を取られ居

る計り也。達磨大師は外諸緣を息め、內身喘ぐ事無く、心墻壁の如くにして以て道に入るへしと示し給へ共、今時は世緣を離れたる人さへ無しと也。

○廿八、去る曉衆に語て曰く毎曉時定つて道ならは三町計り行く間程、大事急に起つて中々切也。就中此二三年は、彌憂機にひしと責め詰めらるゝ也。時に一僧云、某の如きは守る處さへ取留めて、一處を守る機なし。師曰、工みて守る間にて知る事に非す、然れとも起る機を持たさる者は、巧みて授くるの外なし。扨亦守る處は念佛を申すも、幻化を觀ずるも、無常を觀ずるも一つ也。然れとも人人緣有る處有る物なるに仍て、さま〳〵に說有り、只緣有る處を守るべし。信心强き則んは、何れも替り無し。大略は皆娑婆に心を拔かして沈み居らんと也。

○廿九、一日去る者草分を誦み揖するを呵して曰く、我文もつゞかされとも、汝等か爲めに心の及ぶ程書出げて置くに、年來左右に乍居、是れを見分けぬと云ふ樣な、無道心なる事有らんや。扨もでかい恥不知哉。爰に有るは只我をたらして、飯を心安く喰はん爲めか。其面にて我前に好く出づる事也。夫れげな心にて先々にて我を賣り回り、我にも耻を與ふる也。乍去我耻はもはや二三年の耻也。汝か永劫閻魔の前の耻を顧みすや。扨々不義至極の





者哉。我處に在らば佛行大形にしてなりとも、先つ我書を見分け不審も有らば問ひ窮め置くへきに、文字さへ見分けさるは余り慚愧の事也。只汝は追出して乞食させたるか慈悲なるべし。思ひ切つて世緣をづんと離れ、身を捨て、乞食し、乞出せば食し、若し乞出ずんば餓死せんと思ひ切つて、天道に任せて行脚せは、樂に居て飲喰し、佛行を爲したるよりも增しなるへし。必す無緣乞食修行すへしと也。

○三十、夜話の次で去る人、今時の出家には道心なしと云ふ。師聞て曰く、道心無き事は置て、先づ家を出たる者一人もなし。其故は今寺を追出したらば皆迷惑すべし。亦彼人云、今時の出家は佛事供養にも、施物少ければ惡く云ふ也。師曰く、それは當分使ふ事も有れは、貪るもまた道理あり、寺と云ふ物は、持つ程苦也。然れともすき好みて離れす、未た持ざる者は是れを羨む。然るに志は賓也、志さへ少し付けは世間かいやに成るに仍て、望も休み、寺をも捨つる也。如是なり共修行者とは云はれず、され共是れ程の人も無し、況んや人喰犬のやうに急度咬みしめて居る氣質を修し出す人無し。扨も是非なき事也。

○三十一、一日江州衆來り、國本にては何れも本秀和尙の敎へを承ると云ふ。師聞て曰く、一段の事也。此和尙は人を損ふ事有るべからす、今時道者と云ふ人先づ我能き者に成りて

打ち上り、人を印可して其儘人を惡くする也。然るに此和尙は先づ我足らずに居らるゝ間、何として人を許されんや。師亦曰く、其邊にては若き衆、法を聞き伎量過ぐると云ふ沙汰なしや。我少しあぶなく思ふ也。彼人、沙汰無しと云ふ。師亦曰、其地の何某は此前死苦に責られける間、今に賴數思ふが、彌修行募りて見ゆるや。彼人、今程沙汰もなしと云ふ。師曰、一旦死の來る事有りとも油斷し、娑婆すきに成りたらば、跡もなくなるへし。少々死の來る樣也共、ひしと死機に成る事は、功を積まずんば有るべからず。我も六十余りにして慥に是れを知ると也。

○三十二、一日去る人弘法大師の念佛の釋を持し來り、是れ佛法の至極と承はると、秘して師に呈す。師見終はて有難き物也と讃めて、彼者を歸し給ふ。後に一僧あり云ふ、何某殿のやうなる風てそよけれ、あのやうなる愚癡なる者には挨拶も仕度なし。師聞て曰、能き人に比へて捨てば、取る者有るへからす、あれは尊き心にて佛道に入る也。あの心無けれは引入れへき處なし。あれはあのなりに進め入れたるがよき也。夫れこそ應機說法なるべしと也。

○卅三、一日人來て曰く、去る大名の奧方、我むさき事をなして、人にさらえさする事恐





れ也と云ふて、雪隱をさらゆる者に錢をくれ給ふと云ふ。師聞て曰く、扨々有難人哉、尤もの事也。我も衆聚りたらは片廻りにさらえさすべし。後世を願ふ者はさなき事にさへ、人を使ふは惡き也。是れは好き事を聞きたり。是れに付て古き物語を思ひ出す。去る山寺に博士一宿す。明る日其寺に十二三の兒有るを見て曰く、此兒夕までは三日のうちに死ずべき相有りけるか、今朝は八十迄の長命の相に成る。一夜の中に七十年の壽延びたる事不思議也。何たる善心を起されたぞ、いかなる善根ばしせられたぞと問ふ。一寺の衆も驚き子細を問ふ。兒曰く、何たる善根もなしたるおぼえなし。夕雪隱に行きければ、蹈板よとれて暫時がほども居にくかりし時、ふと思ひ當るやうは、片時の間さえかやうに居にくきに、我母は總身屎尿になれども、更に苦と思ふ念なく、只かはゆいと計り思ひ給へる深恩、扨々報じ難き事哉と、此恩に報ふと思ひ、手を以て雪隱の板のよてれたるを拂ひ淸む、別に覺えなしと云ふ。人々此功德なりとて感せられたると云ふ。是れ貴き物語りに有らすやと也。

○卅四、夜話に曰く、古の祖師達にも、修行熟せるは少しと見えたり。大方小見解を是とし、經文語錄を以て法語を書き、敎化抑して語錄等を殘されたると思ふ也。なければこそ

強く心を修した位を、誰でも書き殘したる人なし。皆心安く際を明けて成らぬと云ふ事を云ひ置きたる人なし。我は末世に殘すならば、何とも成らぬ物ぢやと云ふ事を書付けて殘すへしと也。

○卅五、一日示して曰く、皆行する處に眼を著けて強く行すべし。先づ念佛を申さん人は、念佛に勢を入れて南無阿彌陀佛〳〵と唱ふへし。如是せば妄想いつ去ると無く自ら休むへし。譬へば事忙敷家には客來れども頓て歸るか如し。縱ひ妄想起るとも、強く勤めて取合はずんは頓て滅すへし。然る間起る處の念には不搏、行する處に眼を付けて修すべし。功重ちば坐禪の機備り、二王の機抔と云ふ事も知るへしと也。

○卅六、師一日語て曰く、此前曹洞宗の僧、江湖頭の立願に、越後國五地の如來に籠り居ける折節、奥方の坐頭、官の爲めに上洛するとて、此堂に一宿す。時に彼の僧彼か官錢を盜み、忽ち盲目と成り、一生愁ひ悔ひて死す。坐頭は忽ち目明けり。其坐頭の琵琶、如來堂に今にあり。我若き時其僧を見たると、三州にて去る僧慥に語られたり。實に然るへき事也。世の人さへ不能事を祈るは非譏也。況んや出家抔の名聞利養を祈る程の大罪有らんや。各々も泣長老に成らんより、獨庵坊主に成り、心安く過ぎらるへしと也。





○卅七、慶安四辛卯春示して曰く、見解有るよりも死機起るか好き也。我も若き時よりもろい機は有りけるか、死機は遙か後にぞ移れり。今は頸抔切らるゝ者の心は、其儘我頸を切らるゝ樣に移る也。總して人の死したると聞くと、其機其儘移る也。其方達の胸には、如何程通するや心元なし。我死苦に責めらるゝと云ふ事、胸をきつき、中々憂きもの也。久敷有らば機へるべき物也。乍去今はませぬ也。我も始めは惡き事かと思ひけるか、後思へば此機萬病圓也。どつても收り理まで働きて出たり、今も死機持ちたる者は、次第に能く成る也。然れは死機は生死の離れ始めかと覺ゆる也。

○卅八、一日示しで曰く、道を知らぬは是非も無き事也。今時侍の子どもが出家して、死人の皮を剝ぎ、世を渡る者多し。究めたる非興也。菩提の爲めには出家然るべし。身過の爲めには非義也。百石も望むこそ苦なれ、身一つ過ぎる分は安き事也。必ず志なく無道心にして出家し、人の信施を受くへからす。一向足輕にてもして過ぎたるか能き也。世間を以て地獄に入りたるは、佛法を以て救ふ賴みあり、佛法を以て地獄に入りたる者、なにを以て救ふへきや。永劫浮ふへき便り無しと也。

○卅九、一日語て曰く、我此前洛陽に有りし時、紫野より僧一人來り、古則抔問ひけるに、